

河關北の大都府たる景觀を有し、大槻磐溪の所謂『一宮楊柳是平泉、掌握二州兵馬權、上國戰塵飛不到、春風占斷九十年』なるを得たる也。しかも此豪奢と、此權勢と、夙に賴朝の疑懼を買ひ、遂に其攻略と共にさしも榮華の夢の跡、夏草の茂るに任せたるこそ果敢なけれ。しかも平泉一帯の地が歩々に懷古の情を誘ふは、這箇一大盛衰の眼前に髣髴するに由らすんばあらず。以下、やゝ重複の嫌ひなきにあらざるも、暫く文士の筆をかりて尙當年の豪華を偲ばんかな。

平泉懷古

笹川臨風

鹽竈松島の夢見飽かて、また平泉にさまよひぬ。蕭々たる雨古跡を封じて六百年の廢墟寂しく、一路の秋風長へに榮華の跡を吹きぬ。先づ夏草やの句碑の前を過りて毛越寺の遺跡を訪へば大泉池に蘆荻生ひ茂りて南大門の斷礎は草の中に残れり。常行堂の下に立ちて見ぬ古を思ほへば夢より淡き世なるかな。四十餘宇の堂塔五百又餘の禪房參差相列りて梵唄の聲は遠く達谷の窟を震はし、其金堂は基衡の建つる所、金銀を鏤

め、紫檀赤木を用ひ、丈六の薬師、十二神將は佛師運慶の作る所なりと云ふ。基衡の運慶に本尊の造立を乞ふや、金百兩、鷲の羽百尻、七間々半徑水豹皮六千餘枚、安達絹十疋、希婦の細布二千端、糠部の駿馬五十疋、白布三千端、信夫毛地摺千端、別に山海の珍物を副へて之に贈り、三年功を終るの間山道海道、人夫物を運ぶもの往來絶えず、又別祿として生美の絹を船三艘に積んで之を送る。運慶驚喜して戯れに猶練絹を乞へば又練絹三艘を送る。其成るに及んで鳥羽法皇佛像を拜みて其比類なきを賞て洛外に出すべからずと宣ひしと傳ふるに非ずや。事の誇大に失したるや論なしと雖も、亦是れ豪富の片影を映したるものに非ざるなきか。四壁并に三面の扉に法華經二十八品の大意を書きたる嘉勝寺、洛陽の靈地名所を書きたる阿彌陀堂。草離々として滿目蕭條たる所、嗚呼今焉にか之を求むべき。干手堂に秀衡の木像を觀、義經堂の下を過りて中尊寺に上る。老杉陰暗きところを辿りて上下四壁内殿皆金色燦爛として三壇螺蛸を點し、三尊阿彌陀二天六地藏悉く定朝の作と傳へられたる、金色堂に到るに、

三代榮華の跡を残して風雨六百年懐古の面影を留めぬ。「内外共に漆にて塗り金箔にて濃み申候、棺一重に御座候」と元文年間の届書に秘鑰を開きたる三代の見果てぬ夢の名残は今猶此に存するなり。古は中尊寺の寺塔四十餘宇、禪房三百餘と注せられぬ。清衡の六郡を領するや先づ之を草創し、白河關より外濱に至るを二十餘日の行程となし、一町毎に笠率都婆を立て、面に金色の阿彌陀像を畫き、領内の中心を計りて關山の頂に一基の塔を建て、寺院の中央に多寶寺を置き、中間に關路を開いて旅人往還の道を爲せりと云ふ。經藏には今猶三代納むる所の三種の一切經を藏し、辨財天堂には最勝王經十界寶塔紗紙金泥細字の曼荼羅を懸けたり。觀ることやや久し。嵐氣人に逼りて日も亦將に暮れなんとす。急に舊路を下れば峰巒遠く連りて北上川其下を流れ、煙雨漸く霽れて遠村近郊も現はれぬ。一帶の溪流中尊寺の背を繞るものは是れ衣川か。安倍頼時父子をして六郡の富と兵とを有して據らしめたるは是れなるべし。一丸泥を以て衣川關を封ずれば誰か能く破るものあらんやとは、當時彼等が疾呼したる所なり。

き。源氏累代の勇を以てして、將軍頼義の驍武を以てして、騎射神の如しと唄はれたる八幡太郎の勇幹を以てして、精銳比ひなかりし東國の武士を率ゐて衣川柵に苦み、鳥海柵に敗れたるは何が故ぞ僅に出羽清原氏に贈るに奇珍を以てし、誘ふに甘言を以てして其援を得て前後九年の久しきを経て長六尺有餘腰圍七尺四寸の巨魁を倒し得たるもの、又以て安倍氏の強を知るに足らんか。貞任死すと雖も、從者涙を垂れて曰く、吾が主存生の時之を仰ぐこと高天の如し、豈圖らんや吾か垢櫛を以て忝くも其髪を梳らんとはと。六郡の長は奥の霸王たりしなり。其衣川に據るや、西は白河關を界して十餘の行程となし、東は外濱に據りて又十餘日、其中央に當つて關門を開き、名けて衣關と曰ひ、三十餘里の間櫻樹を植えて春時の觀覽に供す。西行曾て過ぎて詠じて曰く、ききもせず東稻山オスネヤマの櫻花吉野の外にかゝるべしとはと。壯なる哉安倍氏の業や。東北の風氣を開けざるや實に久し。蝦夷の叛乱は歷朝の力を用ひて鎮征したる處。或ひは多治比縣守の征討となり、或は藤原宇合の進軍となり大野東人の鎮守府將軍任命

なり、伊治皆磨の叛乱となり、紀古佐美の敗軍となり。多賀城置かれ、秋田城築かれ、伊治城建てられ、覺籠城設けられ、坂東の歩騎は令一發の下に雲霞の如く集りしと雖も、之を勦すに至らざりき。其後桓武の豪華と坂上將軍の勇略とを以て皇威邊土に及び、文屋綿麿能く前人の跡をつぎ、藤原保則等治民の術に長じて東北一たび王化に潤ひき。蝦夷は斯くの如くにして退歩したりと雖も、豪族私領の允許ありて割據の勢は又此に胚胎しぬ。加ふるに清和以後藤原氏權を專にしてより中央政府の紀綱紊亂して施て地方政治の弛解となりぬ。延喜の政は古今之を稱すと雖も三善清行をして封事十二條を上りて切々時事を痛言せしめたるに非ずや。朱雀以後に至つては又云ふに忍びず。勢家權を擅にし、政治全く舉らず。朝綱地に墜ちて地方紊亂し、國司令を奉ぜずして正税公廩稻の乱雜となり、政廢して豪族の跳梁となる。尾張國の解文に稱する所の如きものは其一例に過ぎざるのみ。天慶の乱是に於てか起り、源平二氏是に於てか盛んに、終に武門天下の權を私するの源を開きぬ。

一條の長徳三年には盜、上總權介季雅の家を抄掠するものあり。保元には平致頼、前下野守維衡と戦ふあり。同五年には平佐良、府館を燬いて官物を掠め、後一條の寛仁三年には盜、火を凝華舎に放つものあり。後朱雀の長久元年には京師盜賊横行し、連夜放火し、夜宮中に入つて御衣を盗むものあり。此類のもの擧げて數ふべからず。朱雀以後の歴史は殆ど是れ一編の暗黒時代の映影のみ。安倍氏は恰も斯くの如きの時に當つて東北に據有したるなり。頼時貞任の勇にして士心を得たる、其氣宇の濶くして遠く肅慎に赴きたりと傳へられたる、彼等の眼底には紊亂したる中央政府は映ぜざりしなり。國司の如きはもとより豚犬のみ。其鼻息を窺ふに過ぎざりき。頼時の子井殿盲目、厨川次郎貞任、鳥海三郎宗任、境講師官照、黒澤尻五郎正任、白鳥八郎行任及び女子三人第宅軒を並べ、郎従の屋舎其傍を繞り、今猶琵琶柵、山松館、白鳥館、衣川柵の跡を存するもの、孰れか安倍氏盛大の餘風ならざるべき。

安倍氏亡ぶと雖も、清原氏遺領に據りて再び東北の地を席卷し、武則鎮守府將軍に任

せられて、奥羽其靡く所となれり。清原氏の内乱は其養ふ所の藤原秀郷の裔と聞えたる亘理清衡をして其志を獲せしめ、江刺郡豊田館を平泉に移して三世九十餘年の榮華は是に於てか始まりぬ。清衡の中尊寺願文ぐんもんに云はずや。出羽陸奥の土俗は風に従ふ草の如く、肅慎邑婁の海蠻向陽の苔に類し、垂拱寧息三十餘年と。既に奥州に覇を稱して現世の榮華に耽る。恐るゝ所は後世にあり。望む所は極樂にあり。是に於てか關山中尊寺の建立となり、奥に京洛大寺の摸型を作りぬ。基衡之に繼いで三十年間の榮華は父に超えたりと稱せらる。既に中尊寺は其父に依つて成れり。子たるもの亦之に劣るべけんや。今日一片の斷礎を殘せる毛越寺は是に於てか建立せられぬ。正月には終しゅう正會しゅうま、慈覺講じぎやくかう、常行堂會じやうかうどうかい、最勝會さいせうかいを設けてより十二月の長日延命講えんめいかう、彌陀講に至るまで一歳法會ぽうかいを絶たず。秀衡の榮耀は其父祖に勝り、絶えたるを繼ぎ廢れたるを興し無量光壽院を建て、宇治の平等院に摸し、其北方に平泉館を構へ、諸子の第相連り、又別に一廓くわくを設けて伽羅樂がらがくと云ひ、阿彌陀の大南門南北路より東西數十町宿舍軒を並べ、

又數十宇の高屋を建つと云ふ。今尙金鷄山に漆萬盃黃金を埋めたるの口碑を存し、朝日さす夕日かがやく木のもとに漆萬盃黃金億々の歌を殘せるもの、平泉當時の繁華と豪奢とを思はずんばあらざるなり。

春の朝には東稻山トウシヤマに雲かとはかり咲き亂れたる櫻花を眺めて衣香釵影群をなし、秋の夕には北上川にうつれる月影を掬して舞袖の翩々たるを賞で、一山の法會には善男善女市をなし、維れ冬。雪花紛々の候には將軍自ら馬に策して狩獵の興に前山後嶺を搖かし、平泉は當時に於ける奥羽第一の都會なりき。關伽堂に今猶存する二幅の平泉古圖を展するもの誰か當年の豪華を憶はざらんや。

獨り地の僻にして險なるが故のみに非ず。三世は唯平泉の榮華に酔うて、又中央の紊亂に乗じて雄飛を試むることを敢てせざりき。頼朝霸府を開いて天下を一統すと雖も奥羽は猶其有に非ず。然れども秀衡猶存せば之を倒すこと難きものあり。義經の奥に投ずるや、秀衡其子弟に義經を奉じて鎌倉に當るべきを命じぬ。

恰も是れ秀衡が八十歳の高齡を以て一片の屍を金箔に包まれて金色堂の下に安臥せんとしたる時なりき。しかすがに秀衡は天下の大勢に通じたる所ありき。彼は略今後の形勢を知りたり。義經を助けて鎌倉に當るべきは平泉の繁華を保つの道なるを知りしなり。雄略當時に比類稀なりし義經をして東北の健兒を率ゐて白河關、伊達大木戸を扼せしめば、鎌倉覇府の威を以てするも、或は寸歩を奥羽に加ふる能はざりしやも亦知るべからず。泰衡是をしも察せず。懷に投じたる英雄を戮して鎌倉に和を乞へり。秀衡の死は是れ鎌倉將軍が手を拍つて喜ぶの報なりき。豚兒泰衡は果して義經を殺せり。奥羽を鎮するは掌を繻へすが如し。奥羽征討の軍は鎌倉將軍自ら將として進發せられたる也。

二千の精銳は白河の關を超えぬ。秋風に草木の露を拂はせて君が超ゆれば關守もなしとは當時の實景なりき。厚樑アツカシの險は泰衡の異母兄西木戸太郎國衡が守る所、國見宿と厚樑との山間に五丈の堀を構へて阿武隈の水を引けり。鎌倉勢は物ともせず之を破

り、國衡敗死して南門の固瓦かたがわ解しぬ。大旆直に進んで多賀の國府に立てり。泰衡戰慄して多賀波々城に防ぐ能はず。津久毛橋を扼する能はず。周章し狼狽し、天險を棄て死守を敢てせずして平泉を過ぎて入らず、火を館宅に放つて遁れぬ。花の如き子女東西に迷ひ、歌舞臺上紅焰漲れり。三代の綺羅一朝にして焦土となりき。鎌倉將軍の平泉に入るや、秋風空しく炬燵の跡を吹いて、繁華一場の夢と化したる後なりき。一字の倉廩焰を遁るゝもの裡に錦繡綾羅珠玉珍寶を藏として其數算すべからざりしと云ふ泰衡贅棚に其郎黨の誘殺する所となりて、奥羽鎌倉の掌裡に歸しぬ。出羽陸奥押領使六郡の領主の末路何ぞ慘なる。僅に由利八郎が幕廷に萬丈の氣焰を吐きたると、僧助公が『昔にもならざる夜よるのしるしには今夜こよひの月し曇りぬるかな』と嗟嘆したることを他にして、平泉の最期は甚だ勇しからざりしなり。是より後東北長く振はず。山河依然たりと雖も人や争や總て幻と消えぬ。

冥想多時、顧みすれば東稻山タニシネ金鷄山も暮雲の間に漂ひぬ。高館のほとりには夕煙さま

よへり。古墟落寞として唯關山の鐘聲古を弔ふを聞く。然れとも往いて鎌倉を訪へ、秋色、將軍暮畔に深くして覇府の跡空しく蟋蟀の鳴くあるのみ。

大槻 磐 溪

三世豪華擬帝京。朱樓碧殿接雲長。唯今
唯有東山日。來昭當年金色堂。
管月絃風鎮奥州。餘音翳々記銷流。一聲
龍笛傳家秘。吹起三衡全盛秋。

現時の平泉

膽澤郡前澤驛より南二里にして平泉停車場に着すべし。平泉の宿驛は微々たる寒驛に過さざるが、其停車場の途中下車驛たるは云ふまでもなく、高館、中尊寺、毛越寺及び達谷の窟等の存するあれば也。これ等遺跡の歴史に就いては既に攬略し終りたれば、これより愈よ其現狀を訪ねんとす。

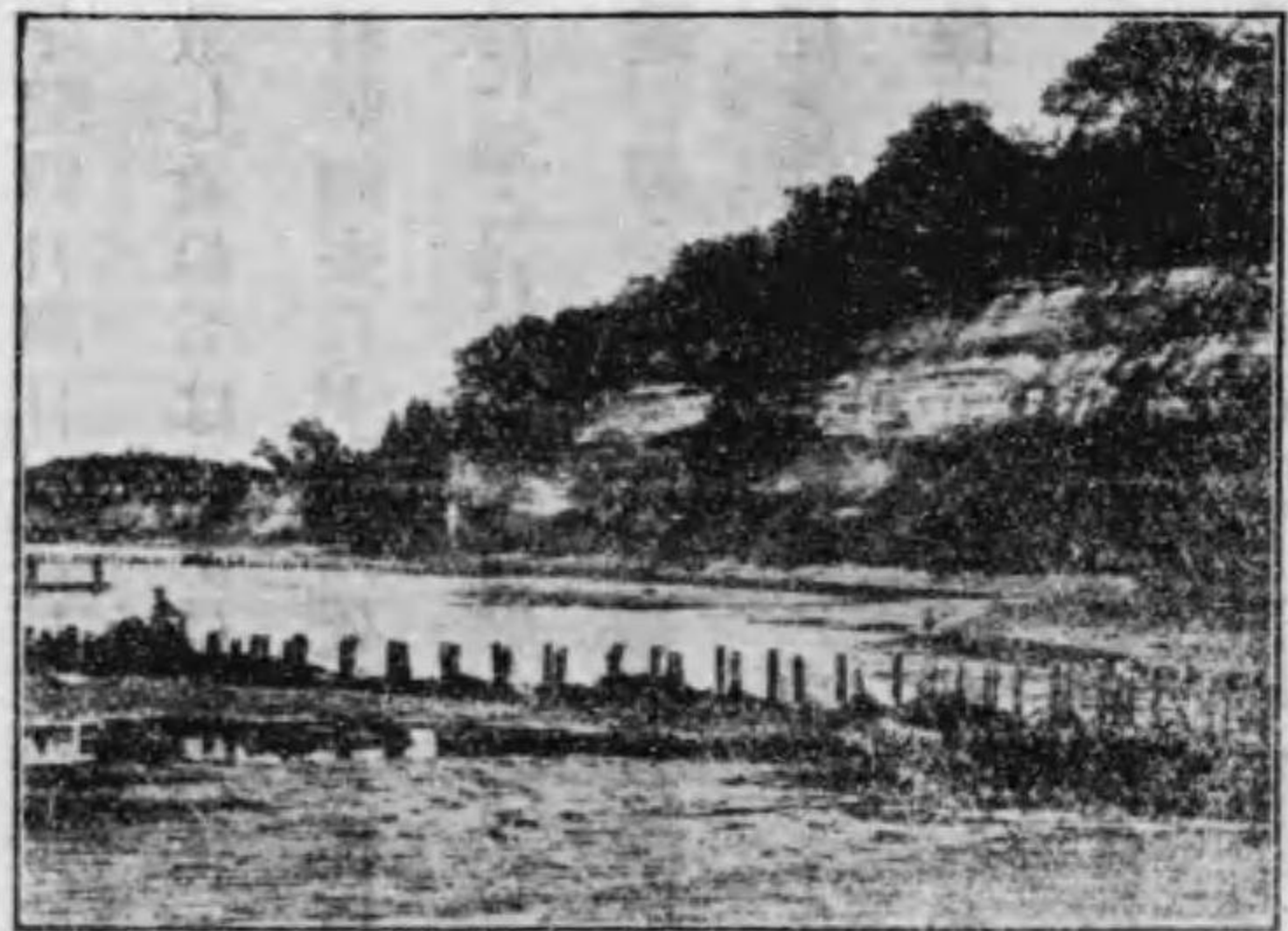
平泉館趾

此地の名産水餅の招帘を懸けたる宿驛を北へ北へと進み行けば、導者は頓て平泉館趾の所在を指點すべし。そは今尋常の田疇に過ぎざるが昔は即ち清衡、

基衡、秀衡三代の居館にして泰衡も亦相繼いで居れる所なり。中尊寺なる平泉古圖によれば、其正門は南方に向ひて前方一面の侍小路を控へ、本館の後方に伽羅御所（又嘉樂館と云ふ）、無量光院、相連る。伽羅御所は今猶御所屋敷と稱せられ、無量光院はまた宇治平等院を摸せしものと云ふ。現時の街道はこれ等の趾を過ぎれる事となる。

高館

更に進むこと幾何ならず、透進なる松並木をうしろに見て、坦道の右手に當り、隴畝を隔て、一基の丘陵の蔚蒼たる緑林を被いつ、峙てるを見るべし。これなん一名を判官館と稱する高館にして、彼の平泉館本館の西北隅に當る。「高館—



判官館

義經の遺趾」と記されたる木杭を便りに、小徑を田間に求めて其頂に登りゆけば、げ

に晝猶暗き石礎かな。こゝは一帶長方形を爲せる臺地にして、其西北端に一字の堂を建つ。中に源義經の像を安置せり。憶ひ起す、文治五年閏四月晦日、さしも稀世の英雄も、秀衡の遺旨を蔑にして翻然來襲せる泰衡が勢に敵し兼ねては、あはれ三十一歳を一期とし、一拳石に踞しつゝ、自刃しぬ。其最期まで君が側去らず、殉死せる從臣の墓と推せらるゝもの、此丘の西側なる叢中に埋れて、世に知られざる事幾年なりけん。義經の首級のみは、長途遙かに腰越に齎らされしが、遂に鎌倉に入らずして藤澤に葬られたり。此後、天和中、郡司河東田定恒、平泉の衆徒と共に伊達綱村に申議して一字の祠堂を創立し、義經堂と號せしが、寶曆に至り舊像を再興して白旗神社と改め、以て現時に及ぶ。件の堂宇即ち是なり。祠堂の傍には、時の東宮殿下行啓の記念標あり。直ちに數十丈の懸崖となりて北上川に臨む。遙に對岸を眺むれば、形勝宛然たる東稻山、ゆるやかに聳えたち、其景色のみを以てするも確に、平泉第一を以て稱すべし。平泉誌の記する處によるに此館趾百年以前にあつては、東西四百六十間餘、南北

百三十間餘、高さ五十間なりき。當時北上川は東山の麓を流れたりしが、今は此館の下を流るゝに至れり。然かも懸崖の崩壊は今尙止まず、年々其高地を狭め行くを以て、目下山上平坦の處巾十間より二十間を算し、東南より西北への延長八十間に及ぶも、何時かは崩壊し盡すことなしとも限らず。高地の東南端には新神社あり。昔時は羽黒權現と云へる祠にして其地域十間四方ばかり、亦樹木蔚生せり。其東西の麓を俚人現に今柳御所と云ふも、古書に所謂柳御所は其北隣に當り大部分現時の河中なるべく、南は猫間淵趾を挾んで平泉館趾に連れる如く、北は辨慶屋敷に接せり。柳御所は元清衡基衡の居館にして、後前民部少輔基成之に居り、義經も其都を落ちて秀衡の許に來りし始め之に居れりと傳ふ。一説には高館、今柳御所も柳御所の境域に屬すべきものなりとも云へり。

關 中 尊 寺

高館より再び本道に出て瀛車道を横斷し櫻川を渡れば、蕭疎たる數軒の村家相連り、その窮まる所老杉の鬱蒼たる下蔭に一條の坂路を起すべし。高

館より八町。これ即ち月見坂にしてこれより愈よ中尊寺の境内となる。關山中尊寺は一山の境内東西十七町三十間、南北十三町、東は國道を限り、西は平泉村字戸河内、南は全平泉、北は膽澤郡衣川村の境を限る。而して其地勢に就て云へば、東は高館及び平泉館に對し、又東山の連峯逶迤として北上川の長流汪洋たり。西は山隘に關門の古跡あり。右は道路を顧み、左は近く月山の清時蓮臺野の高原に隣り、遠く駒ヶ嶽の秀峯を望み、南は鶏足の洞鐘ヶ岳より毛越寺達谷に接し、北は琵琶柵の舊墟衣川の流水を負ふ。此寺は五十四代仁明天皇の御宇嘉祥三年慈覺大師の開基にして、初めは經山の中央に一字の本堂を建て、弘臺壽院と稱せしが、清和天皇の貞觀元年に及びて始めて中尊寺の寺號を賜ひ、是より歴代の天皇信仰淺からず。堀河天皇の二年、勅命あり。藤原清衡をして當寺を經營せしめ、天仁二年始めて工を竣へ、堂塔四十餘、僧坊三百餘に及び、その盛んなる真に海内屈指の佛界靈場たりしが、惜むべし、建武四年野火延焼して堂宇悉く烏有に歸し、會々残れる堂宇は唯經藏、金色堂の二字のみ（經

藏は二階だけ焼失せり）。伊達家領有後一山の境内を定め寺領を附せるが、近代徒社堂の荒廢を歎き伊達家の庇護を仰ぎ、協力して絶えたるを繼ぎ廢れたるを興し、舊趾遺礎に本づき小祠假堂數宇を建立せり。先づ例の杉樹畫尙暗き坂路を辿ること四五町に及びば路の右方俄かに開けて山麓に國道を俯瞰する處に出づ。こゝには嘗て時の東宮殿下の御野立所たりし亭あり。かなた衣川の鐵橋を架したる附近は辨慶の立往生を爲したる所なりとの俗傳あり。更に進むこと少許にして左方に辨慶堂あり。辨慶の像を安置す。それより又更に進めは坂路漸く盡きて現在の中尊寺（總別當）門前に至る。本堂は近年改築し、宏壯にして美麗なり。こゝより有名なる金色堂は最早間近にあれば以下金色堂を始めとし、そを中心として一山の著名なる堂宇を紹介すべし。

中尊寺觀覽券

| | | | |
|------|----|-------|----|
| 金色堂 | 二錢 | 經藏辨財天 | 十錢 |
| 寶物倉庫 | 十錢 | 辨慶堂 | 六錢 |
| 藥師堂 | 七錢 | | |

金色堂 觀覽券發賣所の南は地勢や、小高く石階の傍に芭蕉の句を刻せるを見る。

五月雨の降残してや光堂 芭蕉翁



堂色金寺尊中

色を輝かす。内部は鐫柱彫梁悉く螺鈿珠玉を飾り、中壇の四隅には七寶莊嚴丹青の柱

參天の老杉轟々としてめぐれる所外觀質素なる一字の堂あり。大さ僅に方三間のみ。しかもこれぞ、正應元年鎌倉將軍惟康親王が、其の雨露の爲に金装の剝脱せんことを惜み、覆堂を作り給へる金色堂、一名光堂にして、一度其内部に入らんか、其麗嚴轉た人を驚かしむるものあり。中の間は七尺二寸、兩脇の間五尺五寸、柱高さ一丈九寸、内外上下四面悉く麁布を掛け黒漆して其地を重厚にし、金箔を貼し金

を立て柱毎に十二光佛を圖す。此柱は實に本邦金箔蒔繪の濫觴にして、嘗て故小杉榎



部内の堂色金

郵博士をして『流石は黄金國なる陸奥の事とてかくは多くの黄金を用ゐしならん。後世鎌倉に於て金箔蒔繪の製作ありたれども、其材料たる黄金の乏しき爲僅かに硯蓋位の大さに過ぎざりき。獨り金色堂の卷柱に至つて眞にこれ海内絶無』と嘆賞せしめたるもの也。堂内中央の壇上には阿彌陀、觀音、勢至、多門、二天、六地藏等都て如來部彫刻の第一人法橋定朝の作にかゝるもの十一軀を安置せり。左右の壇上も亦同じ。三壇中には藤氏三代の棺を納む。即ち中央は清衡、左は基衡、右は秀衡にして、秀衡の棺側には其子泉二郎忠衡の首桶あり。遺骸各儼然として存在すと傳ふ。堂は明治三十三年特別保護法に與る。

●**經藏** 金色堂に隣りて其西北數十歩の處にあり。天仁元年清衡の建立にして元二階建なりしか、建武四年の災に上層焼失し、其殘る所に修理を加へたり。三間四面、六尺六寸間にして柱の高さ礎石より一丈二尺なり。堂中八架を設け、三代寄附する所の一切經を藏む。其函廣さ七寸長さ一尺五分高さ三寸五分、黒漆にして蓋に螺鈿を以て經卷の題目を鏤め、部帙を見はせり。清衡の納めしは紺紙金銀泥にして一行交字なり。是堀河鳥羽兩天皇の勅願として寺堂を建立し納むる所の經卷なり。其一切經は自在房蓮光奉行となりて八ヶ年間書寫せり。其賞として經藏別當に補せらる。基衡の納めしは紺紙金泥なり。秀衡の納めしは黄紙宋版なり。當時清衡の私領骨寺(今の本寺なり)其他數ヶ所の莊園を寄附せり。爾來世々の國司地頭相繼いて莊園を寄附し、其寄文數通を相傳す。本尊は文珠獅子座。右は優闍王、轡を把り、淨名居士拂子を採て其後に立つ。左は善哉童子匣を捧げて従ひ、佛陀波利錫杖を持つて後に立てる像なり。各毘首羯摩の作にして精妙比類なし。鳥羽天皇御願によつて下し給へる靈佛なり。千手觀

音二十八部衆白檀像は運慶の作にして基衡の持佛なり。別當は大長壽院なり。

●**辨財天堂** 金色堂より石階を舊路に復し、更に之を北に過ぎ一泓の池水を渡れば、其の中嶋に辨財天堂あり。本尊及び十五童子は安阿彌の作なり。往昔は最勝院と號せり。此堂の中に收むる十界寶塔曼荼羅十帖は天下に匹儔を見ざる尤物にして、最勝王經全文を金書して成れるものとす。

●**寶藏** 金色堂の東北に一條の低路を挾んで白壁の新しき建築物あり。これ中尊寺に残存せる寶物を集めて收藏せる倉庫にして、奇什珍寶其數さはなるが中に一字金輪木造座像(中尊寺外十七院所有)は其彫刻の精妙なる殆と絶倫なり。運慶の作にして秀衡の持佛たりしもの。俗に之人肌の觀音と稱し、其相好の微妙なる事、其法衣の垂れたる様、一見して其木造なるを信ずる能はず、一山の國寶數種を算すと雖これを以て第一とす。其他古文書、佛畫等も多し。

因に寶藏以外にある寶物の重なる物を列記すれば木造天蓋二面、銅造幡頭三枚(金色堂所有)、銅造華曼(全上)

螺鈿八角須彌壇一基(經藏所有)、螺鈿卓、螺鈿燈臺、木造禮磬各一個(全上)等なり。

●●●●●
藥師堂

金色堂の東北にあり。元峯の藥師堂にして其舊趾は金色堂の南に當り、鷄

中尊寺國寶一字金輪佛像



足の洞の東北にあり。本尊金容の丈六藥師は運慶の作なり。彌陀、觀音、勢至の三檀金像たんとんは清衡の持佛なり。舊堂荒廢の後天正の頃佛像を失ひしが再び出現の時に至り、靈夢ありて延寶九年八月五日此堂跡を掘りしに其像土中より出てければ、今の堂に之をも配安せり。龕は伊達家の寄附なり。別當は願成就院之に當れり。

●●●●●
白山神社

金色堂の東北にありて、此山の鎮守なり。仁明天皇の御宇嘉祥三年慈覺

大師の勸請にして加賀の白山を分祠し、白山權現と號せり。即ち大師の作十一面觀音

を本地佛とす。配佛正觀音は運慶の作にして樋爪五郎秀衡の持佛なり。毘沙門天は源義經の持佛なり。祠殿は豎横六尺、奥行一尺六寸許。徳治三年の建立にして嘉永二年焼失し、今の社殿は全六年伊達家の再建なり。維新後村社白山社となれるも、其五月六、七兩日を以て行はるゝ祭式は、其由來遠くして、甚だ盛んなり。今猶舞臺を營し能樂を修せり。

●●●●●
鐘樓

金色堂の東北にあり。舊趾に假堂を建て梵鐘を懸く。鐘の長さ四尺一寸、口

徑二尺一寸、厚さ三寸。銘及び序文あり。元の鐘樓は天仁元年の建立なり。夫より二百三十三年を経て建武の野火に焼亡せり。後康永二年頼榮法師再び鑄造せしは此鐘にして頼榮は金色院の住僧なり。現存の重なるもの略右の如きが、此外にも山王社、釋迦堂、闕伽堂、大日堂、千手堂、觀音堂、阿彌陀堂、愛宕堂、白虎山稻荷寺等記すべきもの多し。若し夫れ遺趾に至つては山中悉くこれにして到底儻指するに違あらず。其の數例を擧ぐるも金堂趾あり、多寶塔趾あり。三重塔趾あり。兩界堂、二階大塔等

の遺趾あり。僧坊の現存せるは總別當(即ち今中尊寺と稱するもの)を始め、金色院、大長壽院、願成就院等總て十八坊なり。

衣川 柵趾

中尊寺より山を下り衣川橋の畔に出てし後、更に川上に遡ること五六町許にして、衣川柵の故墟と稱する地點に達す。衣川の北岸にして膽澤郡衣川村下衣川に屬し、平坦なる地勢を有せり。安倍頼時、全貞任が居館なりし衣館コロモノタテ又は安倍館と稱するものまた之に擬せられ、源義家の『衣のたてはほころびにけり』と云へるに對し安倍貞任が『年を経し糸のみだれの苦しさに』と詠める佳話を傳ふ。櫻の古木あり。貞任が柵門外に植ゑ並べたるもの、今に残存せるなりと傳へ、俚俗之を間斷櫻けんだんと云ふ。又柵趾を並木屋敷と稱す。東鑑に『文治五年五月廿七日、頼朝卿、安倍頼時が衣川の遺趾を歴覽あり。廊土空しく残りて、秋草鎖すこと數十町。礎石何處にかある。舊臺埋むること百餘年』と記せるは、即ちこの柵の事なるべし。これを思はゞ誰か星霜の變遷甚だ急なるに驚かざるものあらんや。古書に所謂衣の關の遺趾はこの柵の東南に續き

たる平坦の地なりしなるべく、歌詠等に傳へて其名殊に高し。尤も藤原氏盛時にあつては衣の關の新關膽澤郡内に設けられたる事既に述べたるが如く、後世爲に彼此混同の恐れを生ぜり。學者間に異説あるは獨り關趾に止まらず、衣川柵其ものゝ所在に就きても別に衣川村上衣川説を主張するものあり。上衣川の柵趾と稱せらるゝものは衣川の更に上流北股川及び南股川のY狀を爲して相合ふ所に存し、斷崖三十丈、其構造は凹字形にして階段あり。一名を舞鶴館と云ふ。西は山嶽蜿蜒し他面は皆溪流なり。中尊寺を距る西北に二里。

琵琶柵趾 下衣川なる衣川柵趾の對岸にありて其地形琵琶に似たり。安倍貞任の兄成道の居館なり。此館を泉ヶ城と稱するは、泉三郎忠衡の之に居れりてふ傳説に基くも、やゝ疑を存すべし。衣川柵と共に舊墟荒寥として、里人唯無心、時に野調の草間そうかんに聞ゆるのみ。尙成道の居館趾と稱するもの、更に此上流にもあり。其眞偽を詳にせず。

衣川 二源あり、一は膽澤郡衣川村高日王山より發し、東南に流る。之を北股川と云ふ。一は同村の西南清水大森の山間より發して同じく東南に流る。之を南股川と云ふ。此二川舞鶴館趾の麓に至りて相合し、琵琶柵趾

を榮回して中尊寺の北麓に至り、北上河に注ぐ。上流に衣の瀧と稱する風景佳絶の瀑布あり。沿流遺跡渺からず。周圍凡そ四里。衣川村の内に三峯神社あり。火難盜難の守護神として俚民の賽するもの多し。尙彼の有名なる袈裟御前の物語が、屢々衣川村に因みあるが如く物語らるゝは、多恨の士をして轉た哀婉の情味に堪へさせしむ。

身にちかき名をぞ頼みし陸奥の

紀 貫 之

衣の川と見てや渡らん

たが袖につゝむ螢の衣川

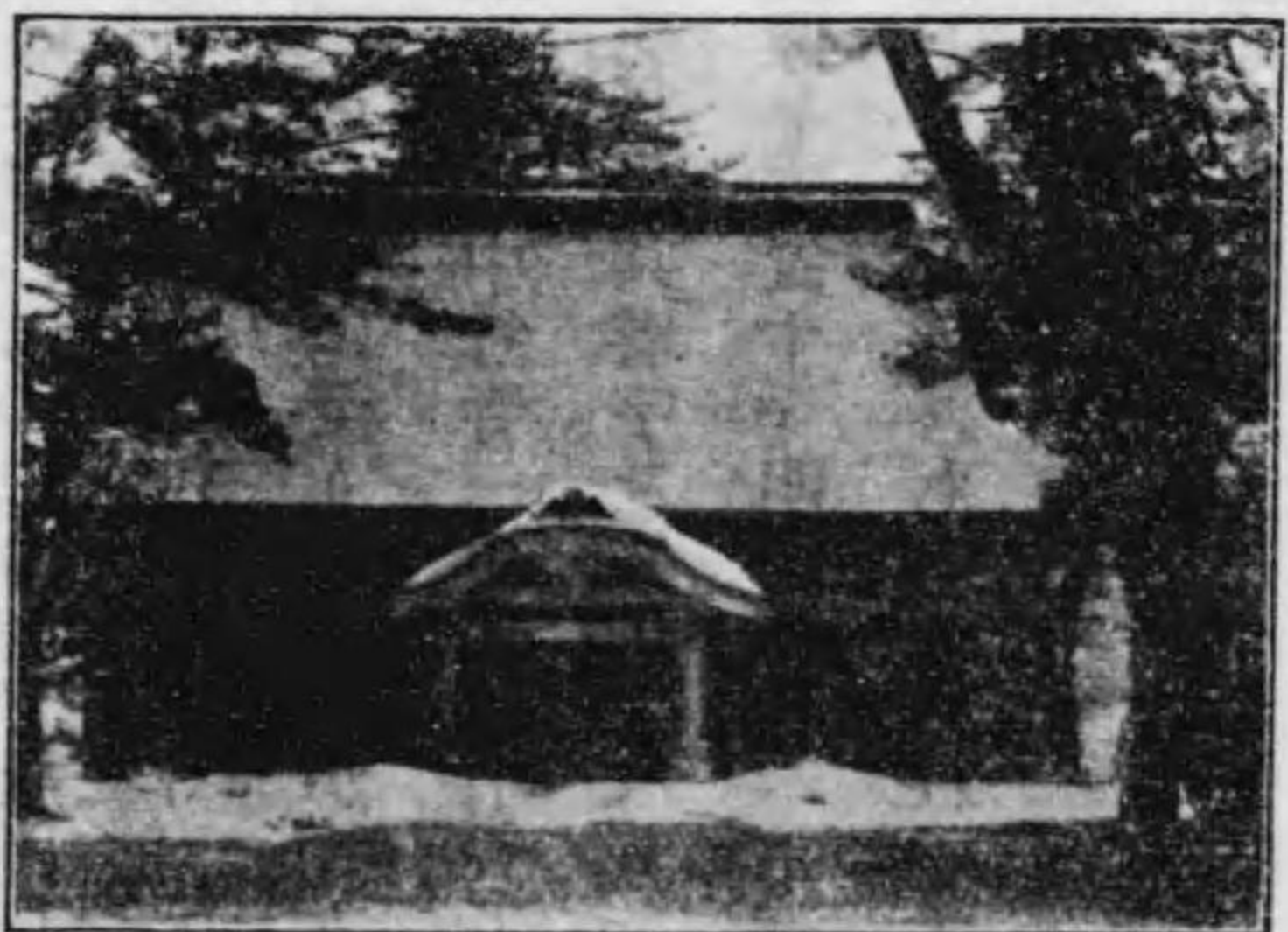
正三位 家 隆

おもひあまりて玉ともゆらん

毛越寺

毛越寺の遺趾は以上の諸地とは全く其方面を異にし、平泉停車場の西十餘町の處にあり。先づ民家の間を通りて小徑を辿り行けば八ツ花形と稱する處あり。こゝは昔時、泰衡の兄西木戸太郎國衡及び其弟本吉冠者高衡の邸宅のありし所。寺町、衆徒町等はその南方に展開し居たりしならん。現時は田疇となりて茫茫として尋ねべきなきも、此一望の平原、仔細に搜索し來れば南、磐井川南岸より北、金鷄山麓邊に至るまで、總てこれ遺跡を以て充足せられ、一杯の土塊、一片の拳石に至るまで

史興を引かざるなし。醫王山毛越寺は實にかゝる境に存す。此寺また金剛王院と號し即ち寺境の總名にして圓隆寺、嘉祥寺等皆此寺中に胚胎す。新御堂及び前述せる義經堂の如きも皆此寺に附屬せり。昔時の境域は今も社堂のある地にして南中里村界より北判官館に至る。東は舊祇園社趾より西舊貴船社に至る。地形は塔山、金鷄山等の丘陵に據り、東は東山の群峯を仰ぎ、西は達谷の靈窟に及び、南は山脈を一ノ關町郊外なる山ノ目蘭梅山に通じ、北は高館山上の老樹森然たるを望む。これも亦中尊寺と同じく仁明天皇の御宇嘉祥三年慈覺大師の開基にかゝり、清和天皇の貞觀十一年北門鎮護の御願寺たるべしと勅詔あり。長治年中堀河天皇の勅願により領主藤原清衡に寺堂興造の勅命あり。次いで鳥羽天皇も更に



毛 越 寺

圓隆寺の宣下ありしかば、清衡若干の寺領を寄附し經營相繼いで秀衡に至り、堂塔四十餘宇、禪房五百餘宇全く具はり、峻塔高樓悉く四海の珍寶を以てし輪奐宏壯にして幽境また超然たり。文治五年泰衡没落後頼朝巡覽して寺領安堵の壁書を圓隆寺南大門に掲げしめ、爾後も歷朝の保護淺からざりしが、天龜天正の頃に至り兵燹にかゝりて觀自在院南大門を始め社房悉く烏有に歸し、遂に平泉の名を中尊寺一山の專有たらしむるに至り。天正十九年豊臣秀次舊趾を巡覽し伊達家受封後其塔宇を修理すべきを命ぜり。乃ち山徒勵精協力して殘礎により假堂を建立し遺像を安置す。明治九年 車駕東巡の際この處に臨幸あり。明治四十一年 時の東宮殿下もまた行啓あらせられ、古趾舊物またこゝに榮顯を見たり。

●●●●●南大門跡 圓隆寺等の遺跡を包める老杉古松の蔚茂せる林下に入らんとする時、其左方の端に芭蕉翁の吟あり

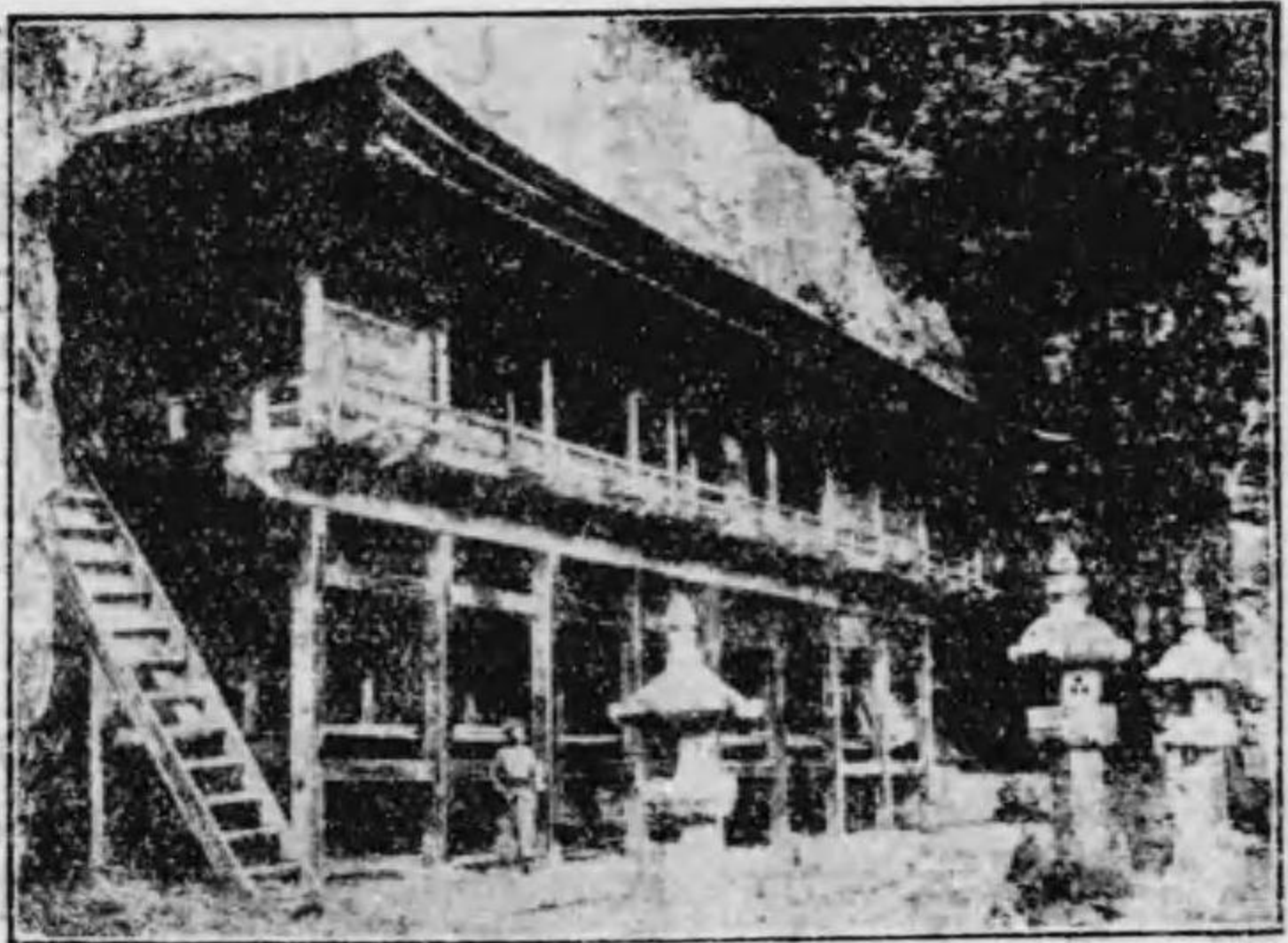
夏草や兵士共が夢のあと

はせを

更に進めば稍廣濶なる平地ありて平面西方に現時の本堂あり。寶物若干を傳ふ。此堂前を北手によりて亂草の裡に點々する殘礎あり。縦八間横六間に及び徑四尺のもの凡て十二。これ即ち南大門の名殘にして當時は二階總門、左右に廻廊を附し、文珠菩薩、金剛力士等を安置し勅額を掲げたりと云ふ。今や秋風徒らに吹いて興亡の夢の如きを嘆せしむるのみ。

●●●●●大泉池 南大門跡の北直ちに寂然たる大泉池を見る。池形一心の二字にして廣さ東西百三十間南北八十間と云ふも今は岸椽甚しく埋められ、大さ昔時の半に足らず。殊に西畔は田となれり。中に一島を築き、當時は左右に大黒辨天を安置せり。北岸なる文珠樓門の前に十門の朱橋を架し、中島より南大門までは十八間の反橋を架し水底に美石を布列し、四方の飾石には和漢竺三國の石を用ゐ、池中に龍頭鷁首の船を浮べたりと云ふ。南大門跡の東五六十歩の所に八九間許の出崎ありて巨大なる奇石を布列せり。堅石二個水面に並べるは二見瀾がたの俤あり。羅漢石と云ふ。此外池塘に當時の奇石

鳥居を入れれば其別當なる西光寺右手のやゝ高地にあり。密樹鬱蒼たる間に進むに及こ
こに窟毘沙門堂を見る。延暦二十年征夷大將軍坂上田村麿の東夷平治祈願成就の報賽



窟 谷 達

として山城の鞍馬寺に摸し九間四面の堂を創建し百
八驅の多門天を安置せる所なり。堂は岩洞に長閣を
構ふ。高さ三丈長さ九間廣さ七間なり。毘沙門天の
古像及び脇士等の今存する所僅に四十餘躰のみ。餘
は後世の作にかゝる。共に慈覺大師の作と云へり。
階段の左右には狛犬あり。此堂は岩窟の裡に其半部
を埋めたるものなるか、東鑑によれば、窟は悪路王
並に赤頭等の塞を構へたる所なりと云へり。西に連
る岩壁は峭絶八九丈許り、巨大なる大日像を刻せり。

今下部は落剝せりと雖も、面部は尙明かに認むべし。源頼義、安部貞任征伐の後弓削

を以て圖し、石工をして刻せしめたるものと傳ふ。

關 元 龍

白山幽洞碧崔嵬。

半倚峻巖梵閣開。

淨掃妖氛千載古。

腥風恠雨有時來。

東 山 稻

東磐井郡長島村にあり。北上川を隔て、平泉の對岸に當る。一名駒形嶺とも
云ふ。今の長部山なり。其連山舞草山、烏兔ヶ森等蜿蜒起伏して秀景描くが
如し。頼時が植ゑたりと云ふ櫻は今なけれど、前に平泉一帯の地を展望する時、俯仰
多時ならざる能はざるべし。地人今また櫻の苗樹を植う。

一 關 地 方

町 一 關

平泉驛より鐵道により南に進めば二里餘にして一關停車場あり。一關町は直
ちに其西北部に連る。此町は岩手縣最南端に位し、磐井川を隔て、相隣接せ

る山目村、中里村の間巷を併せ戸數總て三千餘、人口一万九千餘。縣下第二の都會と稱せらる。往時は田村藩の治所として二百二十餘年間大藩の間に介在し、武備文事大に整へり。其道路は嘗て十數年間に亘り桔据經營せられ、平坦にして端正。地域は東西に狭く、南北に廣し。今重なる町名を擧ぐれば

南新町、新大町、大町、八幡小路、廣小路、中小路、川小路、地主町、
上大槻町、大槻町、吸川小路、南十間町、北十間町、花王小路、東新町、西新町、
下小路、新小路、空心町、

等にして就中大町、地主町等は店舗軒を並べ、其街衢の堂々たる殆と盛岡を凌駕せんとす。此地より通ずる重なる街道は盛岡街道、仙臺街道、氣仙沼街道、須川街道、岩ヶ崎街道、金澤街道等にして、盛岡街道は山目、中里を経て北に二十三里餘、盛岡市に達するもの。仙臺街道は有壁、金成(宮城縣)を経て南に二十三里餘、宮城縣仙臺市に達するもの、岩ヶ崎街道は宮城縣栗原郡岩ヶ崎に通ずるもの、氣仙沼街道は狐禪寺

より北上川なる船橋千歳橋を渡り、薄衣、千厩、折壁を経て、宮城縣氣仙沼町に達するものなり。右の中殊に氣仙沼街道は海産物、穀類、木材等の運搬繁く、樞要の路線たるを以て、磐仙輕便鐵道を敷設して一層其交通の便を開かんとの計畫岩手宮城兩縣の有志によりて成れり。須川街道は山目より分岐して、此地方有名の勝地たる嚴美溪を過ぎ、瑞山より眞湯、須川の温泉に達するも。金澤街道は山道よりするあり。汽車の便によるあり。汽車の便によれば一關驛より、南三里餘の花泉停車場に着し、金澤に着すべく、日形、涌津に至るも此道よりす。此町の官衙には、其南方に盛岡地方裁判所磐井支部、一關區裁判所、盛岡監獄一關分監、西磐井郡役所等あり。其の他中央部には一關警察署、一關町役場、一關稅務署、一關小林區署、土木管區等散在せり。一關郵便局は地主町の東端にありて明治四十五年以來市中に特設電話を通ず。また學校には縣立一關中學校、郡立西磐井實科高等女學校、一關小學校等を有せるが、其中一關中學校は明治三十年の創立にして花王小路にあり、運動場は盤井川に沿へる廣濶

なる地を占む。實科高等女學校はもと郡立西磐井女子職業學校と稱せしが、明治四十四年實科高等女學校の制に則れり。明治四十年の創立にかゝり、廣小路にありて、完備せる寄宿舎を有す。其他銀行には八十八銀行、一關貯蓄銀行、盛岡銀行一關支店、横屋銀行等あり。病院には一關病院其他の各醫院、劇場には關守座ありて各般の機關總て備れり。

願成寺 繁華熱鬧なる大町より南に向ひ、百人町を経て臺町に至れば一關有數の大伽藍たる曹洞宗願成寺あり。此寺はもと前溪山願成寺と云ひしが、享保九年に至り白馬山願成寺と改め、至徳二年の創建以來五百餘年間三十八代法燈相繼ぎ、其寺政の完備せる、檀徒の多數なる、蓋し稀に見る所たり。開山は梅榮元香禪師にして、開基は竹内興田盛輔卿とす。本尊の藥師佛は慈覺大師の作にして千餘年の古佛尊像なり。藥師澤の藥師佛及び成田不動尊等をも併せてこゝに奉安す。春秋二季の例祭あり。山門鐘樓ともに古雅にして莊嚴、讀經の聲絶ゆる時なし。

祥雲寺 願成寺より南方、臺町の街路を隔て、祥雲寺あり。田村隱岐守宗良の實母ふさの方落飾して祥雲寺殿と號し、寛文六年江戸より陸前岩沼に移りて靈夢に感じ長谷觀音を勸請す。天和年間田村氏の移封と共に此地に移りて寺領白石を有せしが、祥雲院殿卒去するや、其遺骸を埋めし所に堂宇を建て祥雲寺と云ふ。即ちこの寺なり。昔は臨濟宗の名刹として堂塔伽藍極めて壯麗なりしが、明治五年鳥有に歸し、今は經堂其他の纒に昔の俤を止むるのみ。經堂は通例六角堂と稱せられ、文政十一年祥雲寺十世龍山和尚の建立にして、盛岡の棟梁齋藤安五郎の技に成る。八角輪の堂宇なり。一切經五千四十八卷を藏し、鞘堂は五間四面、軒の廻り八間四方、總高さ四丈五尺、漆喰花壁にして堂の入口には普太子の佛



(前場車停) 町 關 一

像を安置す。題額「薩雲」は下野温泉寺住職唐人願王とうじんがんわうの書なり。東北に比類なき堂塔とて殆ど觀覽者の影を絶えず。

招魂社 願成寺と祥雲寺との間は西方に向つて坂路となり遂に坂の上なる招魂社の境内に至る。古賀増の撰文、巖谷修の書になれる戊辰戰役戰死者の碑、故海軍大將西郷從道侯の書になれる日清戰役戰死者の碑、陸軍大將奥保鞏伯の書になれる日露戰役戰死者の碑等あり。境内櫻樹多く、花時春風ゆるやかに吹けば落葩瞭乱として、そゞろに地下の英魂を想はしむ。此地また頗る眺望に富み、近くは機織山、細布見長峰サイミナカネに對し。遠くは東山一帯を望み、且つ一關町の大半部を一眸の裡に集むべし。

新山 百人町を願成寺に至らざる前、西方に折るゝ道を求めて、一關の西南に當る新山ニヒヤに登れば田村神社並に入幡神社の二祠堂あり。入幡神社の祭神は應神天皇とす。傳へ曰ふ。康平四年、源賴義父子、安倍氏征討の爲め、此地篠見山に陣營を敷き、中原清房を奉幣使として、伊勢、磐清水の兩宮に遣はし、勝利を祈禱せしむ。即ち神託

を蒙り、入幡宮を八方に勸請せしが、此入幡神社は正に其一なり。最初館山の見上坂に鎮祭せしも、寛文二年に至り、領主伊達兵部大輔宗勝今の地に移せり。次に田村神社の祭神は坂上田村麿にして、元祿七年、一關藩主田村建顯たけあきの勸請にかゝる。天和二年田村麿の曾裔田村氏の一關に移封せられて其領主となるや、封境の四民、將軍を仰慕する事深きを加へ、藩主に將軍を奉祀せんことを請ふ。田村氏其請を容れ、内殿に奉祀せる所の神像を移して入幡祠中に奉ず。爾來百數十年間、藩主自ら盛祭を繼ぎ來りしが、今は田村講に於て祭祀を司り滄易する所なし。

一關城趾 新山ニヒヤの西にあり。又篠見山、釣山ツリヤマ、御館山とも云ふ。舊史に見ゆる安倍頼時の子磐井五郎家任の居りし高崎城と云ふも蓋しこの山にありしなるべし。後慶長年中伊達政景之に居りしが、其膽澤郡水澤に移るに及び、伊達宗勝代りて居ること十二年、天和元年田村建顯、陸前名取郡岩沼より移封せし以來、明治初年に至るまで三萬石の邑城たり。田村氏は舊仙道田村郡(今岩代國に屬す)の領主たり。即ち征夷大將

軍坂上田村鷹の裔と稱す。天正中清顯に至り、男子なし。其女の伊達政宗に嫁せるを以て、死に臨み後事を伊達氏に托す。既にして族子宗顯城邑を失ひしかば家名絶ゆ。伊達忠宗、二男隱岐守宗良を立て、田村氏の後とし寛文中、柴田名取の三万石を食ましむ。かくて天和年間に至り更に一關に移封せるものなり。

豊谷 古廟

關 元 龍

前朝餘古寺。

遺腐托空山。

草沒幽蹊蔓。

苔侵斷碣斑。

網垣蛛母繞。

巢宇雀兒還。

滿目悲哉色。

秋深豊谷間。

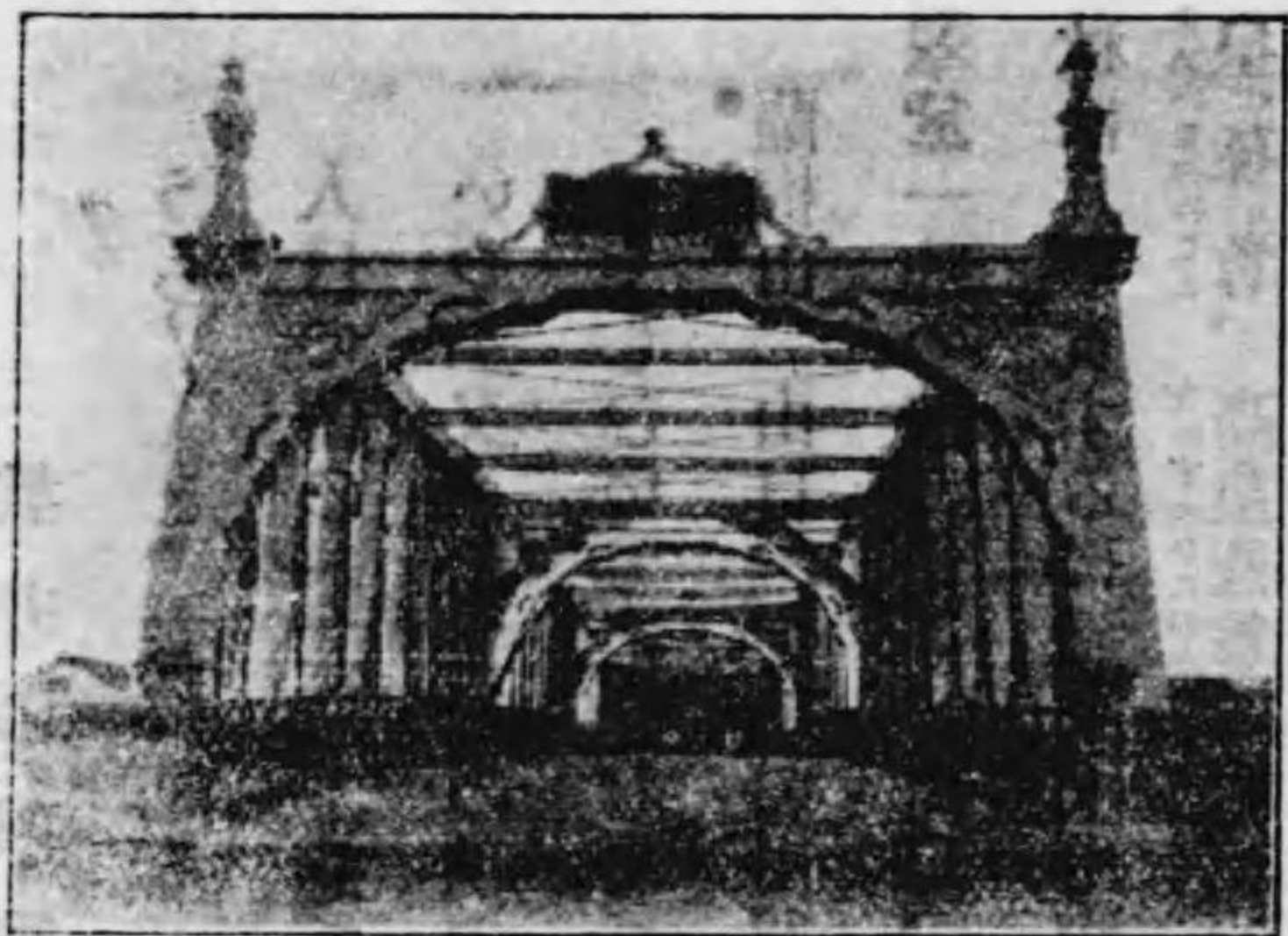
山頂に千疊敷と稱する平坦なる場所あり。疊塹の跡や、残れり。山脈は南に續き、峰嶺を以て萩莊村を限り、西は斷崖數十仞、磐井川を隔て、山目に界す。山上は御館山公園あり。四時風景絶佳、一關山目の市街、萩莊の村落掌中にあるが如く、蘭梅、須川の諸山指呼の間にあり。

機織山 新山、釣山等より東に當りて機織山あり。國魂會が管て吉野山より移植せる櫻花、春さり來れば處々に紅雲を吐き、滿山を埋めて茂る七草、秋更ければ白露

を結び、百蟲の音を鳴く中にも、鈴虫は其名産にして之を狩る人多し。又小松林ありて茸狩にも適せり。北は連亘して細布見長峯より白崎城趾(三關にあり)に及ぶ。

磐井橋 地主町を一直線に西に進めば磐井川に架せる壯麗なる橋梁の畔に出づ。磐井橋即ちこれなり。明治四十年工を起し、四十一年竣工せる鐵橋にして、

橋欄の白堊高く岸上に聳え、流水遙かに眼下を流れて城西の一美觀たり。橋を渡れば山目にして就中花



川戸は上流に添ひ一帶の遊廓地たり。下流に添へるは鍛冶町にして、須川街道は此方

面より發す。中里は更に北に當れり。

磐井の四季

大槻 如電

うらくくと、春に亂る、山の梅、笑へば招ぐ柳腰、いろもさくらの花川戸、
人目の關の一二三、戀てとほした念力も、猶も磐井の橋涼み。

いつか又、北上川の秋の月、みんな見渡す東山、なぜか御前は西に向く、い
つくしむいて抱きしめて、あぢな苦説のつもる夜は、須川の嶽の雪の肌。

●●●●●
蘭梅山 山目、中里の中間に位する最高嶺にして、一度登臨すれば、烏兔、束稻の
翠鷲一眸の裡に集り、山目、中里、一關の市街、指呼の間にあり。春は梅櫻の觀あり、
秋は月を賞するに適す。山腹に茶亭あり、遊覽者頗る多し。山頂に配志和神社あり。
皇孫尊、高皇彥尊、木花開耶媛の三神を祭る。傳へ云ふ。人皇五十二代景行天皇の
御宇、日本武尊東夷征伐の時、蝦夷の城に到り給ふ。此時皇子親ら三柱の神達を山目
の嶺頂に鎮祭し給ひぬ。其山を磐座と名づけ、其宮を火石輪と號し、延喜以來火石輪

を配志和と改むと。磐座山は即ち今の蘭梅山にして四神守護の靈地なり。附近に芭蕉
の句碑あり。

色にめて香にあやまるし神の華 はせを

此梅に牛も初音と啼きつべし

梅の香にのつと日の出る山路かな

●●●●●
大槻氏庭園 蘭梅山麓、山目には紅葉を以て有名なる大槻氏の庭園あり。廣濶にし
て泉水あり。楓の大木は二百餘年前、武藏國海曇寺より移せるものなりと云へり。霜
葉二月の花よりも紅なる時、泉水の靜かに夕日を照したる様、満天滿地紅化せんとす
るの壯觀なり。大槻氏は土地の豪族にして磐水、磐溪諸先生を出し晝晝骨董の貴重な
るものを多く藏す。

●●●●●
大槻磐水 名は茂質、字は子煥、玄澤と稱す。磐水は其號なり。幼にして穎異年甫めて十三、建部清庵に師事
して醫術を修む。杉田玄伯、和蘭醫術を江戸に唱ふと聞き、就きて學び、又蘭學を中津侯の臣、前野良澤に學

ベリ。天明六年、伊達侯擢て侍醫とす。文化五年、蘭書翻譯の功を賞して、月俸五人口を與ふ。同八年幕府命じて、蘭書を翻譯せしむ。全十年病を以て歿せり。年七十一。著書三百餘卷あり。就中環海遺聞、鮮体新書、蘭學楷梯等最も名あり。

大槻磐溪 名は清崇、字は士廣、父は磐水にして醫を以て一關侯田村氏に仕ふ。磐溪幼にして業を家庭に受け長じて江戸に之き、昌平齋に學び、畿内東海諸國及び長崎等に遊ぶ。既にして藩侯擢んで、儒員に列し季子(磐溪は磐里の弟)を以て別に家を起さしめしは異數と云ふべし。時に年三十二。爾來江戸に藩侯に侍講せしが、文久壬戌仙臺に移り、藩學養賢堂の學頭となり尋いで致仕す。戊辰奥羽同盟兵を擧ぐるや、仙臺侯磐溪を起して軍國文書の事を掌らしむ。明治四年東京に移り、全十一年七十八歳を以て歿せり。磐溪、性情眞率敬虔、才華富贍、詩文を善くし、卓犖俊邁、夙に西洋砲術を講じ、閩藩之を師としき。ヘルリの來りし時建白して開港を主張したる事あり。著書、孟子約解、近古史談、寧靜閣詩文集等皆世に行はる。墓は蘭梅山の半腹にあり。

嚴美溪

山目を出て、西に進めば山目村字赤萩を経由す。其南方萩莊村上黒澤は舊史に所謂小松柵趾のありし所ならんと傳へらる。小松柵は前九年の役、宗任の伯父僧良照の三柵塞を存せし所。陸奥話記に曰く「宗任精兵三十餘騎、爲遊兵襲來、武道迎戰、殺傷殆盡、賊衆捨城逃去、則放火燒其柵兮。射殺賊徒六十餘人、被疵逃者

不知其員。」と。赤萩より更に西に進むに従ひ磐井川の清流或は奔湍となり、或は深淵となり、景趣漸く加はりて遂に嚴美溪に至る。嚴美溪は一に五串瀧に作り、また碎玉の瀑布とも云ふ。一關よりの行程二里、人車の便あり。地は磐井川の上流にして、嚴美とはその流に沿へる村落の名に出づ。溪流、流紋石の上を走り、兩岸の斷崖忽ち盛りて峽湍を爲し、水怒り、石舞ひ、東奥屈指の奇勝たり。崖上には松樹櫻樹相混りて叢生し、陽春万朶の華雲を漲らす時、晩秋千疊の彩霞を鏗かす時、紅と黄と、白と碧と、崖上崖下に相映發し其風景の美云ふべからず。遠近より笳を曳くもの殆と市を爲す溪に一橋あり。天工橋と云ふ。對岸の岩邊に望櫻觀亭あり。踞して溪を見るに適せり。また嚴美溪橋の碑あり。碑文は掛川藩の儒家松崎謙堂、篆額は松平定信とす。高平眞藤の平泉志によればこゝは當時藤原氏の遊覽場たりしならんと云ふ。

嚴美溪

幸田露伴

一關にて流車を下り人力車を僦ひて嚴美に向ひ盡す。大町地主町を駈け抜けて、磐

井の河の假橋渡れば、花川戸とかや申して、主に旅の衆に投げの情をかけまくもか
しこき手管ありや無しや、女郎達の居給ふところなり。これより鍛冶町、竹山橋、
次第々々にごろた石多き路をたどりて、田圃の間を行けば、里の兒の用水に泳ぐ、
水車に轆る、いづれ田舎の常態ながら面白し。杭打坂を下りて上り、沓ヶ鼻とかい
ふところに至れば、對岸の岩聳えて潭水靜かに湛へたる景色眼覺むる心地す。やか
て五串に着けば、聞きしに違はて、流れの態も尋常ならず。とある家に一ト憩して
後、溪のほとりを漫步し、徐に眼を轉じて、水激し巖叫ぶ方を視下すに、溪を成す
皆巖なりといふてもよきほど岩石重疊して、赤松其が上に生ひ、碧水其の罅を行く
風情まことに塵外の想を發せしむ。天工と名づくる橋ありて、構造も俗惡ならず。
岩より岩に架け渡せる様畫中のものなり。それを渡りて左りすれば小やかなる堂め
きたるものありて、觀覽の便宜となしあるにぞ、下駄脱ぎ捨て、上り込み、勾欄に
頬杖突張りながら、觀れば觀るほどよい景色にて、少しく木曾の寢覺に似て、趣は

また大きに異れり。彼は溪邃くして水に遠く、臨川寺よりはたゞ對ひの岸の右に立
てる、河中の石の状の奇なる、淵の蒼々たる、水
の尾の瀬と爲して奔るを觀るに過ぎねど、此は溪
邃からて水に近く、橋よりは瀧を見るべく、堂よ
りは瀬を見るべく、淵の蒼さ、岩の奇なる、殊更
岩の上に老松幾株翠を凝せる、水の幾派にも分れ
て流るゝ、固より此彼に優るとは云ひ難きも、彼
遂に此が兄たりとは却つて中々に稱し難し。爾の
みならず、今は葉時なるに櫻の樹さへ少からず見
ゆれば、花時の眺望如何に清絶美絶なるらむ、想
ひやるだに松の翠の間を佐保姫に刺繡して出だす櫻花、甲所かしこに一簇の雪、此所に一
團の白雲と現じなば、流れも巖も一倍の光彩を發して、水妙音を傳へ、丕落紅を點



橋工天の溪美巖

ずる風流、實に賞するに足る事なるべしと思はる。松島は大にして麗、嚴美は小にして奇なりなど、日本三景の一とも云はるゝものを比較にとりて松崎復が溪橋の碑に記せしは些過ぎたるか知らざれど、此景で客舎さへよろしきあらば申分なし。

(易心後語)

温水山

嚴美溪より西二里を隔て、嚴美村大字猪岡イノカにあり。一に瑞山ミツヤマに作る。泉源二口林中に湧出す。兩泉相距ること凡そ五十間、共に單純泉に屬し、泉熱百度を超ゆ。關元龍の詩に『谿流隔人境、宛是武陵源、匣流青山合、窺天白日昏、懸崖將墮谷、虛壑欲蒸雲、策杖吟行所、溫泉芳冽薰』と云へるもの、よく其實景を寫せり。

醉川

一に須川に作り、また栗駒山とも稱す。陸中、陸前、羽後の三國に跨り、標高凡そ五千三百尺、有名なる二重式層狀火山にして、その最高峰を大日嶽と云ひ、南は須金嶽、北は大森山を望む。山中幽界の名に擬せる所多く、胎内潜りの石は高さ二丈ばかり、其中に穴あり。八萬地獄と云ふは澤中に大小の小湖連續し、死出

山は小峯起伏し、三途川は大日澤より出て、磐井川に注ぐ。尙劍山、白洲峠など稱する所もあり。就中劍山は大日嶽の北嶺にして栗駒火山の中央火口丘なり。標高三千六百尺。削剝作用によりて圓錐形の原狀を失ひ火口を存せず。其北腹に字八幡ヤハタ及極樂野と稱する所あり。幾多の噴氣孔此處に存して、硫黃の堆積甚しく、一時傍に三井合名會社の鑛業所ありて、盛んに之を採掘し、鐵索によりて、直ちに之を東麓水山に輸送し、年額一千万斤に及びしが、明治四十一年休山せり。醉川溫泉は即ちこの劍山の西北麓に位す。山は一帶に森林鬱茂し、岩石の露出よろしからざれども、道路稍良好に通じ、就中登山に最も便なるは水山より磐井川に沿ひ、新湯を経て醉川に出づるものとす。猶此山に延喜式神名帳に其名を存せる駒形神社あり。山下に寶福寺と稱する名刹あり。寛政七年發見せりと云ふ。又附近に山王窟趾ありて形勢や、達谷窟トツヤに似たり。其東にある骨寺コツテラは慈覺大師の遺骨を埋めて寺塔を建てし所。

須川溫泉 水山より險阻なる山道を西に進むこと更に四里、磐井川の上流、須川嶽

の奥に須川温泉あり。一關よりの行程十里餘にして、早朝出發すれば一日にして達すべし。水山よりの山道は車馬全く通ぜず。旅客及び荷物は人背により辛うじて運搬せらるゝに過ぎざるも神経病、癩麻質斯、腸胃病、呼吸器病、黄疸等に特效あり。夏時來浴する者殊の外多く一時に千人に達する事あり。近年槻山旅館外數軒客舎頗る完備し、且つ洋酒罐詰日用雜貨販賣所ありて毫も不自由を感ずることなし。其發見は詳ならざるも三代實錄既に其名を記せるを見れば極めて古き温泉なるべし。

磐井川 北上川の一支流にして酢川嶽の北側に發し、それより東流して本湯を過ぎ、猪岡、五串を經、その以下兩岸に多少の平地を開き、一關の西郊を南より走り、更に右折して北郊を匝り、後北上に入る。一名酸川、又は一關川とも云ふ。大槻磐溪の詩に曰く

雨後春山掃翠蛾。釣舟賦在舊溪阿。忽穿曲岸崩邊去。且避奇巖亂處過。煙柳垂絲遮短笠。風花吹雪點輕蓑。漁人復無爭隈意。報道前灘魚最多。

狐禪寺

氣仙沼街道を東に進むこと半里すれば、眞瀧村狐禪寺の渡頭に來るべし。千歳橋は森漫たる河上を越えて長虹の如く、頗る壯觀を極む。こゝより、宮城

縣石卷へは毎日汽船の便あり。随つて一關へも人車馬車の通行頻繁にして、以て汽車との連絡を通ぜり。汽船は毎朝七時出帆し、途中、薄衣、黄海(以上東磐井郡)、日形(西磐井郡)、嵯峨立、西郡、米谷、登米、柳津、寺崎、神取、和淵、鶴賀(以上宮城縣下)の各地に寄航して午後四時、石卷に達す。

舞草峽流 狐禪寺附近より北上川は、其下流瀧澤村へかけ、約二里の間兩岸絶壁削るが如く、一大峽流を爲せり。對岸は東磐井郡舞草村及び門崎村にして近時其河岸に沿ひ新道を開く。右岸には昔數多の瀑布懸りし痕跡を存し、地名を瀧澤と稱するを以ても其往時を推想すべし。峽流は水勢緩漫にして、樹蔭合する所、啼鳥を聞くの外は、萬籟寂々、時々石の巻通ひの汽船上下するのみ。此邊に露出せる岩石は、往時大塊となりて河底を横斷し、大に船舶の航行を妨げしも、之を撤去して以來、極めて安全なるに至れり。岩石の質は堅剛なれども、目割れの存するより、河水此割目の方面に一致して走り、浸潤含まず、遂に兩岸峭立の狀を呈するに至りしものならん。

東山地方

北上川を一步東に渡れば東磐井郡の管下にして東山の名を以て汎稱せらる。山嶽重疊して平夷の地に乏しけれども、地味膏腴にして、東山葉の名を以て知らるる煙草等を産し、養蠶の業亦盛なり。東山なる名稱に就きては安倍氏、藤原氏の豪奢を極めし時代、京都の東山に擬したるより起れりとも云ひ、また單に北上川の東方なるに因るとも稱せらるゝが、東山なる語は既に續日本紀、延暦八年の條に見ゆるを以て其淵源の近からざるを知るべし。其交通路線の重なるものは既に記せる氣仙沼街道と、此郡北部の長坂、摺澤、大原町等を連絡し氣仙郡に入りて高田町の西南今泉に達する今泉街道との二なり。今先づ氣仙沼街道によりて更に前路を急がん。

河崎柵

千歳橋より北上川に沿ひて南に下れば薄衣村に入るべし。村内、舊門崎村字川崎と云へるは、往昔河崎柵のありし所と傳へらる。陸奥話記に「天喜五年十一月、將軍(源頼義)兵千八百餘人を率ゐて貞任を討たんと欲す。貞任等精兵四千餘人を率ゐて金爲行の河崎柵を以て營と爲し、キノミ黃海に拒ぎ戦ふ。時に風雪甚だ勵しく、

道路艱難なり。官軍食なく、人馬共に疲る。官軍大に敗れ、死者數万人。」と云へるもの蓋しこれならん。然れども、今其遺趾の見るべきものなく、人の其の所在を確知するなし。

千厩町

薄衣より道は東北に轉し、磐清水村を過ぎて遂に千厩町に入る。此町は東磐井郡のやゝ中央に位し、千厩川の上流に縁り、山巒圍繞して一盤谷を開けり。延長殆と一里に亘り戸數六百五十、人口三千二百を有す。一關町よりは約六里。人力車、馬車等の便あり。千厩の名義に就きては、種々の説あれども、最も人口に喰灸するは、藤原秀衡が、駿馬を飼養し、多くの厩舎を設けたるに出づとするものなり。市街は四日町、本町一二三丁目、横町、新町一二三丁目、田町等に區分せられ、就中最も繁華なるは本町、横町及び新町一二丁目等とす。官衙には東磐井郡役所、東磐井郡立甲種蠶業學校、千厩警察署、三春專賣支局千厩出張所、千厩郵便局等あり。尙千厩銀行、千厩尋常高等小學校等市中に點在し、私立千厩病院明治四十五年の建設にかゝ

る。名所には愛宕山、神明公園、阿彌陀の櫻、天王山公園等あり。天王山公園なる首石、相生の松等もまた一覽すべき價值あり。金野馬之丞が居れりと云ふ館は幾百星霜を經たる今日尙町の南方に築かれ居れり。社寺には松澤神社、傳流山大光寺等境域宏大にして殿閣壯麗なり。此邊は東山地方のうちにも養蠶の業最も進歩し、實に縣下第一を以て稱せらる。其蠶業學校は年々優良十萬蛾以上を製造して郡内へ供しつゝあり。

千厩川 北上の一支流にして、北上山脈中の一雄峯室根山の西麓に發し、西南流して千厩町を過ぎ、四流して砂鐵川と共に、薄衣を挟み、北上河に入る。一に薄衣川、又久平川とも云ふ。長さ七里許。

室根山

千厩より東北に進み、更に東に志せは、奥玉、矢越、折壁等を経て宮城本吉郡に去る。矢越村の矢越明神は源義家の討伐に従來せりし時、其弓箭のよく敵を殲すを見て後人社を建て其征箭を祭れる所。本地佛は觀音なりと云ふ。折壁の東北に聳立する室根山は北上山脈南方の高峯にして標高四千尺、氣仙郡矢作村に跨り、

月立山、君花山キミハナに連れり。山南に室根本山ムネノ權現の祠あり。また曹洞宗松樹山龍雲寺あり。往時は天臺宗にして其住職は室根山の別當を兼ねたり。

大原町

室根山の南涯は今泉街道を通ず。此街道を逆行して西に向へば、其要驛たる大原町に達すべし。砂鐵川の上流なる一盆地を占め千厩の北三里、一關の東九里に位す。

大原は奈良の都にさも似たり

西と東はやまと大阪

なる俗歌はよく此地方の色彩と地勢とを諷詠し得たり。此町人口五千餘、往昔は藤原氏に屬し、後葛西氏、木村秀俊、蒲生氏郷に隸して仙臺領となりぬ。續石大明神は市西數丁の所に存し、奇石つゞき石と稱するものあり。大石二個重り合ひたるものにして上石は高さ八尺、圍り四丈七尺を算す。

よきことをよろづよかけて續く石

神のめぐみぞ大原のさと

社宇は維新以前祝融氏の犯す所となりて今は即ちなし。市中川原町には八幡神社あり。地は中嶋と呼び、老杉矗々として立てる一丘陵とす。境内莊嚴にして風致自ら塵界を脱せり。源頼義、安倍氏征討の時、山城國石清水に祈り、後義家、鳥海の柵攻撃の際、小萩黒崎(今の大原)に陣し、賊平定の後之を勸請せる所、享保年間伊達吉村之を本山總社と爲せり。境内に日清、日露兩戰役の招魂碑あり。碑の四圍は梅櫻枝をまじへ、展望また佳なり。若しそれ花笑ひ鳥歌ふ時、杖をこの臺に曳かんか、小萩富士の稱ある室根山は鹿の子まだらの姿を東南に現はし、彩霞棚引く東稻山西に峙ち、市街の背後を流れ行く砂鐵川、銀蛇の如くうねりて、人をして湧然として詩情を發せしめん。此地の人金菱洲の詩に

暮靄朝嵐粧翠鬢。

千尋秀色挾雲間。

閑窓寧莫長生術。

慣見東方無老山。

と云へるは正に此地を詠したるものなり。八幡社に隣りて八幡寺あり。今は廢寺となるも、伊達家中興の祖と仰がれし獅山公伊達吉村の學問所として名高し。獅山公の誕生地は字川内なる小學校の西にあり。以前塚ありしも今は其趾を止めず。又千葉信廣(葛西氏)が造營せりと云ふ山吹城も此町の近郊にあれと廢頽して、以て當時を偲ぶによしなし。

●●●●●松井の奇勝

大原町より砂鐵川を遡ること三十町、鎌倉山の麓に松井瀧あり。奇岩層をなし、巨石川中に連亘して小島の形を成し、其上に翠松を生ず。清流玉と碎くる瀧の上に松井橋を架せり。橋上より俯瞰すれば、奔流白雪を吐き、碧潭飛沫を呑み、風光の絶佳なる蓋し東山稀に見る所なり。

興田神社

大原の西北一里半許、興田村字興田保に興田神社オキダと稱する古祠あり。昔は鳥海妙見堂と稱し、葛西家の氏神にして妙見大菩薩を奉祀せり。社殿中三枚の古牌を藏せるが其一には『明應七戊午六月朔日大檀那平宗清』、其二には『大永四年甲

申十一日吉、大檀那平朝臣滿親、源朝臣清堅、其三には『天正六戊寅、平義重、平胤持、平胤頼』とあり。平氏は葛西家(千葉氏)の祖にして、従つて此社の勸請も極めて古きを推し得べし。

●**若東山** 大原より東に澁民村あり。若東山は此地に生れたる英傑にして恐らくは東山偉人傳中の一流なるべし。東山名は徳林、字は茂仲、孝七郎と稱す。東山又東民は其號なり。十五歳仙臺に遊び、次で平安に赴きて三宅尙齋に學ぶ。後長崎に行きて帷を垂れ、名聲漸く顯はる。二十六歳、徴されて仙臺侯の備官となり全藩の學政これより起れり。或る日藩侯自ら墨を磨り東山をして書せしむ。藩侯其字体の斜なるを見て之を責むるや、東山容を正して曰く、字の正しからざるは些事のみ。國政の正しからざるに至つて大事なりと。其硬直なる概ねかくの如し。東山又江都に赴き、室鳩巢に就いて業を受く。鳩巢其才を愛して託するに其子を以てし謂ひけるは、余常に皇國の律令闕けて傳はらざるを惜み、和漢諸儒の刑論を集めて一書を著さんと欲すれども能はず。汝予に代りて之を爲せと。後東山書を侯君に献じ學制を痛論し罪を得て獄に繋かれ、日に刑律を講ず。宥ざるに及びて無刑録十八卷成れり。安永丙申を以て歿す。年八十二。

白首歸來放逐臣。 故山春去尙尋春。
洞中別有鶯花好。 何羨林上作賦人。

獅ヶ鼻

大原町より西、長坂村まで四里十五町。一關よりは東四里半なり。此村を過ぎる砂鐵川は東磐井郡北方の大水脈にして種山に發する興田村の鳥海川を其

狢鼻岩 (千葉常樹氏撮影)



遠源とす。故に興田川とも云ふ。澁民村に南下して大原川を容れ、摺澤村に至りて其會慶より來る所の大谷地川オホヤチの溪水を合し、遂に西に轉じて此村に來るや、こゝに天下の大奇勝を現出す。近時狢鼻溪の名を以て呼ばるゝ一帯の峽谷即ちこれにして、兩岸の絶壁宛も屏風を併立するが如く、高さ數十丈、長さ十町に亘れる所あり。其斷岸は皆石灰岩より成り、

其面は斑紋を呈し、翠松綠樹岩隙に點綴して風趣掬すべし。斷岩の下には鐘乳洞ありて五六人を容るゝに足る廣さを有す。其水或は激して奔湍となり、或は漚りて深潭と

なり、清澄鑑すべし。獅ヶ鼻は實に其南岸の半腹にあり。其狀獅子の鼻に髣髴たるを以て名く。砂鐵川は尙これより南に折れ、薄衣村に至つて遂に北上川に注ぐ。長さ凡十二里。興田より長坂に至る邊は水流緩にして河床に黒砂の層を成すを見る。蓋し砂鐵を有する也。其他砂金をも産したる事ありと云ふ。

舞草神社

舞川村大字舞草の西北に當る字大平にありて倉魂稻命を祭れり。唯今村社に過ぎされども、實に延喜式内の有名なる古社にして文德實錄には延喜二年授位と見ゆ。近年、東城寺觀音堂を改めて本社と爲せり。觀音堂は、大同年中田村鷹將軍の創建にして飛彈の匠方三間の堂を作り、本尊は嘉祥中慈覺大師の彫める所と傳へたるが、文錄元年堂宇野火に焼かれ、其後再造せられたり。大杉樹あり。里人老婆杉と云ふ。境内は約百二十坪にして祭典は陰曆三月、九月各十七日を以て之を行ふ。觀音堂の西に太夫ヶ岩あり。長さ七十五丈ばかり、横百間許り。重疊せる岩下に毘沙門堂あれと今は荒敗して舊觀なし。音羽瀧と云へるは白山澤にありて高さ三丈五尺、廣

さ七間許り。不動瀧は吉祥澤にありて高さ十二丈許り、廣さ三丈に達す。

青柳文藏 松川村は長坂村の南一里餘、舞川村の東南二里弱の處にあり。青柳文藏の生地とす。文藏字は茂明、東里と號す。家世々醫を業とせしか、文藏亦箕裘を繼ぐに意あり。乃ち井上金蛾に就いて學びしが家甚だ貧しくして書を買ふこと能はず。これより商業を營み家道を興し、其贏利を以て書を買ひ、且つ讀む。十數年の間資産一萬圓、圖書一萬卷を得たり。文藏慨然として曰く之を私藏せんよりは博く公衆に見すに如かずと。藩侯に乞うて地數畝を得、書庫を仙臺に設け、私藏の圖書を献す。又毎歲額を定め郡吏をして粟若干石を積ましめ、其十分の一を以て書庫維持の費用に充て、其餘は閭里の貧民に施與せんと建議し、皆許さる。即ち青柳文庫と稱し醫學館に附屬せらる。

花泉

一關町の南三里にありて、岩手縣最南の停車場を有する處なり。此地方は一般に流地方の名を以て汎稱せられ、金澤川(一名金流川)の流域たり。藤原秀衡が茶水を汲めりと傳ふる石泉あり。其頃は岸に櫻樹ありて、春風之を吹けば香紅乱れて水に浮ぶ。故に花泉と云へりとぞ。驛西一里に義經の墓と云へるものあり。沼倉小次郎高次の葬る所。高次の館趾は其附近辨慶ヶ峯にあり。

三好清房 花泉の對岸は東磐井郡黃海村なり。小梨山谷に發する黃海川の流域にして、別段の見るべきなきも、

其三好清房を出したるに至つては優に縣下に誇稱するに足る。清房盛物と稱し仙臺に仕へて參政たり。時の將軍徳川慶喜、大政を奉還するに際し、薩長土の諸藩を召して議す。時に清房藩主に薦めて宮城を護衛せるが、朝廷伊達慶邦に勅し會津を征討せしむ。然るに執政坂英力、頑迷にして大義を解せず。諸軍に統帥として會津征討に従ひつゝありし清房を讒搆し却つて會津、莊内二藩に通せり。清房勢の非なるを見て病と稱し采邑キノミ黄海に寓す。既にして王師白川磐城の諸城を拔き賊鋒日に鈍りしかば、坂等の一派清房の再起を恐るゝ甚しく、兵を伏して清房を召さんとす。清房その免るべからざるを知り其母に見えて訣別し、明治戊辰八月十五日自若として自刃す。坂等清房と志を同するものを捕へて獄に下せしも、王師既に疆に臨み、藩主また非を悟つて英力以下を逮捕し、罪を闕下に謝せり。清房文化十一年十二月二日を以て生れ、人となり果決にして苟合を求めず。享年五十四歳。其節義の碑今や黄海村七日町葉山神社の境内にあつて永く烈士の事績を語る。母清月院は明治三年を以て朝廷の嘉賞を受けたり。

氣仙地方

萱千把

東磐井郡大原町より今泉街道を東にとり、笹間田峠を越えて氣仙郡の管内に入れば矢作村あり。此村に存する千把萱と云へるは、高さ數十丈の岩壁溪流

に臨んで峭立したる所にして、一條の道を其下に通ず。山覆ひかゝりて岩洞をめぐり行くが如し。之を陽神の岩チカミと云ふ。又溪流を隔て、澗畔に岩壁數十間屏風を立てたるが如く、數丈の高さを持つるもの、之を陰神の岩カミと云ひ、岩中に窟を存せり。昔、ここに二人の幼童と共に住める女あり。一人は先妻の義理ある子なりしが、如何なる惡運のめぐりてや、二人の幼童を捨てざるべからざる悲境となり、二人の幼童を伴ひてこの峭壁の上に立てり。かくて實子のみを千把の萱に包みて無難なれかしと禱念をこめつゝ落せしに、却りて實子落命し、先妻の子は何等の傷害をも受けざりき。これより千把萱の名、起りしと云ふ。白糸瀧は街道よりや、隔遠して矢作川の一支流鳥越川にあり。高さ六十尺、幅二十五尺の白糸を乱しかけたるに似たり。瀑上に慶長元和の頃の人、宥建法印の墓を存す。尙この村に廣袤約一千町歩の南部縣有摸範林あり。

今泉

大原町より七里半許にして今泉驛に達す。氣仙村の驛邑にして高田町を西南に距る僅に十八丁のみ。菴市は今泉川の兩邊に布置し、産形觀音堂、金剛寺

等の名所あり。産形観音堂は丹生寺と號し山下の岩間に一石を挾めるさま、婦人の子を孕めるが如し。正徳中、堂を建つ。醫王山泉藏寺あり。堂前に宗像の社あり。今の観音堂の地は古の社なりと云ふ。産形観音は弘法大師の作と稱せられ、奥州出羽三十番の内にして、婦人の安産を祈るもの今に至つて絶えず。又金剛寺と稱するは眞言宗の名刹にして、大江千里の建立に成る。仁和年中大江千里墓に座せられ奥州に下向し、氣仙郡氷上權現に詣てて祈請を籠め、尙宥鑊法印をして、歸洛成就を祈らしむ。同じく四年赦を蒙り、歸洛するを得たるを以て、乃ち寺を建立し如意山金剛寺と稱す。此寺始め今の米崎村濱田にありて千葉安房守の祈願所たりしが、後濱田より高田に移りまた今の地に移せり。什寶には弘法大師の自畫像一軸あり。右の外巻市の北方に北野神社あり。太田道灌の創始と傳へ菅原道眞を祀る。今泉より高田に入る途上、今泉川に架せる橋を姉齒橋と云ふ。長さ八十二間、橋下水洋々として長部灣に入り、箱根、氷上の諸山は東北に聳えて翠色を凝らし其風景の佳絶なる行人をして低徊去るに忍び

ざらしむ。況んや其河口に當り海岸一帶青松波堤を爲し、所謂松原の絶景を爲すに於てをや。古來有名の歌枕にして詩人騷客の詩材をこゝに探りたるもの尠からず。

くちぬらん姉齒の橋も朝な〜

能因法師

かは風吹きてさびき濱邊に

五山

夙請松島勝。今知氣仙奇。雙驛開村路。

千家接海湄。鵬雲垂似墨。翠岫列如眉。

誰復同虔信。寒山愛此碑。

姉齒の松の傳説も此地に起りしものにして、古來より人口に膾炙せり。昔用明天皇、美婦を京師に朝貢せしめ給ひしが、偶々氣仙郡高田の美女某其選に當る。不幸にして路上に病を發し此村落に客死す。郷人之を憐みて、此地に葬り、一松樹を塚上に植う。其妹又容色姉に類し重ねて召されしが、上京の途次此地を過ぎ亡姉の墓に對して慟哭

すること甚し。因て姉墓の松と云ひ、後姉齒と改む。其涕涙を拭へる懷紙を捨てし地を紙折坂と云ふ。一説には小野小町の姉此地に没し、小町、亡姉の爲に一寺を建立して松語山龕藏寺と云へりと。其何れか真なるを知らず。姉齒の松は姉齒橋を距る五町なりと云ふ。

今泉川 又、氣仙川とも云ふ。其源は世田米村の種山に發するものと、有住村の愛染山、檜山に發するものと相合して南下し、横田村を経て竹駒に至り、矢作川を合せ、高田、今泉兩驛の間を過ぎ、海灣に歸す。上有住の遠源より遡らば、凡そ三十里。其一支流小泉川の上游は砂金の産地にして、又石灰岩を採るべし。

長部の天隕石

今泉より宮城縣氣仙沼町に達すべし街道を進めば、氣仙郡の最南端に氣仙村長部チヤベと稱する地あり。其長圓寺の庭前に嘗て天隕石の落下したる事あり。嘉永三年五月四日の曉、空中に音あり。黒煙渦を爲し、非常の速力を以て迅雷の如き響を伴ひつゝ、降下し地中五尺を陥没す。其形大略方形を成し大さ二尺餘。鐵、ニッケル、橄欖石、古銅石等より成れるものにしてコンドライト屬なり。この石の表面はう

すき赭黒石にして、所々黒き光澤あり。斑紋を散布せり。恰も古鐵瓶の面の如し。今帝國博物館に收容せらる。

高田町

今泉より姉齒橋を渡りて其東岸に入れば直ちに高田町の街衢を見る。戸數八百、人口四千。縣下南海岸の要衝にあるを以て、町勢却つて盛町を凌げり。郵便局、小學校、町役場及び一關區裁判所水上出張所等の外官衙學校の見るべきもの少きも、交通及び商業、一般に活況を帯び、隨つて氣仙銀行を始めとし其他の諸會社また頗る具備す。尙此地に武日長者の邸宅跡と云ふものあり。一條の傳説を存す。高田町の南方は半里許の砂濱を経て廣田灣に至るべし。廣田灣は氣仙灣又は長部灣チヤベとも云ひ宮城縣本吉郡唐桑崎を遙に其南角とし、廣田崎を其北角とし、灣口幅約五里、偏北に直入せる一長灣なり。灣頭常に波浪を起し、小舟も亦近づき難し（但し今泉川は其欄口堆の最も深き處、高潮に三四呎あるを以て漸く小舟を通す。因て今泉に至るべし）。

●●●●
道慶の碑 高田町より北、竹駒との境に當り今泉川の畔に村上道慶の碑と云ふものあり。村上織部道清人道道慶は葛西家の家臣にして高田村に居れり。葛西晴信、天正年中豊臣秀吉の爲に其采地を畧せられ、織部また農民となれり。正保元年高田今泉兩邑の漁民、今泉川鮭漁の日割に就き争を生じ、日々鬪撃止まず。道慶之を判して日數を等分にす。衆人之に従はず。道慶乃ち誓つて曰く、吾れ行年八十六歳殘命幾もなし、今中流に立ち自ら頸を刎ね、首跡を兩涯に分流せん。若し此言に違はずんは汝等和睦してまた争ふこと勿れと。衆人笑つて肯はず。道慶、こゝに於て辭世を詠じて曰く

誠あれや此身をすて、行く水の

瀬は淵となる末の世までも

濁りなき名にあふ水の哀れしれや

世のあた波に浮沈む身を

ど。遺命を書き泰然として自ら頸を刎ねしが、其首果して西に、其跡また東に漂ひ流

る。漁民愕然として感動し、其争を止め、即ち之を祭りて川の神と爲せり。時に正保元年十月廿日なりき。爾來今に至るまで一月の日子を二等分し、今泉川の漁利を共にして渝ることなし。延享二年道慶の裔孫其事蹟を書して此碑を建つと云ふ。

山竹駒

高田村の北に竹駒山あり。往古慶長元和の頃多く黄金及び水晶を産出したる所にして、玉山の別稱は之に因せり。慶長中此竹駒邑雪澤の金師小野寺源太郎と云へるもの始めて此麓より黄金を得、漸く進んで此山を穿ち、多くの黄金を得たり。爾來京都、大阪の市人來居し、吳服町、穀町、薪町、肴町等を作る。其後に至り總て他に移居したるも遺趾尙里人に就て尋ぬべし。又玉御前神社あり。

山氷上

竹駒の北東に續き、海拔二千四百尺、郡中の一望標に推さる。山中に氷上三社ありて、延喜式内に所謂理許訓段神、登奈孝志神、衣太手神即ち是ならんと。此等諸神の名は恐らくアイヌ語なるべくして、其果して何神を祭れるやを知るべからざるが、氣仙一郡の鎮守とし、地方民の尊崇厚き古社なりしは事實也。然れども

今は其所在を變じ、且つ氷上權現の名を以て總稱せらる。此山高田町より坂口まで五十餘丁。山頂まで更に三十一丁餘あり。三社相隔つこと五六丁八九丁にして、本地佛、東は藥師、中は如意輪、西は彌陀なり。祭日は舊曆九月九日、十九日及び二十九日。坂口に祓川ありて參詣者の祓除を爲せし所とす。川の下、野の中に陰陽石あり。大石二つ組合ひたるもの也。また東瀑不動堂あり。瀑の高さ三丈餘、巾三尺餘、其景勝最も佳なり。山中には又善光寺楊樞、紅楓澤楓、香積寺櫻等數本の名木の稱を存す。舊理許訓段社趾等もまた今の三社祠の北五十町ばかりの處に檢索すべし。油井牧山の詩に曰く

氷上山高簷角敲。蒼煙接海渺無涯。千家雨色

分江歛。一帶潮聲待月影。秉燭怡顏蕉葉盡。

吟風寓意錦囊詩。遊程三百逢秋晚。醉對林泉

客是誰。

普門寺

高田町の東一里弱の處に米崎村字濱田あり。此附近に根崎濱と云ふあり。汐干の時渚濱遠く現はれ、奇觀を呈す。貝鳴嶋は高さ十餘丈島上の平處數十間にして山茶花を生じ、山茶島の稱あり。海岸山普門寺は曹洞宗の古寺にして、仁治二年記外和尚の開山なり。記外和尚は京師建仁寺の開祖明菴榮西の法子にして、榮西宋に入つて歸朝するや、南海より船此地に著す。記外また従つて來り、此寺を創建す。舊臨濟宗なり。其後寺境頗る廢頽しまた舊物の見るべきなきに至りしが、享徳元年、稗貫郡大興寺の如幻充察和尚再び之を建て、曹洞宗に改む。本尊は唐佛觀音にして、後陽成天皇の宸筆龜鶴の二大字を什寶とす。

碁石濱 米崎村の東南に末崎村あり。其碁石崎は西南六ヶ浦の外角なるが、此附近の水際に、或は碁石の黒石の如く或は小豆胡麻の如き磯砂を發見すべし。附近鷗居嶋の池中よりも往昔碁子を出せりと傳ふ。

大船渡

高田町より大略四里にして大船渡あり。大船渡灣、其東にありて南北に長く深入せり。此灣は往昔箭崎入江と稱へ、之に臨めるは大船渡の外盛町及び赤

崎、末崎の諸村にして、赤崎の國寶崎より北の方今出山にわたれる山脈はよく風浪を防ぎ、水涯到る所樹木あり。港心珊瑚島(又三合島と云ふ)の北方、大船渡に近き處を最好錨地とす。嘗て英國の艦隊十二隻ムーア中將に率ゐられ入港せし時の如き、一萬噸以上の大艦も灣頭近く投錨し、水雷艇の如きは皆斷岸に接して撃留せられたり。その如何なる暴風怒濤も灣内に突入し得ざるは、明治二十九年大海嘯の際、三陸沿海中獨り此灣に限り無事平穩なりしを以て推知すべし。されば曩に海軍中將肝付兼行氏等其開港の急務を唱道し、一時天下の政客を擧げて、所謂大船渡開港論に熱中したることありしが、之に伴ふべき鐵道の容易に敷設せられ難きより、今やその議愍焉として滅しつゝあり。然れども其早晚我國有力の海港たるべきは、世人の喜んで信ぜんと欲する所なるべしと思はる。今當年の開港計畫書により、全港の大要を記述せんか。曰く。本灣は南北に長く約五十町、灣口尾崎猿頭の間、其幅凡そ四百五十間也(干潮面深水三十尺の間隔四百十五間、全四十尺の間隔四百間)而して灣内最も廣きは一千百

間、最も狭きも四百間を有し、山岳丘陵を以て圍繞し、嶮に灣口の外洋に通ずるあるのみ。其狀恰も括囊の如く、四時風波を防禦するに足り、船舶は岸頭に接近して投錨することを得。灣内に數個の島嶼ありて、其稍大なるを珊瑚島、清水島とす。珊瑚島の東西は水清くして、大船の航行に自在なり。盛川は盛町を過ぎ灣頭に注ぐ。其長さ凡そ四里、其中河口に於て六十間内外にして、著しき土砂排出の形跡なし。海底地質の如きも、多くは泥砂介殼等にして、稀に岩石の横はるあるも、水深く波靜にして、克く船舶の碇繫に適せるを認むべし。高潮低潮の差は六尺三寸とす。春秋の候烟霧を起し、往々航路を迷はしむることなしとせず、と。

盛町

大船渡より北半里にして氣仙郡の政治的中心地なる盛町サカシマチに達す。盛川の右岸に緣り、戸數四百餘、人口二千三百。舊名を田茂山と云ひ、葛西の家臣千葉盛綱の居所たりき。町況今や高田町に壓せられ、或は其後塵を拜せんとする傾きなきにあらざれども尙氣仙郡役所、盛警察署、盛稅務署、一關區裁判所盛出張所、盛小林

區署、盛郵便局及び小學校町役場三陸新聞社等ありて、依然として氣勢を維持せり。

**長國寺
觀音堂**

盛町より猪川村を経て北に進めば約一里にして立根村に着すべし。こゝには長國寺觀音堂と云へる處あり。大同中坂上田村麿、龍福と號する鬼を誅し其首を此堂に瘞めたりと云ふ。寛永年間堂下の土を穿らしに、赤土三尺四方許りあり。腐れたる大鬮體の齒牙三十餘枚と一尺許りの短劍とを得たり。牙の長さは二寸餘、徑八九分乃至一寸、齒頭に鬼面の形を雕りたる如きものあり。今尙寺に藏せりと。

**氣仙の
東海**

大船渡灣より海路を北に志せは綾里、越喜來、吉濱、唐丹諸村の近海を進むに從つて夫々綾里灣、越喜來灣、吉濱灣、唐丹灣等を望むべし。これ等はいづれも標式的リアス灣にして彎入三乃至四海里、其間を分界する半島は山岳を爲し、一灣より一灣に至らんには必ず峻峻なる峠を越えざるべからず。綾里灣の岸頭には八が森あり。其西には綾里富士突元として空中に聳え、大洋往來の船船の標的をなす。越喜來灣は南北二十町許、東西一里餘、やゝ廣濶なれど風浪の避くべきは其西北

隅なる越喜來村泊濱あるのみ。越喜來灣と吉濱灣との間に介在する岬角は首崎にして其西嶺外山は一千五百餘呎、尖頂にして樹木繁茂し、海上よりは顯著なる目標となる。明治二十九年の大津波は吉濱の正東約六十里の地に起點を置けるものなりとは地學者間の定説なり。吉濱灣と死骨崎を以て相隔つる唐丹灣は南北の二に分れ、南灣には小白濱其他の漁港を存し、北灣には唐丹本郷と稱する驛邑を見る。これより北は尾崎を廻りて釜石灣に入るべきなり。

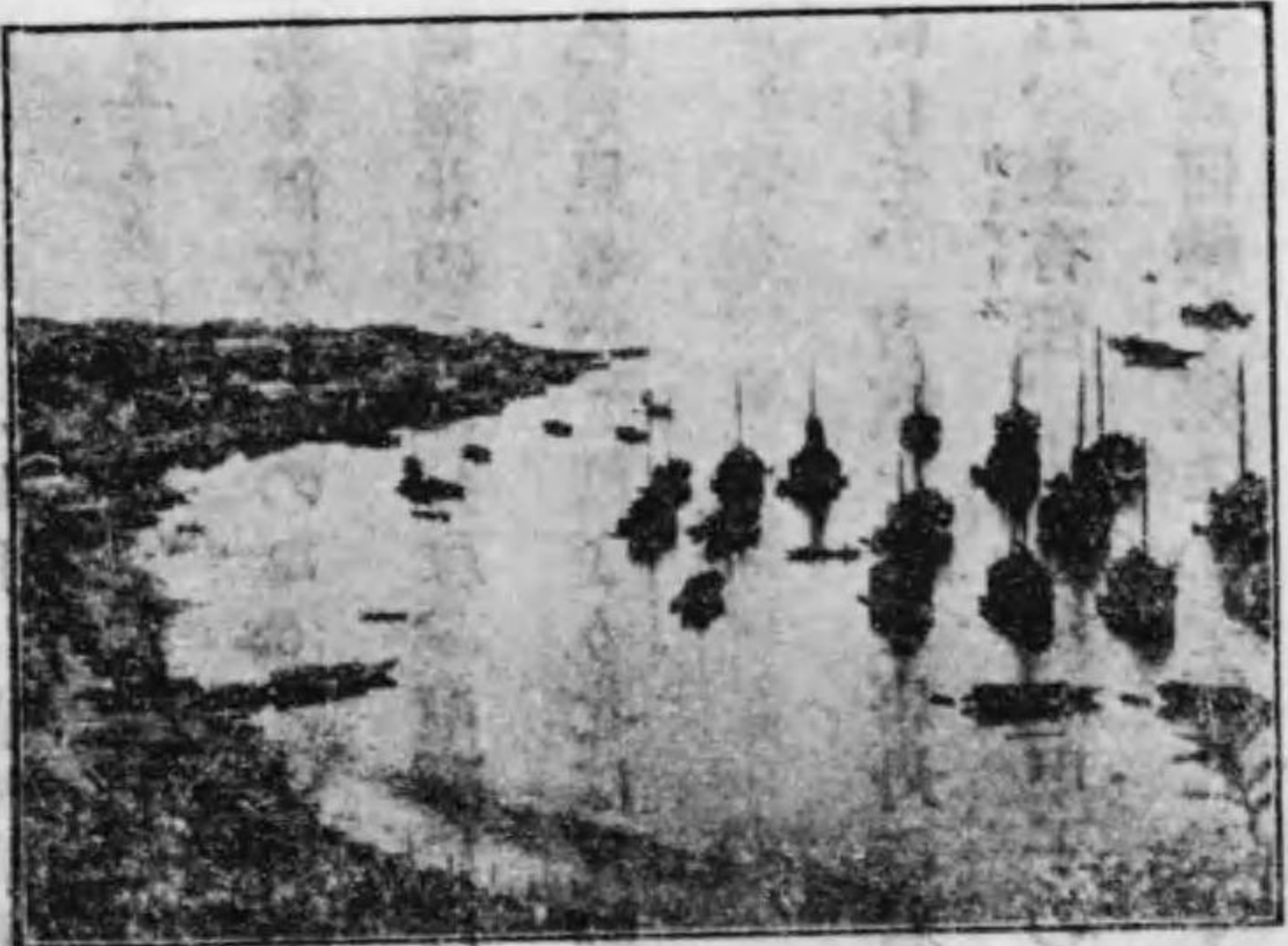
**五葉
山**

若しそれ陸路によらんか、立根より北六里半にして、吉濱を経て唐丹に着すべし。此村の西方なる峻嶺は五葉山と稱せられ、上有住、吉濱及び甲子の三村に跨る。標高九百尺。岳麓上有住村に五葉山神社あり。何神を祭るかを詳にせず。土人の傳ふる所によれば、この社、氣仙の總鎮守にして大同中坂上田村麿の創建する所なりと云ふ。山中、檜、榎、槻等の大木蔚蒼として枝を交へ、猿猴の屬群集す。誠に深山幽谷の觀を具へたりと云ひつべし。

釜石地方

釜石港

濱街道を北して上閉伊郡に入れば程なく、釜石町に入る。釜石町市街は東前、仲町、臺村、澤村、場所、只越、大渡の七町に區劃せられ、甲子川の下流なる大渡川に跨り、東は釜石灣に臨めり。釜石灣は尾崎と馬田崎とを以て扼せらるゝ一大澳にして、其灣口幅一海里強、西方に深入すること二海里、港内の錨地は水淺三尋乃至八尋、泥底にして偏東強風の場合を除く外、最も堅固なる碇泊所とす。澳形分裂して數灣を爲せるが、其西北にあるもの即ち釜石港これなり。灣頭半海里餘は砂濱にして其南端に大渡河口あり。田中製鐵所



釜石港



釜石灣棧橋

の築造にかゝる鐵道を連絡する堅牢なる棧橋は、三千噸以上の汽船數隻を横付し得べく、或は製造銑鐵及び鐵管其他の貨物を積出し、或は製煉用に供する多大の石炭を陸揚する人夫、常に此邊に群集して雜沓を極む。又三陸汽船株式會社の航海汽船十艘ありて頻繁に出入し旅客及貨物の積卸を爲す。此會社は明治四十一年の創設にかゝり、岩手縣の特別なる保護の下に縣下沿海の交通機關を以て任ぜるものにして一時は東京灣汽船株式會社との對抗の結果、頗る競争を餘儀なくせられたりしも、近年彼の會社と妥協成立し、鹽釜宮古間の航海頗る圓滑となれり。全航路の間發着及び寄航の箇所は鹽釜、鮎川、氣仙沼、脇ノ澤、細浦、大船渡、越喜來、小白濱、釜石、大槌、山田、宮古等にして一日二便船宛の往復あり。

祿四年南部信直の時盛岡上田村に移り、全年十一月今の處に遷座し釜石外三ヶ村の鎮守たり。明治に及びて從來大天場宮と稱せるを改めて釜石神社とし、更に入雲神社と云へり。

尾崎神社

釜石町の東凡二里に尾崎斗出す。尾崎はまた釜石崎とも云ひ、其海岸には嘗て伊達藩の臺場を存したり。其崎頭樹木茂りて暗色を呈せる處には郷社尾崎神社の本殿あり(拜殿は釜石町に存す)。上閉伊郡第一の古社なり。此地海表に懸絶し、雲濤渺茫、頗る景象に富む。毎年十月二十八九日祭典を營み奉賽する者多し。『岩手縣郷土史』に曰く、尾崎神社は釜石村に在り。傳へ曰ふ、昔鎮西八郎源爲朝、伊豆大島に流されし時、廣澤三郎忠重の女を娶りて妻とし男子四人を産む。第三子を爲頼といひ、島の冠者と稱す。爲朝の自殺するや、家臣親良携へて伊豆に通る。官求むること急なり。親良已が子を以て爲頼に代り死せしむ。暫くありて佐々木高綱、爲頼を養育し、長ずるに及び携へて鎌倉に往き、源頼朝に謁す。頼朝宥して閉伊郡の東部に封

す。因つて閉伊頼基と稱す。高綱の女を娶り、閉伊郡田久利に築き居りしが承久二年六月卒す。諸臣相謀りて廟を建つ。尾崎神社これなり。閉伊氏後に南部氏に亡され、子孫南部氏に臣屬せり云々と。

釜石鑛山

金山踊の單調に倦き、南部鐵瓶の振はざる今日、巖手縣人の誇りとするもの南部駒を措いては即ち釜石鐵山なり。良馬を得んとすれば、之を巖手縣に求むるの外なく、鐵山を見んとすれば巖手縣の他に其所なし。共に日本に冠絶す。釜石鐵山は釜石の西約六里。海面を抜くこと四千尺の片葉山を中心とし、上閉伊郡甲子、上郷、栗橋の三村大仙、新山、硫黃洞、大瀧、佐比内の數字に跨り、採掘面積の敷衍すること八十二萬坪。採鑛場は何れも海拔千六百尺乃至三千三百尺の山



釜石鑛山

間に在り。『大日本地誌』によれば、本山の地質は花崗岩及び閃綠岩、古生絶の石灰岩、粘板岩、角石を貫きて、鑛床は二條となりて其接觸帶に含挿せらる。即ち一は本山の主腦とも稱すべきものにして、仙人峠の附近より北十度西の方向を以て來り、字元山を横斷し、赤岩より二股に至り、其延長凡そ一万六千尺、幅平均六十尺にして、殆ど直立せる傾斜を有す。又一は大橋より片葉山の東面を経て、細越より山嶺を越え、高前樺を過ぎて、六黒見山ムクロミに達し、其延長凡そ一万三千尺、鑛床は諸所火成岩の爲め遮斷せられ、幅又厚からずして平均十五六尺に過ぎず。猶鑛石は主として硫鐵鑛にして、又多少の黄鐵鑛、銅鑛をも隨伴し、接觸鑛物として柘榴石、綠簾石、輝石等を交へ鐵鑛は恰も之に包まれて散在す。鑛床を開採する爲め數多の通洞及び豎坑を穿ち其内外には軌道縱横に連絡せりと。此山はもと、文政六年の發見にかゝり、嘉永二年吹床を本山の東麓なる大橋に設け製鐵を始め、明治の初年に至り南部氏の藩行に歸し、全六年一旦民業に移りしが、翌七年政府之を買ひ上げ、釜石の鈴子に工場を設け、英吉利

より六名の技師を聘して採掘製煉に努めしと雖、好結果を收むるに及ばず。間もなく廢坑となり、後明治十八年先代田中長兵衛氏之を拂下げて幾多の改良を施し、今や製鐵年額約四百五十萬貫乃至五百萬貫目を産するに至れり。而して工場の主部は前項既に記せる釜石町鈴子に設備せられ、釜石より大橋まで五里の間には明治七年來輕便馬車鐵道を敷設し、鑛物雜貨の運搬に供し、近時は傍ら一般旅客の便に備ふ。大橋より鑛坑への連路にはトロッコ軌道の外架空鐵索をも併せ用ゆ。又鈴子の外栗橋村にも分工場一つあり、木炭銑鐵を營む。栗橋銑と稱するものこれなり。栗橋分工場も採鑛場と連絡するためトロッコと鐵索とを併用す。現今從業の鑛夫、職工、家族を合せて殆ど一万餘人、自ら一郷關を爲せり。しかも山内さんないを巡檢すれば、文明の利器の應用に富めども幾回か擴張の跡を残し、苦心察すべきもの尠からず。本邦製鐵界の最大寶庫が、かくの如くして成れるを思へば、人爲の偉大また驚嘆に値す。横山久太郎氏實に其實際の經營者として拮据しつゝあり。

仙人峠

大橋より片葉山の南方を通過して遠野郷に入るべき道は、即ち仙人峠の峻嶺にして、九十九曲と云ひ、大橋より凡そ十六町登りて中仙入堂に達す。此間六十三曲と稱す。それより十二町にして仙入堂に達す。即ち甲子村と上郷村との境なり。目を放てば東南遙に太平洋を望むを得べく、更に俯瞰すれば、今來し崖下手に取るが如し。これより西麓なる上郷村沓掛までは傾斜東坂よりは稍々緩む。左に俳人河東碧梧桐氏が遠野より釜石に至らんとして、此峠を越ぬし紀行を掲げん。

仙人峠を越ゆ

河東碧梧桐

十二月十一日。半晴。出立間際になつて、雪合羽を餞別に貰うた。羅紗の引まはしを木綿でこしらへた物である。ゴワ／＼音するのは、中に油紙のはいつてをる爲であるといふ。著ると膝迄かくれる。井形に菊形の大きな紵模様が鄙びて見える。馬車で上郷まで來る。こゝまで同車した一素が爪籠を贖する。爪籠草鞋にも權兵衛といふのと、新兵衛といふのと、まだ外に一二の區別がある。その踵の藁の結び方

で、上村の者と下村の者との見分がつくともいふ。予の貰うたのは深靴なりに出來た新兵衛である。之を穿いて立つと、すつかり寒國の旅人になつたといふ。馬車は山道にかゝる。眞白に雪の凍りついた處が多い。馬丁は高足駄で轡をとつて行く。谷川にある石の廻りは、皆厚い氷が浮上つて居る。崖に六七尺の氷柱が劔を磨いたやうに日に輝くのも見える。爪籠で足の先を包んでをつても、身は合羽でくるんでをつても、尙冷たさ寒さを感じる。二里を來て沓掛に著く。一軒の宿に上つて櫓火をどつと焚かせる。臼を踏んでをつた娘が茶を汲んで出す。口を焼くやうなのが腹に沁る。沓掛の宿を出ると、足下から坂になる。仙人峠といふ。新道のひらけた今でも思ひの外に急である。踏み固めた雪の上をギウ／＼と鳴らせながら上る。吹き溜つた處には厚みが一尺餘りもある。始めて寒國の雪中を旅するのぢやと思ふ。越し方の重疊たる雪の山々を見下すやうな高さになると、其峰々を吹渡る長風が眞横に合羽を煽る。怪しい黒雲が頭を壓して長驅する。萬目青い物の一片も見ぬ。

この蕭條たる光景に對して佇立すると、しばらくの間に満身の汗も凍るかと思はれる。懸崖に沿うて柵を結うた場所がある。柵の高さが丈餘に及ぶものもある。この高い柵がかくれるやうな雪にも馬は通ふといふ話を思ひ出す。そのやうな雪を馬で越すやうな事も、これから行く先にはあるであらうとも考へる。枯柴を山のやうに負うた男が下りて来る。顔中胡麻鹽の鬚で埋まつてをる。藁頭巾を被つた革羽織の男に會ふ。一本の薪を背にしてをると思つと、後ろに野兎をかけてみた。たゞの洋服を著た、たゞの草鞋を穿いた、たゞの八字髭の官吏風の人が下りて来る。たゞの草鞋もたゞの草鞋掛けの足袋で泥塗れになつてをるのを異様に思ふ。峠に著いて行手を望んで先づ目についたのは山と山との間に見える海であつた。空はまばらに曇つてをつたが、海上一様に青かつた。其青さが目もさめるやうであつた。溪には雪がない。右に高い一峯は半面雪の積つたのと積らぬのと、頂きに判然たる區劃があるやうに見ゆる。この峠の西と東とていかにほど相違があるかと驚く。一二丁下ると、

雪は跡を斷つ。雪解の泥が足の甲を没する。直下礫螺の穴をたどるやうな道が大橋といふに下りて、寒帯の虚空から、暖帯の奈落に落ちたやうな心持をした。大橋から鑛山用の鐵道馬車、五里程を釜石の海ばたに着くと、町中で子供が紙鳶を上げてをる。雪合羽がホコ／＼する程暖い。(「三千里」)

六黒見山

栗橋村橋野の六見澤にある鑛山にして遠野町を距ること遠からず。採掘面積二十二萬坪。硫鐵鑛中の合金を採治するものにして、鑛床は石灰岩に蔽はれ、花崗岩中に胚胎す。金年産額五百匁を出入す。

大槌港

釜石町より濱街道を北に進めば、鵜住居村に入り、兩石灣を東方に望みつゝ、鳥谷坂を過ぎ、更に北すれば、栗林川を渡る。栗林川はまた鵜住居川とも云ひ、六黒見山に源を發し、東流する事約六里。大槌灣に注ぐ。此灣は鵜住居及び大槌に亘りて展開せる廣灣にして、右手は東に伸ぶる事三里の箱崎を以て、左手は此灣を北方船越灣より離隔する野嶋崎を以て、圍まれ、別に小槌川、金澤川をも容る。灣門

霞霧嶽

吉里吉里灣の東北方に斗出せるは下閉伊郡船越村に屬する船越半島なり。其地頭の吉里吉里灣に面せる處に、田の濱と稱する部落あり。人口二千二百餘。大槓より三里半許を距つ。風帆船の山田港に出入し能はざる時、多く此港に假泊するを以て、また重要な地たり。半島中最も北東に向つて斗出したる部分を龜ヶ崎と云ひ、其上部の高處を霞霧嶽と云ふ。高さ百六十六呎。山田港の望標にして、其港市の正東一里半にあり。山上新山權現を祀り、地人の奉賽するもの多し。

山田港

大槓より北方五里餘にして下閉伊郡船越、織笠二村を過ぎ山田町に達す。岩手縣要港の一なり。山田灣は縣下最東方の岬角鮎崎の西南五海里に港門を開き、船越半島を以て大洋に屏障す。港は西南に深入する水道を以て入津すべし。此水道の最も狭き處は幅僅かに六鍵にして、其北角を明神崎と云ふ。崎より以内は高さ千呎以上の諸高山之を圍繞し、港面圓鑑の如く、實に壯麗なり。港内水深五六尋乃至三十尋。保錨甚だ佳なり。汽船にあつては概して時を擇まず、安心して避泊することを

得べきも山田町附近の外は水甚だ深くして便ならず。港頭織笠村の前面に大島、小島及び勳功島、南北に並列せり。港の北岸上部は地最も高く、之を青松山と稱す。高さ二千三百呎。是より山脈北に走り閉伊崎に至りて盡く。脈中最高峯を十二神山を云ふ。此港は高山圍繞するを以て、風向風力常に一定せず。故に風帆船にありては出入に困難なり。又春季西風の尙息まざる間は、強烈なる山颯吹き下し來り、港の東北隅に泊せる船舶を襲ひ錨鎖を切斷する虞れなきにあらず。港市は沿岸に葺屋を並べ戸數八百、人口四千四百餘を有す。山田町役場、山田郵便局、宮古警察署、宮古區裁判所山田出張所、宮古小林區署保護官舎等あり。神社には八幡神社、大杉神社あり。又關口神社の不動尊は參詣者毎年數千を算す。

鮎崎

鮎崎は岩手縣下のみならず我國本州の中にも最東方の岬角にして一基の燈臺を有す。東經百四十二度五分許、北緯三十九度三十三分許。山田町の東北四里、下閉伊郡重茂村に屬せり。低斷崖より千百五十呎の高起を鮎山と云ひ、浩々蕩

蕩たる太平洋の波濤、其麓に渦き來る。崎岸は陸界にして、水深三四十尋あり。崎の南に斗出せるを根崎と稱し、山田港門の北角を爲し、又遙か北なる閉伊崎と共に宮古港を擁す。陸前國金華山より此に至る間は岸勢高き壞崖にして、直に險峻なる山を爲し、殆ど起伏なき一帯の高山脈を以て岸線に傍へり。又童山甚だ稀にして、山野悉く樹木繁茂す。然かも此近傍を以て殊に然りとす。

宮古地方

閉伊崎

下閉伊重茂村^{オモエ}字音部は北方に伸ひて、閉伊崎を爲せり。此岬は宮古港口の東角を爲すものにして黒色を呈し、崎頭は斜坂の盡頭低崖を爲し、其附近に一岩嶼、數露岩を存す。崎頭は尾崎明神を祭れり。尙又こ、より南方二海里半の處には月山と稱する高さ千四百呎の高地ありて山勢疊秀、之に登れば殆ど塵思を出づるもの

あり。烟霞の勝一覽にして盡すべからず。團々たる月海を離れて漸く此山に登る時、南東、北東の近海を航行せる船舶は此尖峰を望んで方位を察すと云ふ。仁王窟と云へるは此山の下岩涯の水際にあり。窟口穹窿を爲し、三丈許を進めば、碧潮其奥に湛へて其深さを知るべからず。潮汐の盈虚する毎に波浪噴激鳴轟して雷霆の如く、偶々舟を寄すれば腥風面を吹いて近き難し。昔人之を以て蛟龍の窟となせりと。

宮古港

鮠崎の燈臺下を過り、閉伊崎の一角を廻りて航行し來れば、船は直に宮古灣に入るべし。立崎は閉伊崎と相對して其北岸を扼し、水道西南に深入すると約五海里。其幅は廣き處一海里半、狭き處半鏈なり。灣首は津輕石にして沙濱に一川あり。西岸は屈曲し中央に宮古河口存す。北灣は、立崎以北水深二十尋より漸を以て淺く、海底泥質なれども、沖合に開き波濤進入の患あり。唯宮古河口と立崎との間、即ち楸ヶ崎町の前面に於て水深三尋乃至五尋の處は、稍諸風を防ぎ、船舶の宿錨に適す。此港の沖は沿海中最も漁業に適せる處にして、主なる漁獲物は鰯、鮪、鱒、鱈、鮑、

鮎等なり。宮古の港市は宮古町及び楯ヶ崎町の二に分る。併せて濱街道の要驛を爲し、南は約六里にして山田町に達すべく、北は十五里餘にして九戸郡久慈町に到るべし。尙其西に通ずる街道は所謂宮古街道にして、延長二十七里。盛岡市に至つて終る。海上の交通は三陸汽船會社の定期航海の外、宮古久慈間に毎月三回以上石油發動機船の便あり。最近青森縣三戸郡湊への便船をも出すに至れり。

●●●●●
宮古町 宮古港市の中其西、主として閉伊川口に沿へるを宮古町とし、戸數千二百、人口六千七百を有す。其大部分は商業を營み、街衢殷賑近時陸東新聞と名くる新聞を刊行する者あり。宮古街道の入口は町の西北にありて、其横町に入らんとする盡頭に山口村への道路を分つ。宮古男子尋常高等小學校之に沿ひ、附近館間と稱する處には「五部大經、一石一字、雲上作之、永和第二」の十六字を刻せる經塚の碑あり。横町を一直線に東進し北に迂廻すれば此地第一の名刹たる常安寺に至るべく、伽藍宏壯にして幽寂を極む。寺傳によれば、慶長十三年十月大津浪に遇ひ、殿堂漂失し、後再興す

る所と云ふ。天正八年の建立にして、傳燈今に廿一世。開山は三叟義門なり。此寺の公葬地には、明治二年此地を衛戍せる官軍の榎本武揚が率ゐし回天丸等諸船と戦ひて之に死せる者を葬る。墓碑凡て六基。歲月遠く推移して今空しく當年の戦聲を紀念するのみ。横町より南に分岐する三條の街のうち新町、^{アラマチ}本町は商家最も櫛比し、本町には宮古病院を存す。本町より山口川に架せる橋梁を渡れば向町一直線に南に走り、町の中程より東西二條の小路を分派せり。其東をとりて進めば山口川の閉伊川に合する邊、一小島の上に宮古物産館の壯麗なる建築を見るべく、其西をとりて進めは遂に郊外に出で、遠く郷社横山八幡宮を望むべし。此社は宮古町の鎮守にして一條天皇時代の創建にかゝり品陀和氣命を祭る。俗説に寛弘元年、阿波の鳴門の激浪を平靜にせる彌宜之を創むと云ふ。其實を詳にせずと雖、古來阿波の國人の此地に至るもの第一に奉養し、舊藩主南部氏また信仰淺からざりし處也。祭典は九月十五日とす。此祠域の南麓にさかさ銀杏と云ふものあり。稀に見るの大樹なるが、惜いかな、再度の火災に

今や其面影を忍ぶのみ。また境内の手洗鉢に宮古石と云ふものあれど、まことの宮古石は市中新町に埋まり居れりと傳ふ。向町盡頭より左折して閉伊川の岸に出づれば、長さ五百七十三尺の新晴橋、長虹の如く對岸藤原に架せり。藤原には縣立水産學校及び水産試験場ありて、道は遂に山田街道となる。其閉伊川口より次第に延ひ宮古灣となる沿岸は、白沙青松を隔て、漁歌暖く、殆ど須摩舞子の風景を髣髴す。扱てこれより舊路に復し、本町の南端より山口川に沿ひて、東に下れば本町あり。本町の東に續くは舊館にして宮古支金庫、宮古警察署、宮古郵便局、劇場常磐座等あり。就中郵便局は宮古、鍬ヶ崎兩町に特設せらるゝ電話の交換所を有せり。舊館の南に平衡せるは築地通りにして閉伊川に沿ひ、またその北は山地にして、下閉伊郡役所、宮古町役場、宮古區裁判所、下閉伊稅務署、宮古女子尋常高等小學校等皆此崖麓にあり。

●●●●●
鍬ヶ崎町 宮古町の商家多きに反し鍬ヶ崎町は遊廓及び漁家大部分を占む、戸數七百五十、人口四千。道路は宮古町築地通りの東端より次第に坂路となり遂に切通しを

經て此町に陥入し、一直線に北に向つて走る。切通しの右手、鍬ヶ崎浦に面せる丘陵上には宮古測候所あり。明治十六年以來開始せられたるものにして天氣豫報及び警報を發し産業家を裨益すること大なり。尙地震調査會より微動計据付並に觀測方をも囑託せらる。展望すれば碧波眼下に平に、紫山眉間に高く、鳧鷗其間に飛翔して風景甚だ佳なり。此丘陵の下に由ヶ尻と稱する岩石を切り拔きたる穴あり。穴の長さ約五間にして漁船は容易に出入すべし。また切通しの左手に測候所と相對して聳ゆる高地は神靈地と稱せられ、これまた風景絶佳にして日露戰役の忠魂碑を建つ。鍬ヶ崎町役場は此山續きの崖下にあり。鍬ヶ崎上町には宏壯なる妓樓軒を連ね、屋後に夜泊の船舶を望む。一丁目、二丁目を過ぎ遂に北端に至れば熊野社に至るべし。舊曆六月十七日其祭日とし、當日早朝神官氏子等神輿を奉じて下山し、舟を簾し旗を立て、鍬ヶ崎浦は漕ぎ出れば數十艘の漁船之に列隨し、笛太鼓勇ましく宮古灣門まで巡周す。かくて漁夫は宮古名所と稱する大漁唄を唱へ、鯉釣に摸擬して、其年の豊漁を祈る。また神

社庭前には御湯釜の行事あり。男女群集して賽銭を沸湯中に投し泡沫昇騰の甚しきを以て大漁の兆とすること、其俗頗る珍奇なり。社の西隣には鍬ヶ崎小學校あり。また田老村への街道は祠前の前方より左方に分れ、其南方一帯は漁家なり。町の東端灣に沿ひて鍬ヶ崎漁業組合の建物を存す。次に掲ぐるは此地花柳界に行はるゝ歌曲の一也。

鍬ヶ崎名所

本調子「鍬ヶ崎賑ふ春よむかひ濱、霞の御簾をたれこめて、内ぞゆかしき御殿山、雛の遊びにまゝ事の、釜のふたまで潮引けば、磯草あさる日立濱、龍神さんに願かけて、嬉し笑顔も戎堂、昇る日出嶋沙吹の、ふくも涼しきならへ蔭、沼のわたりに見渡せは、尾崎から来る船の帆の、數も一、二、三、四丁目、青磯かけて大漁は、八戸穴に飮して、聲もひろく千疊敷、山の名におふ秋日和、暮るゝ日影に月影の、さして耻かし角力濱、うす木といへどうらうへに、契りも深き沖の井の、濡るるも假りの女夫波、たゝむ羽織や袴嶋、寝みたれかみと下町の笑つほにはまる蛸の濱、二より

「雪はエーなつ保ひら松さて切通し、積る話も大嶋小嶋、逢うて今宵も顔見れば、測候所にも此胸が、晴れとしるして出させたや、たのしさよ。

灣内の奇勝 鍬ヶ崎浦より前方に見ゆる岬角をめぐりて出づれば奇勝頗る多し。袴嶋と稱するは形状恰も袴の如き一岩嶼にして白波其下に捲舒し、また一奇觀たり。更に進めば八戸穴を見る。懸崖の麓に洞口を有する一の岩窟にして輕舸を用ゐば數間を進み得べし。俚俗青森縣八戸に通ずと云ひ、穴内碧波冷かにして深さ幾尋なるを知らず。波濤洶湧し來るや窟内鳴轟して凄絶壯絶を極む。これより更に北に進めは有名なる淨土の濱あり。ひとりこの灣内第一の景地たるのみならず、恐らくは天下の絶勝を以て稱すべく、海水浴場あり、即席料



宮古灣内淨土ヶ濱

理もあり。嶽ヶ崎よりは海陸共に便を有し、陸行ならば二十町にして達すべし。灣の北方は劍ツルギの山等の名を負へる岩角起伏し其外灣たる蛸の濱を遮斷す。灣内は波平かにして水淺く、平靜なる事鏡の如きを以て俚人之を「沼」と呼べり。之に反して蛸の濱は乱岩虎の如く、狂濤龍の如く、奔馳縦横して其壯觀言語に絶す。此濱の前面に日出島あり。潮汐の加減により海水巖角を突いて空に騰る數丈。之を沙吹と云ひまた灣内の奇觀たり。其他小野小町か「あきの井に身を焼くよりも悲しきは都島への別れなりけり」と歌ひけん、沖の井は淨土濱より四五丁の海中に眞水の湧き出づるを稱し、都島は宮古の名の語原なるべしと思惟せらる。

宮古街道

宮古街道はまた閉伊街道とも云ふ。宮古町の西端より發する宮古街道は、盛岡市に至る廿七里の間、大部分は山嶽屏風の如く立て列ねたる豁谷を通過するものにして、且つ殆ど其大半閉伊川と共に終始せり。途中の驛路には茂市、川井、川内、門馬、松草等を有するも一箇所の町すらなく、旅人をして殆ど寂寞の感に打た

れしむ。然かも其青嶂白雲と溪水樹石との奇に至つては彼の木曾街道と比較して多く遜色なく、殊に紅葉の頃に至れば嶺の木々二月の花よりも紅あかに染そみ、松の緑と相映發して時ならぬ花の眺めあり。先づ宮古を發して第一に足を投ずるは千徳村にして、其花原市ケハラシには華嚴院あり。俗説に源爲朝の四男大島四郎爲家の建立なりと云へり。尙此村内には長根寺と稱する名刹もあり。花原市と閉伊川を隔て、相對するは花輪村ハナワ字老木キにして此地に根城ネシロ趾あり。根城館又は中根城とも云ふ。閉伊陸奥守頼基の居りし所。頼基は鎮西八郎爲朝の三男、烏冠者爲頼なり。趾中老木八幡宮は頼基の建立せし全城の鎮守とす。閉伊街道の風景はこれより次第に其奇を加へ、茂市驛なる茂市橋附近は河勢頗る凡ならず。川井には流月庵と稱する名所あり。川内の宿舎は此街道中にては最も佳良なるべし。これより以東は街道最も險阻にして斷崖百尺、溪流遙かに眼底の樹間を縫オホトウふて流れ、眞に大峙オホトウの名に背かず。現今の街道は懸崖の中腹を通ずるを以て、尙比較的平夷なれども舊道は更に此上に位し、眞に旅人の心膽をして寒からしむ。こ

れより門馬村を歩き盡して、將に岩手郡の堺に到らんとする邊、道は最も高原の上に通じ、兜神岳南方の茂林中に兜明神の祠を見るべし。俗説に安倍貞任の兜を祭る所と云へど、其實を知るべからず。此處より道はひた下りに下り岩手郡梁川村を経て遂に盛岡に入る。盛岡、宮古間には馬車を通じ、尙近時盛宮自動車株式會社も計畫せられたり。

川閉伊

閉伊川は兜神岳に發源し、古生層を貫き、狹深なる溪谷を穿ちて東流し、迂曲盤旋、門馬、箱石等の諸邑を過ぎ、川井村に於て、南方天狗森（早池峯の屬）より來る小國川を合す。之より流稍大なりと雖、山巒逼りて相起伏し、川は其山腰を繞りて走流するを以て、屈曲蛇行し、兩岸殆平地なし。かくて茂市村に至り、左右豁然、沿岸に僅少の第四紀層平地を作り、宮古灣に注ぐ（山崎直方氏著『大日本地誌』）。延長凡そ十六里許りにして河口より約三鏈の間は小艇を通ずべし。廣瀬青邨の詩に曰く『一從頼子寫雲煙。耶馬溪名天下傳。奔水奇石千萬狀。陸中亦有閉伊川。』

石津川

宮古町より南二里半ばかりにして津輕石に達す。津輕石川は此村を流る、川にして幅十間に充たず、深さ漸く膝を没するに過ぎざる細流なれども、古來鮭源を以て著名なり。近年其漁況は従前の如くならざるが、一期尙千尾の漁獲あること珍しからず。盛漁期は十二月より一月に至る嚴寒の候なりと雖、漁夫は群鱗潑刺の壯觀に鼓舞せられ、衣を棄て、水中に躍入り作業す。其盛況想ふべきなり。古來有名なる南部の鼻鮭は主として此川より産す。殊に此川の沿岸なる津輕石村字赤前には明治三十八年を以て創設せられたる日露戰役紀念鮭魚人工孵化場あり。建物の内部には水槽を設けて卵を孵化せしめ、長ずるに従ひ、稚魚は構内の池水に移し、後津輕石川に放つ。本場は始め鮭卵三十萬粒を孵化すべき規模なりしが、其成績佳良なるを以て、四十一年六月、更に之を擴張し、百萬粒を孵化し得るに至れり。

●●●●●
山崎鮭山 は津輕石村の人、名は吉謙初め謙藏と稱せり。十七にして水戸に遊び、尋いで京都に赴き詩人藥川星巖に學ぶ。星巖、鮭山の詩を評して天籟と稱せりと云ふ。頼鴨涯、小野湖山等と交り、大に得る處ありしが、

安政六年、南部藩學の助教となり、次いで縣學校教官たり。明治十二年集義塾を盛岡に開き、子弟を教授す。鯢山、經學に精しく易理に通じ、而して詩に至つては、小野湖山、大沼枕山と併せて、一時日本三山の目あり。鯢山詩稿、馬山游草等を著す。明治二十九年五月病んで歿せり。年七十五。

黒森神社

宮古より西北に進む事十四町にして山口村あり。有名なる黒森神社を存す。俗傳によれば推古天皇の御舍弟宮是津親王、勅勘を蒙り、宮古浦に配流せられしが、全處に於て入水し給ひ、死骸を發見する能はず。乃ち鶏を舩上に乗せ、周航して尋ねしに遂に今の沿岸黒森に至つて鶏鳴き遺骸を發見するを得たり。依つて地を磯鶏と名づけ明神に祭る。これ即ち宮古町より南二十町に當る唯今の磯鶏村なるが、南部守行、更に山口村黒森に明神を勸請し、尊崇斜ならざりしと云ふ。一説には和銅年間の創建にして人皇四十三代元明天皇の御時、建速須佐雄命、大己貴人命、稻田姫命を祭る。建久元年再建し、應永庚戌南部信長社殿を建立して厚く崇殿せる處と。後説或は眞に近かるべし。

黒森神社

徳富健次郎

良平の家から東北約一里の山上に鎮守黒森神社がある。傳説には垂仁天皇第二皇子惟津親王を祭つたものと云つて居る。杉、松、檜、樅の類が眞黒に茂つて、黒森の名もよさはしい。實に縣下第一等の官林で中に爺杉姥杉と云つて姥杉は先年焼けたが共に周圍三丈五尺にあまるがある。また此も雷火に焼けたが黒森の一本杉と云つて、海から目むるしになつたもので、宮古浦の漁夫などは太平洋に稼の出入に今以て舟の上から黒森を拜む。昔から南部の殿様も參拜せられ、農工商の信心もあつく、大權現の獅子頭を振り、手平金を鳴らし、横笛太鼓で南部領内を巡る時は、何處の家でも燈明供餅で迎へたもので、從て寄進収入も多かつた。こゝに天明の頃盛岡にさる山伏があつて黒森を盛岡の直屬とすべしと官に訴へた。山口村民大に騒いだが策の出る所を知らない。時の莊屋の喜惣兵衛煙管を控へて云ふには「村の衆達、今度の公事はこの喜惣兵衛が一人て受合つた。俺か代になつて權現様が他郷のものに

取られだちうと、御先祖にも子孫の者にも申譯がねエ。終に盛岡の城下で、御代官の面前に山伏を論破して、俟ちわぶる村衆に吉報を傳へんと三十里の山路を一晝夜に歸つたさうだ。そこで黒森大権現も此莊屋を徳として、今も冬季農閑に出て、領内を巡る時は、先づ莊屋の墓を弔ふ。十二人の神樂男は

戀しさに戀しき人の墓訪へば

さきだつものは涙なりけり、涙なりけり

と哀々しき神歌を歌ひつれて、墓のぐるりに墓獅子の舞を献ぐる。其都度良平の家で黒塗盆に洗米と聊の賽錢をのせて奉るのが例となつて居る。三階菱の定紋を彫つた肉色の墓石は、わび／＼上方から持つて來たとか云つて今も下り石と呼んで居る。

(寄生木)

三陸海嘯

明治二十九年六月三陸の沿岸に大津浪あり。岩手縣沿海地方多少に係らず其慘害を受けたるが、就中猛烈を極めたるは宮古より北方四里田老村を起點と

し、更に其北四五里の間とす。當時激浪の高さ十五丈に達し、田老村の戸數三百四十戸悉く流失し死を免れたるもの僅に三百五十人なりき。田老より北三里に小本あり。其附近なる小本川の入口に今大岩一箇あり。こはもと濱邊にありしを、同じ年の津浪の爲に其位置を轉ぜるなりと云ふ。

小本川 閉伊川北偏の大水にして、北上山脈の東側の横谷を流下す。源は兜神岳、五大堂山に發し、東北流、大川の名あり。淺石に至り、門川(小川)を合せ、以下東流、岩泉驛の南を馳せ小本村に至り海に入る。長さ凡十四里。

岩泉

小本より所謂小本街道を西方へ進むこと四里二十六町にして岩泉村あり。宮古警察署分署、宮古區裁判所等あり。南部牛の主産地にして、峽中並に附近の海濱に畜養せらるゝもの、皆此市に來りて交易せらる。而して其飼養の方法も一種特別にして冬季のみ舍牧とし他は自由に山野に放牧す。岩泉の驛邑は町中に堰を通じて飲用水とす。冬は氷れるものを、ものに入れ溶解して用う。家毎に薄絹を織りて名

産とす。此地方第一の福地なり。岩泉の源池は周圍五六間、岩窟より猛勢を以て清泉を噴出す。岩穴の前には明神の小社あり。松明を照らして其奥を窺ふも深さを知るべからず。洞中三十間位ならては入ること難し。また奇勝と稱すべし。

小本街

岩泉より二舛石其他の小驛を過ぎて小川村に入れば、門と稱する地あり。此邊の炭山は良質の石炭を産し、其區域また宏大にして門炭かどたんの名、夙に著聞すれど、交通不便の爲め採掘意に任せざるは惜むべし。これより岩手郡に入り、藪川、玉山の諸村を経て盛岡に入る。小本よりの里程實に二十七里弱。其道中の荒寥寂寞たるは勿論なり。

久慈地方

野田玉川

小本以北は海岸の出入に乏しく下閉伊郡普代村黒崎より、九戸郡宇部村三崎までの間、さながら弛めし弓の如く、極めて弛緩なる海灣を爲す。黒崎

は、南北兩傍の臺形地より起りて、千四百呎に高まる七ツ森の山麓にして、稍東に膨脹し、高く斷崖を爲せり。海岸に近く航行する船よりは最も著明に望み得べし。これより北に進めば即ち九戸郡にして、野田村安家川を



野田玉川の川

越え、玉川に至る。小本より約九里。玉川は古來有名の歌枕にして、西方の山中より流れ來りて海に入る。河口には大少の巉巖集散離合す。小岩の二つ双べるは鴛鴦の翼を交へて波間に戯るるが如く、遠く峙つ巖石は巨人の夢に眠るに似たり。群がる千鳥は岩の數々啼き渡り、綠なる松が枝の露を帯び漁家二三十その間に點在す。左岸に四丈餘の小丘あり。丘上平坦にして壘の如く、翠松四方を圍み、波濤丘下に激す。こゝに西行庵の古趾あり。河中多く玉の如き石を出す。尙附近に野田の入江

一つ橋の舊趾あり。これまた古來歌人の諷詠多し。

夕されば汐風として陸奥の野田の玉川千鳥なくなり

能因法師

みちのくの野田の玉川見渡せば汐風として氷る月影

順徳院

光りそふ野田の玉川月清み夕汐千鳥夜半になくなり

冷泉爲家

朽ち残る野田の入江のひとつ橋こゝろほそくも身ぞふりにける

平政村

千鳥玉川 (清元)

「夕されば汐風越して陸奥の、野さへ山さへ色付きて、戀に時雨の名所も、遇玉川の逢瀬さへ、しのぶ文字摺り誰ゆゑに、乱れの心の狂ふらん。「しとげなりよしふりもよく、振かたげたる笹の葉の、一夜の契り床しやと、及ばぬ願ひ求塚、かの水鳥のかけことば、夫れもとどかて朽果てし、その錦木の敷ならで、是ぞ千鳥の物狂ひ、戀せまい迷ふまい。「かはす枕は荒磯に、船打ちよする浪枕、筥を敷寝のかち枕。」

十府の浦 今は池となれるが、昔此の浦に叢生せる菅にて十節にあみし菅薦を産出し、是れ貴人の敷物とせりと云ふ。

陸奥の十府のすがこも七ふには君をねさせてみふに我ねん よみ人不知

水鳥のつらゝのまくら隙もなしうべさえけらし十府の菅こも 大納言經信

見し人もとふの浦風音せぬにつれなく澄める秋の夜の月 橘 爲 仲

陸奥の野田の菅こもかた敷て假寝さびしき十府の浦風 能因法師

尙この村に無量山海藏院とて珊光國師の開基せる名刹あり。

齋藤三平 九戸郡野田村の給士なり。人となり慷慨に富み、經濟に長じ、南部侯の近侍となり會計掛りを兼ね。年二十、職を辭して江戸に至り、屢々幕府の閣老に建言して蝦夷地開拓の急務を切論す。後南部侯再び用ゐて勅定奉行とせしが、三平横澤兵庫を薦めて要職に居らしむ。然るに兵庫却りて三平の才を嫉み、職を褫つて盛岡に檻送す。三平警城に隠匿し宛を町奉行に訴へ且兵庫と對審せんことを哀願す。因りて宛を雪くを得たりと雖も、脱藩の罪に依りて江戸を追はれ、小梅村に蟄居せり。後阿部閣老に建策して蝦夷地開拓の事を陳べ將に重用せられんとして、閣老死し、三平の言遂に行はれず。當時鎖國の論既に解け、外人の來朝するもの多し。

三平乃ち米人を雇ひ、自ら北海道に赴きて開拓を謀りしが不幸病を得、文久元年九月を以て逝けり。

三崎

野田の東北方三崎は、野田及び久慈二灣の分界たる岬角にして、高崖約七百尺、海上に突出すること一海里半なり。海中、一小白石の島嶼ありて白島と云ふ。高さ二十尺ばかり。鮠とどの群集するを以て又鮠島崎とも云ふ。此島と崎との間には數個の暗礁あり。怒濤の澎湃するや、飛沫霧の如く、風色荒涼として、春尙秋の觀あり。この岬角の背は平蕪にして、三崎野と云ひ、藩政時代に於ける十三牧の一なり。三崎より更西北に進み、長内村に入れば小袖の浦あり。此地方に於ける景勝地にして、海波平に、閑鷗影ほのかなり。『三閉伊路程記』に曰く『小袖の浦はところ狭きに、家多く、軒をかさねたるは、賤の田舎にまれなる哀れなる里なり』と。以て其書様なるを見るべし。

久慈港

宇部より、更に北行して、久慈町に至る。野田より約四里なり。此海市を擁せる久慈灣は、南角三崎と、北角夏井村の辨天鼻とによりて成り、開濶なる

太平洋に面し全く風浪に暴露せらる。而かも辨天鼻周圍を除くの外、二鏈を距れば危険少しと雖も、底質多くは頑牢なる岩石なるを以て、錨地としては適せず。但し海上波靜かなる時、辨天鼻の半島の南西方の半島に和船の假泊することあり。俗に此の假泊所を船戸フナトと呼ぶ。灣の南側は大概險崖にして、所々沙濱を交へて岩石羅布し、險崖松茂りて海波之れに煙り好景亦畫くが如し。而して久慈川は北上山脈の一峯、平庭嶽より發し、十里の間、低夷なる古生層の丘陵地を東に貫流してこの灣内にそゞ。川口、満潮の時漸く漁舟を通じ、二三の帆影千鳥の如く閃くを見る。

久慈町はこの川口の平地に位し、港まで約一里を隔つ。人口凡四千五百、九戸郡第一の都邑にして、九戸郡役所、久慈警察署、久慈稅務署、久慈小林區署、福岡區裁判所久慈出張所等の諸官衙あり、街路廣く家並揃ひ、商業活潑にして繁華なり。殊に舊盆の送火消え、八日過ぎて後、市の開設せらるゝや、商人は遠く仙臺、青森邊より物貨を運び來り、盛に賣買を營む。人の麇集甚しく、市街は暫し熱鬧喧噪の地と化す。

市街はもと沼地の上に建設せられたるもの、如く、淫霖天をとざし時、泥濘甚しく歩行に悩むことあり。西南は皆山なれど、龍見神社に至れば眺望豁然、市街の白堊粉壁一眸の下に集り、久慈灣の濤影夢の如く光る。新町には久慈館あり。承久二年、南部三郎朝清、其父光行に本郡の半を承け、久慈を以て氏とす。後、陸奥七戸城に遷り、其族黨を置きしが天正二十年、久慈修現、之を毀てり。この地は三方に道路通じ、一は小本に至るべく途上險惡にして行旅稀れなり。二は輕米を経て福岡に至る正道と稱するものにして、三は田代に出て大野を過ぎて八戸町に至るものとす。就中八戸街道最も便利にして長さ十六里、乗合馬車を通ず。早朝出發すれば夕の六時には達すべし。唯冬季は雪深く、周圍の交通皆杜絶し、海岸は風荒れて怒濤澎湃し、舟楫を用ゆべからず。市街蕭條として寒天に孤立するに至る。されば物價は甚しく騰貴し、春彼岸の頃、砂糖等は價格平生に倍することあり。この地方米は産額極めて僅少なるを以て重に稗を主食す。物産として見るべきは牛馬、大豆、蕎麥、馬齡署、鮑、鯖、烏賊等に

して往々沖より鯨の獲らるゝことあり。

久慈川 久慈港に流入する久慈川は北上山脈の一峯平庭獄の東北に發し西南より来る長内川を合せて東北に流る。長さ約十里なり。河口滿潮の時僅に漁舟を通ずるのみ。久慈町は其南西二海里にあり。

大川目 の八幡

久慈の西一里を隔て、大川目あり。南部朝清の子光興、陸奥征討の軍功により、建久二年、賞として久慈村を賜ひ、六代久慈備前守信實に至りて、こゝに居館を構へ、八日館と云ふ。後、九戸政實の乱に與して、その家、斷絶せり。村内山口に有名なる郷社八幡宮あり。應神天皇を祭る。村上天皇の御宇、彌平太義高と云へるものあり。來りてこの地に居る。天曆十年、降雨連月に及び農民の苦むこと甚し。彌平太、乃ち毎夜沐浴して、晴を祈り、遂に神託を蒙りて、木札に應神天皇と書し、之を村社に納めしが、爾來八月十五日に至るまで、風雨その宜しきを得、禾穀山野に豊滿して、民大に安んず。乃ち毎年八月十五日を祭日と定め、儀禮尤も努めしが、彌平太死せんとするに臨み、遺言して家傳の兜を社殿に納めしむ。これより兜の

八幡とも云へり。南部氏の家臣攝待半九郎、この地を領するに及び、社祠を造營して鎮守となす。其結構宏大にして境地幽靜なり。また村内碁石山よりは往昔多く琥珀を産しき。

侍濱

久慈町の北方半里にあり。こゝより産出する琥珀は、第三紀の砂岩中より出て、前年一團塊十二貫目ありしが、現今はかゝる大形のものを出さず。小形の上品、蛇入の奇品産出す。野田の濱邊には、砂石に混じ、美麗の琥珀を出す。夏井より尙少し隔たりて侍濱あり。久慈灣の一角たる辨天鼻の北にして、花崗石の大岩瘤隆起して臺地をなし、其頭に、北野築場野ツクバネの荒原あり。海岸線の出入少く、茫漠として際涯なき海面に薄き霧の如き潮曇り立籠め、冷かなる雲その間にほのめくのみ。沖には舟少なく一聲の歎乃だに聞えず。臺地の邊縁は急に峙ちて家稀れに、一帶岩礁乱立し、風少しく吹けば、激浪奔騰の壯觀云ふべからざるものあり。これより七里、種市に至る海岸も、四時風荒く漁舟の出入難し。種市の南なる八木は八木の船戸と呼び

稍漁舟の出入ありと稱するも、畢竟するに荒寥の海巷たるを免れず。

沼宮内地方

平岳麓の野

盛岡より北行すること約二里にして瀧澤驛に達す。岩手山下の廣遠なる裾野に孤立せる停車場にして、比較的近年の設置にかゝり、岩手種馬所、岩手縣立種畜場等の諸牧場に到るに便なり。山の靈氣に打たれつゝ蒼茫たる松原の露煙る間を進むこと二里半にして、好摩臺の高原にある好摩驛に至る。澁民、大更の諸邑を控へ且つ鹿角地方に至る道路を擁して之に乗合馬車を通ず。

霧ふかき好摩の原の停車場の朝の

虫こそすゞるなりけれ 石川啄木

●●●●● 駒形神社 好摩驛の東南十五町、澁民村字芋田にあり。昔、酷薄なる豪農ありて、

憤飯に堪へず。毎年陰曆正月十八日、八月三日祭祀を執行し參詣者頗る多し。享和中の撰にかゝる「東山志」に曰く。「卷堀村、左のかた檜の大木八本あり。其所の民家に金勢明神を祭り、いつの頃よりといふことを知らず。神体は唐金を以て作れる男根にて土俗傳へて、此村の小女、十三四歳になれば、一夜夢中にれそはるゝ事あり。是れ金精神の淫瀆なすが故と云ふ。又中古、一靈人この犯暴を惡みて、鐵の鎖を以て繫きたりと雖も、猶淫瀆を止めず、時々遊行をなせりと云ふ。一説弓削道鏡を祭る。」と。

川近口

此地より尙、北に進めば愈々平原も盡き、秀巒層峯聳立して岩手山を隠没し、北上川は幽谷の間に咽びに咽びて、寒煙蕭條、車窓に迫り、風色轉た荒寥たり。隨變紀程は此の地方の民情を記して「大低、山谷細民、食稗寢藁、樵蘇耕牧、男女同業」と云ひしが今も變らず。かくて好摩より一里半にして川口驛に達す。昔時、郷士川口五郎の古城跡なりとて、今呼んで館といふ。北上の東岸に縁り、停車場に近く數十の人家集密して一邑をなす。又この北、雪の浦には、古より行旅に賞美せらるゝ

樹の古松あり。數十の枝、楊柳の如く垂下すること丈餘、頗る奇觀なり。

丹藤の瀧 川口村丹藤マンドウにあり、兩岸樹木鬱蒼たる間に飛瀑かゝり、水勢激迅、蒼巖叫び、白沫踊り、壯快に實に云ふべからず。碧潭、瀨をなして奔る所、一味の幽色を湛へたる橋あり。之れを丹藤橋と云ふ。夏期鱒の之れを昇るは一奇觀にして、村民瀧を利用して網を設け、漁するもの多し、

丹藤川 北上の一支流にして沼宮内、川口、兩驛の間にて本川に合す。而も其水は、東南遙遠の山谷を發し、曲折十二三里にして此に至るを以て御堂以南の本川に比すれば、最も長し。丹藤の源谷は鯨川村にして北流、刈宿、大渡に至り、笹渡澤を合せて西へ折れ、三里許りにして北上に歸す。

沼宮内町

川口より一里半を隔て、沼宮内町あり。昔時沼宮内少輔の居りし所と云ふ。人口二千五百、波濤の如き蒼巒に圍まれて一條の街路あり、分ちて愛宕通り、大町、新町、野口町とし、町内に沼宮内小林區署、盛岡警察署治宮内分署、盛岡區裁判所沼宮内出張所、沼宮内郵便局等を存す。近年再度大火あり、全町殆んど災厄に冒

されて悲惨なる光景を呈せしが、今や新築の家屋整齊し繁華なる都邑をなせり。これより東海岸小本へ二十三里、平坦なる街道開通す。尙民部館趾に沼福寺あり。明治十四年七月二十五日、先帝東巡の際、御用馬瀧澤號、此の地に於て疾病に罹り、福士徳右衛門の厩舎に療養を加へたるが、御發輦三日後遂に斃死せり。其碑本寺境内にあり。此の地に最も興あるは盆三日の光景にして、全町の老若男女上下の差別なく、種々なる姿態に假裝して幾重にも輪を書き、藝々たる大鼓の音調に合せて、月下に踊る。之れを甚句踊と稱す。

あらのけやく殿(情人)この頃やせた

三廻る帯四廻る。

川の向から十七八招く

十七八ぢやないやい茅の穂だよ。

此附近の山地より出づる産物豊富にして大豆、木材、木炭、軸木、胡桃等は諸方に搬

出せらる。特に誇るに足るべきは百合にして、肥大なる鱗狀の球形、白蓮の花の如く、食して頗る美味なり。

弓水

沼宮内より國道を北行すること二里、更に東北さして山中の狭路に入れば、溪流珊々として奔り、樹木鬱蒼として茂る。やかて進むこと半里にして御堂村に新通法寺あり。北上山と號し、嵯峨天皇の大同二年、田村麿將軍の創立にかゝる。本尊は十一面觀世音にして僧馬慶の開基と云ふ。天臺宗に屬し比叡山延曆寺の末寺たり。藏什に源義家が陣中に用ゐしてふ釜(徑二尺八寸)及び矢の根あり。尙此の寺内に弓弭清水と稱せらるゝ古蹟を存す。天喜五年、源賴義、安部賴時と戦うて此地に至るや、時恰も六月、炎天焼くが如く、雨らざること數十日、河水涸れ士卒渴を呼ぶ甚し。賴義、乃ち觀世音を祈念し、弓弭を以て巖頭を突けば、清泉忽ち湧出して溢る。同年九月遂に賴時を滅ぼすや、賴義報賽として一字を此地に建て、頭髻の間に藏せし、觀世音の小像を取つて安置せりと云ふ。境内頗る幽深にして、四間に三間の古雅なる觀

世音堂の周圍には太さ十三尋の老杉四本天空を蔽うて立つ。泉は今、岩を鑿ちて聖池となり、紺瑠璃の如き清水を湛ふ。里民之に紙燃を投じて吉凶を占ふの俗あり。之を日本第三の大河北上の源泉とす。

河北上

北上河はまた來神川、北神川等とも書す。岩手縣を縦走する奥羽、北上兩山脈の縦谷を流る、大河にして、兩山脈の斜面を流下する諸川を合せつゝ、南下して遂に宮城縣桃生郡に至り追波川オツバを派し、牡鹿郡石巻に於て仙臺灣に注ぐ。長さ六十二里十七町。中流以下に於て或は丘陵地を穿ちて峽流を爲し、或は冬季凝結することあり。或は河口の欄口堆屢々變動して船舶の出入を苦むることあるも、盛岡より以下舟楫を通ず。河中多く鮭、鱒、鮎、鰻等の魚族を産す。沿岸は平野廣からされども、概ね北上河の爲せる沖積層地にして地味肥沃なり。北上の語原に就きては、古書、御堂村の温泉の加美川に注入するに因すとすれども、恐らくはもと日高見と云へりしを、泰衡征伐時代鎌倉武士の轉訛せるならんと云ふ。

七嶽時雨

宮沼内の北西に嵯峨として聳え箕久保山と相並びて、二戸郡との交界をなす。標高三千尺、火山成立に屬し、岩手山の東北七里に位す。即ち北上河源と馬淵河源の分水界は是等火山、及び御堂峠(中山)馬葉松山等の一脈に由る。

福岡地方

陸奥の二戸

沼宮内驛を出づれば、流車は北上川の源頭に連亘せる中山峠の峻坂を上り、こゝに陸奥國二戸郡下に入る。二戸は古の糠部郡の南部地にして、一戸二戸を以て近世、二戸郡と定めらる。之はもと數戸數烟の聚落を指せる稱にして東國奥羽の方俗なり。而も糠部に於て一戸より九戸まで、順次にその邑名を立てしは、蓋、貢馬置牧の制法に基因する者にして、猿樂狂言うつば猿の小歌に所謂「一の幣立、二の幣たて、三のへたて、三に黒駒、信濃を通れ、專當殿こそ勇健なれ」と云へるは古

の駒引のことを詠じたるものなるべく、一の幣立とは、一戸にそだてたるてふ義なり。

三日月のまろくなるまで南部領

中山

沼宮内驛より約三里にして中山驛に達す。こゝは東部鐵道線路中、最高峻の地にして、海拔千四百九十四尺。線路は前後共に四十二分一の急勾配を以て下れり。山深く、溪清く、翠嵐の搖曳、白雲の浮動する中に、藤花、躑躅咲き乱れ、夏は白百合満天に馨りて、夜中單衣に凌ぎ得ること一週間に過ぎずと云ふ。しかも秋季紅葉の美に至りては其好景、碓井峠に勝るべく、唯溪間の白水を残して一大紅雲に蔽はる。峠の以北は住時の所謂奥の細道なり。元祿中『奥の細道』の著者は事實に於て、この峠に來らざりき。歌枕見にとて下されし藤原實方もその足跡、この地に及ばざりき。しかも西行の詠歌に「東路のあひの中山ほど狭み心のおくの見えばこそあらめ」と云へるはこの峠を吟じたるものならん。此の地方は特に牧場に適するを以て、三本木軍馬育成所派出所あり。陸軍省の用馬を養ふ。中山驛より西南、五丁程にしてその境

堺に至る。面積五千六十町餘。馬匹は二歳牡馬を購入し、三歳にて馴となし、五歳に至るまで飼育す。馬匹數は常に千頭を超ゆ。

天正十九年、氏郷は九戸の城普請成就して、十月始めに、九戸を出て「又越ゆべしと思ひきや命なりけり」と云ひしは遠江小夜の中山、爰は「始めて陸奥」の中山越えて見渡せば西に一の高山あり。あれなん奥の富士と聞ゆる岩鷲山、歌には「陸奥の岩手の森の岩つゝじ」と詠めりとかや。誠に突出したる山のすかた、奥の富士としも云つべし。翌日は不來方に到着す。〔永慶軍記〕

中山峠の峻坂を急下してその窮まるところに小繫驛あり。人家百餘集聚し、停車場より約三十町隔つ。昨年より斬く旅客の乗降を取扱ふに至る。昔日は奥羽街道の重要な宿邑たり。近年水戸の鹿志村氏附近の山地を買収して、盛に植林を營みつゝあり。

小鳥谷驛

小繫驛を出づれば、山水愈々奇にして、小繫川の溪流、大小無數の瀑布をかけ、石に激する水煙、重疊せる山々の白雲と乱れて天地にさ迷ふ。特に瀧見隧道の側に落下する飛瀑を見て、高橋橋を渡ればやかて小鳥谷驛に達す。中山より約二里半なり。寂寞たる村邑にして往古五月と云へる蝦夷の住居せる五月館の遺址など

あり。又停車場邊より石器時代の遺物を出すことあり。人類學雜誌によれば、斯民は、或は馬淵川の鮮魚を漁し、或は中山の鳥獸を獵し、以て其の口腹を飽かして生活せしならんと云ふ。尙、之れより十八町、尻引坂を越えて小性堂に至れば、胡四王堂と呼ぶ一祠あり。昔、京方より流罪の君達三十八人下向の故跡なり。墓石荊茨の中に點々、青苔にむされて露乾かず。この地方、地味瘠薄にして材木、木炭の外、大豆の産あるのみ。

葛巻

葛巻村は九戸郡の西南隅に僻する一村にして小鳥谷驛の東南五里、九戸郡久慈を距る十里に位す。この地方曠原丘陵に富み、野草藎々として溪流清く自ら天然の好牧場をなし、古來牛馬の名産地として喧傳せらるゝ所なり。且一般の村民勤儉貯蓄の良風あり、村有基本財産蓄積の方法を確立し、逐年之れを増殖し、夙に縣下の良村として美蹟を擧げつゝあり。

俗 語

ゆんべな生れた太郎アこめいかみない。米かみたから、田さはいれ。田さはいれば泥アつく。泥アついたら、川さはいれ。川さはいれば流れる。流れたら、よしさとつけ、よしさとつけば手ア切れる。手ア切れたら、麥の粉をつける。麥の粉をつければ蠅がつく。蠅がついたら、扇もてほい〜。

町一戸

小鳥谷より尙此北行すれば、馬淵川は深山幽谷の底に現はれ、激波岸を揺がす。列車はこれより、尙多くの隧道に入り、鐵橋を渡り、小鳥谷より三十丁ばかりにして一戸停車場に着すべし。一戸町は停車場を去ること遠からず、以前は二戸郡内第一位の名邑なりしが、時代の推移と福岡町の發展とに伴ひ、勢力を同町に吸収せられしもの、如し。人口貳千有餘。馬淵川は之に貫流して其上に萬代橋を架す。橋北、上町には商家軒を並べ人馬の住來繁し。近年町況は橋南新町より停車場通りに發展し多くの家屋建設せられ、繁盛なる一區をなすに至れり。一戸城の遺趾は驛の東にあり。北館とも呼び、建久の頃、藩祖南部光行の庶長子彦太郎行朝を置きし所とす。

爾來、天正の初年に至りて、家臣北秀愛を城代となせしが、同九年之を毀てり。町の背面に當り丘陵を負ふて諸法山實相寺と呼ぶ著名なる伽藍あり。二條天皇永曆元年、洛陽惠心院源心和尚の法弟、圓證僧都の門葉圓忍僧都(俗姓は京極殿無官卿有忠卿)遁世して當郡金田一村に來り、一字を建立して實相寺と號し、不斷念佛の道場となす。開基より廿七代迄は天臺宗なりしが、明應年中、廿八代良滿上人西京知恩院より來りて之に居り、堂宇を浪打山の麓に再造して淨土宗を奉じ、天正年中兵火に罹り、現在の地域に遷置せられたり。尙之れに南隣して曹洞宗廣全寺あり、元穴平にありたるを萬治元年此地に移轉せりと云ふ。本堂十四間に八間半、庫裡に通ずる長き廻廊ありて白壁皎として横はふ。内陣に安置する釋尊座像及び左右の文珠普賢二躰は作者傳來不詳のものなれど、孰れも端嚴微妙の相を湛え、萬民の渴仰するところのものなり。停車場より西南凡そ三丁餘にして毘沙門堂あり。大同年間田村將軍の建立なりと云ふ。本尊五丈餘の木像にして運慶の作と傳ふ。疾病の護神なりとて毎月三日遠近より參詣

の人群集し、境内又松杉森立して晝尙ほ暗し。

一戸にして

一戸や衣やぶる、駒むかへ

去來

一の戸より北の方へかぞへ、一の戸、三の戸、五の戸、七の戸、野邊地とて戸の字の付たる地多し。戸の字はへと讀むなり。皆三里五里、或は七八里を隔て、山に據り川を受けて要害の地なり。多くは城跡と見ゆ。今にても戸の字の付く所は、皆町作りて賑かなり。往古蝦夷を防ぐ木戸ありしと覺ゆ。(橋南翁著「東遊記」)

末の松山

一戸停車場の北三十町、同町と福岡との中間にあり。馬淵川の東岸に屹立する歌名所なり。近時水に沿ふて、山脚に國道開通したりと雖も、往時は専ら羊腸たる嶺道を上下せしなり。嶺上波濤の打寄せしが如き痕跡あり。且つその地層中に海産介類を含めるを以て又浪打峠とも云ふ。地學雜誌に曰く「その地質を見るに、第三系に屬し、貝砂の海底に沈査累積して、砂岩層を造出するに當り、水勢急激にして、流向の變換極りなかりしを示し、其狀恰も波打寄せたる如くなれば、土人之を奇

とし、波打の名を命ずるに至りしならん。斯る不規則の層理を、地質學者は偽層と稱す」と。こゝに昔、名高き三葉の松亭々として茂りしが何時か枯衰してその朽根のみ殘



れり。明治初年 先帝巡幸の際、兩度なからこの坂路を御通輦あり。村民山上の御休息所の遺趾を紀念せんがため、櫻樹を植えたれば、今や一變して櫻花の名所と化せん山とす。その北麓に櫻清水あり。清泉常に湧出し、側に老櫻數幹ありて落花水上に飄零す。

君を置きて仇し心を我もたば末の松山浪も越えなん 讀人不知

我袖は名にたつ末の松山の空より波のこえぬ日もなし 土佐

岸もなく鹽しみつれば松山をしたにて波はこえんとぞ思ふ 伊勢

浪越ぬためしとなりて幾年の名をやふりけん末の松山 讀人不知

浦近くふりくる雪は白波の末の松山こすかぞ見る 藤原興風

波打峠 杉 聽 雨

蛸海程中往又還。 楊柳指黙末松山。

春風更索落花地。 吹起波濤行脚間。

宿の男を案内にして末の松山越えをした。末の松山の故跡も二三ヶ處にあるが、仙臺附近のは政宗の作つたものであることは今日疑ひない事になつた。此處の松山は重疊たる山中、海に遠き事二十四里である處から、多少の疑ひも存せられる。併しこれには幾多歴史家の考證もあつて、土地の口碑をも確めてをる。一月から三十町ばかりの上りで、峠には岩とも砂ともつかぬ瀆の砂層ぢやと言はれる灰色の地面が露出してをる。其砂層の上に松が一本、枯茨の中に立つてをつた。(河東碧梧桐氏著「三千里」)

鳥越 觀世音

末の松山と一の丘岡を隔て、一戸町の北二十七町、鳥越山の上にある。此山其高さ數十丈。山上峨々たる絶壁の中央に廣さ十敷疊ばかりの岩洞あり。洞中に觀世音堂を安置す。鐵鎖によりて急峻なる坂を五丁程登攀すれば、莊嚴なる仁

王門あり。大同中、鳥越村鈴木雲客の本願により、慈覺大師、丈二尺三寸の觀音像を刻み、この窟中に安置せしが、圓融天皇の御宇天臺宗となり、東福院と改稱す。元祿中、火災に罹り一山焼滅し、明治四年廢寺となれり。山中紅葉の名勝地として筈を曳くもの絶えず。また鐵道は此山を貫通して東北線第一の大墜道を爲す。長さ七百間其北口に近く大瀧あり。里人網を設けて鱒を漁せり。

福岡町

一戸町より北に約二里、商業上最も樞要の地にして、縣北第一の都會なり。今一戸と三戸との間に二戸なし。蓋し福岡即ちもと二戸と云へるならんか。

天正十九年、九戸政實の乱後、南部信直、三戸より此地に移りて町を福岡と改稱せりと云ふ。停車場は石切所村イシキトコにあり。此處に下車すれば、眼前に現はる、異相の山河あり。馬淵川は怒號狂奔し、東方の對岸には大方崖の絶壁を作り、棲蒼なる斷岩、半空より一文字に垂下して、岌々たる勢、幾と正視するに堪へず。更に南方を眺むれば男神、女神と呼ぶ數十丈の巉巖相抱擁して聳え、その脚下に大淵の碧潭あり。驛より二

十町にして馬淵川を渡れば市街に達す。人口凡三千五百。馬淵川の右岸に沿ひ、白鳥川を挟み、天正の役南部信直の陣營せしつ陣場山及金録山を負ひたる細長き町なり。町内を分割して橋場町、五日町、城の外、落久保町、川又小路、上町、愛宕の下、中町、横町、裏小路、寺小路、田町、長嶺町等とす。町内に二戸郡役所、福岡警察署、福岡區裁判所、福岡稅務署、福岡郵便局及び縣立福岡中學校、福岡小學校等を存し、尙岩谷橋を架せり。九戸街道、鹿角街道の集點に當れるを以て、物貨の集散また多く市街繁盛にして商業活氣あり。物産は大豆、小麥、稗、大麻にして、又特産に漆器、化石細工、竹細工等あり。理學博士田中館愛橋氏は此地出身の人なり。

福岡城址

町の東にあり。もと九戸城と云ふ。承久元年、南部行連、父光行の封を受けて築きし所也。行連より數代を経て、九戸左近將監政實あり。勇力絶倫にして大志あり。宗家を繼かんとして成らず。伊達政宗と通じて事を擧げんとす。南部信直、大に怒り、之れを攻めたれど利あらず。援を豊臣秀吉に乞ふ。秀吉乃ち秀次を總大將

とし蒲生氏郷を副將とし、徳川家康を援軍とし、三萬の兵を擧げて九戸城に迫る。上軍先づ姉帯城を圍み、守將姉帯大學を殺し、根曾利、一戸柵を屠りて、餘勢波打に迫り、遂に本城を圍む。松前、秋田、津輕の援軍合し總勢六萬と號す。然れども城兵勇敢天險の要塞を死守して動かず。上軍の一將、井伊直政乃ち獻策して曰く、九戸勢勇あるも智に乏し。伴りて和を講ぜば必ず政實を生擒するを得んと。政實が長光寺の僧薩天と法縁篤きを聞き、これをして政實に説かしむ。政實欺かれて開城し淺野長政の陣營に至り、部將七人と共に遂に斬せらる。時に天正十九年也。戰後、長政、城を修築して南部氏に還附し、同年十二月に至り、信直三戸城より移りて福岡城と改む。寛永十年、南部氏、盛岡に移りての後、廢城となれり。今、殘濠頽壘、雨露蒼涼として空しく人を悲ましむ。丘上に今、地人國分謙吉氏の農事試験場あり。

福岡城

關元龍

滋蔓據巖邑。終移上國軍。城荒千樹合。

池涸一蹊分。霜月警弓影。露花疑血痕。

今干風雨夕。鬼哭不堪聞。

この古城の麓には得生山安養寺と云ふ一精舎あり。當山の梵鐘は町内の時鐘にして、隔時に時を報ず。寛永元年下斗米惣左衛門の寄納せしもの、古色掬すべし。

吞香稻荷神社 町内五日町にあり。老樹鬱蒼として神靈の莊嚴を守り、幾多の石燈籠、獅子像、銅燈等を見る。一の鳥居より二、三の鳥居と過き、切石道より二十間の石階を登りて、廣き境内に入る。境内には本殿拜殿、神輿堂、神樂堂、神樂堂、書文庫等あり。幽邃清雅を極む。祭神は稻倉靈命にして、伊勢國山田の豊受姫命の別靈を勸請せりとも云ふ。創立年月不明なり。九戸の兵亂を避けて一時陸奥國津輕郡にありしが天和二年、再び現地に奉還す。爾來二戸の郷の惣鎮守として累代藩主の尊崇あり。陰曆七月廿日及び廿一日を以て執行せらる、祭禮は、元祿十六年社領地五石賜りし以來、維新前まで藩費を以て辨じ來れり。當社の神樂は高尚にして優美、神代の歴史を演ずるも

のにして世に名あり。又社實の見るべきもの多し。尙、此地に傑士下斗米大作の碑あり。碑面には、大作が事を擧ぐるに當り一代の心血をそゞぎて筆せし津輕氏に與ふる書と其友藤田東湖の撰になる傳記とを刻し慷慨激切、人心を振作せしむるに足るものあり。

下斗米大作 名は將眞、幼名を秀之進と稱す。形水はその號なり。大作、幼より勇敢にして明敏。父惣兵衛、一日客と大浦左京爲信が其主南部氏の領地津輕を横領せしを罵る。將眞、側に待して憤懣に堪へず。長ずるに及び心を武事に用ゐ、享和二年、東都に遊び紀州藩士平山孝藏及び幕臣夏目長右衛門に従ふて武藝を修め、大に得る所あり。文化十二年父の病によりて郷里に歸り道場を建てて地方子弟を教ゆ。この時に當り藩主南部利用若年にして其位遙かに津輕氏の下にあり。將眞、益々憤激し機を見て報復の志を果さんと欲し、密に畫策するところあり。文政四年春、津輕越中守、江戸を出て、歸國すと聞くや、門人關良助、從僕大吉外數名を從へて出羽の國白澤驛に出て矢立峠に擁撃せんとす。然るに大吉俄に變心内通せるため、越中守、急にその旅程を變じ間道より歸國せり。將眞事の成らざるを見て妻子及び良助を伴ひ江戸に奔り、姓名を變じて相馬大作と云ふ。津輕氏、幕吏に乞ひて大作の所在を搜索すること甚だ急なり。大作、良助と共に遂に捕はれて死に處せらる、時に年三十四。

天照御祖社 アマテラスミコヤシロ 天照御祖社は稻荷社の南側にあり。九戸戦役に蒲生氏郷の甥氏綱十五歳にして陣歿す。其死するに當り、警中に納め來れる天照大御神の守護札を出し、待臣に命じて一社を建立せしめしものは是れなり。亂後氏綱の母、其子の菩提を吊はんとて、此地に來りしが、其舊臣の僧となれるものに邂逅し、氏綱戦死の狀を詳にするを得たりと云ふ。氏綱の墳墓は大方崖の絶頂にあり。

會補社 稻荷山下、小保内氏の邸内に殘存する塾舎なり。當時福岡の志士皆これより出てしを以て、人呼んで福岡の松下村塾と云へり。安政五年、小保内江村、長州の士小倉鯤堂と謀り創めし結社にして、實に東北地方に於ける結社の嚆矢とす。當社の講師として來りし名士中、長く留りて經史を講せしは創設者の外、藩儒那珂梧樓、常陸の士吉田盡等なり。

岩谷橋 白鳥川の斷崖に架し、長さ五十有餘間、高さ六丈餘、三本の石柱に支へられ、頗る偉麗の觀を呈す。この左傍の絶壁の岩窟中に岩谷觀世音の堂宇あり。由緒不

明なれど町民の信崇厚し。尙これより七町にして鎌取に有名なる老梅樹あり。傳へ云ふ、この邊九戸政實の舊苑にして梅樹はその遺愛のものなりと。樹の大き丈餘、老枝古幹、双龍の將に昇天せんとするに似たり。花、淡紅色にして數十歩の外に薫ず。

古園梅 田中館政啓

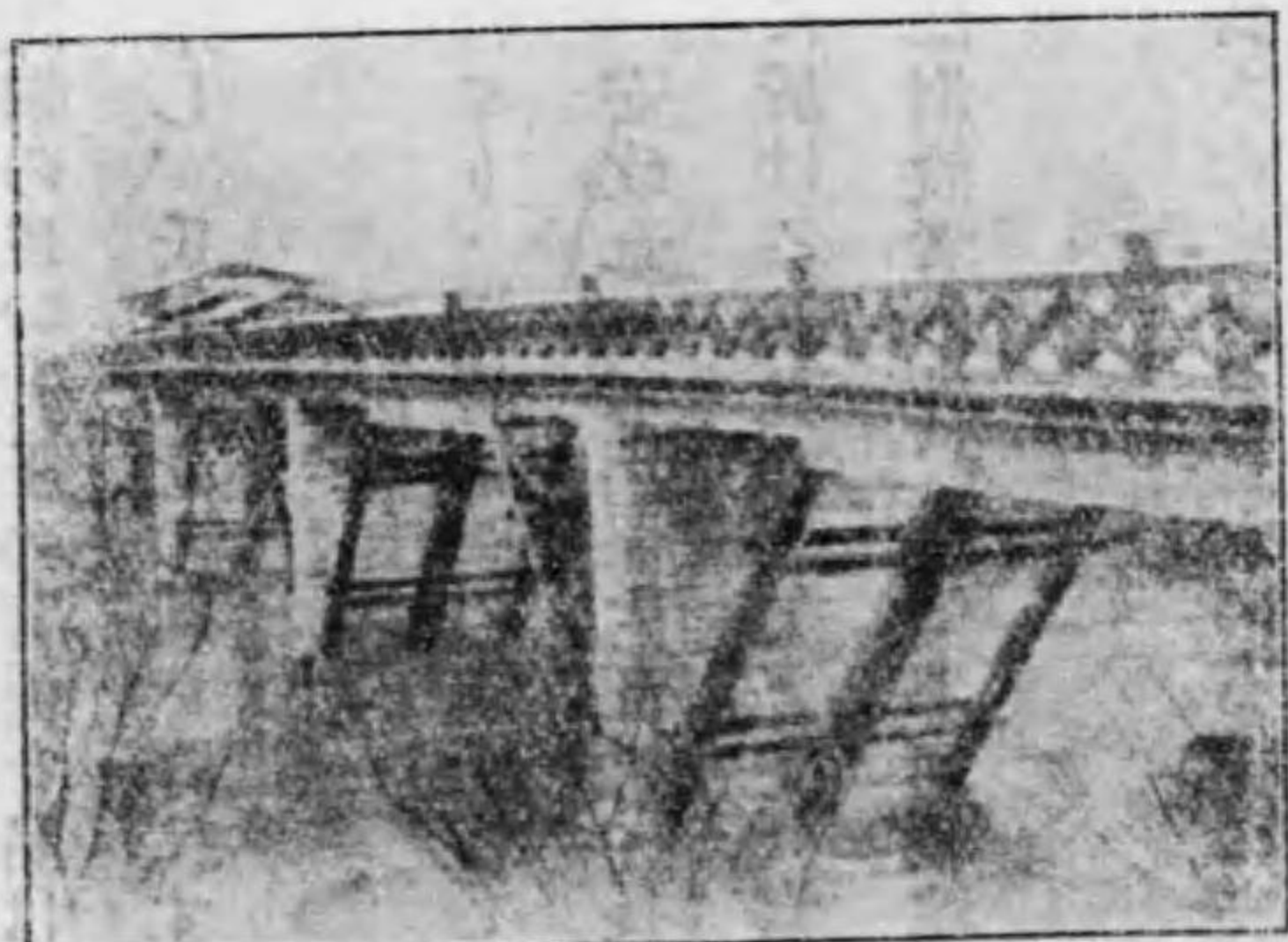
老樹己歴幾春秋 寵愛會逢九戸侯

風送餘光多古意 月移疎影帶新愁

清漂隱士全超俗 絳臉佳人半掩羞

幽賞看來感今昔 白川依舊水悠悠

善道寺 寺小路にあり。盛岡油町大泉寺の末寺にして文龜年中、雲郭和尚の開山なり。本堂には惠信僧都作の阿彌陀如來の立像あり。寺寶の龜の化石は稀代のものにし



岩谷橋

て明治九年六月 東駕東巡の際、末の松山に陳列天覽に供せしが敷慮に叶ひたる旨御沙汰あり。次きて獻納せしに、羽二重一疋、金一封を下賜せられぬ。

水晶瀧 水晶橋より左に降ること數十間、米澤の渡船場の繪の如く見ゆるところに一瀑布あり。數千の美玉を連ねし如き晶明なる水は、高さ四丈餘の岩崖より急下して馬淵川に落つ。瀧の上に老藤あり。花時は白雨紫風遊人の袖にふりそゞぐ。附近に長嶺町ありて妓樓軒を並ぶ。

馬淵川

岩手縣北部の主水脈にして間別川とも云ひ、九戸郡江荊村馬淵山マベチ中に發源し、西北に流れ、小鳥谷驛に至り、中山川を合せて北に向ひ、一戸福岡の間に於て西南より來る淨法寺川を容る。それより東北に轉じ青森縣三戸郡尻内に至りて淺水川を合せ、八戸町の北を過ぎて鮫港へ注ぐ。延長凡そ二十五里。淨法川會流以南を一戸川とも云ひ、北上川と相俟つて岩手縣の大縦谷を完成す。鮭、鱒等の漁獲あり。風景また甚だ佳なり。

爾薩

福岡の東北一里半、九戸郡輕米村(久慈警察署輕米分署の所在地)への山路にあたる。其名日本後記に見え、村内夷西の住居せし遺跡多し。敦盛草亂れ咲く折爪山の麓の蝦夷森、小山と稱する小丘など重なるものなり。その西堀野村には武内神社あり。本殿、幣殿、拜殿、直會殿皆森寂なる林の中にあり。神池湛然として澄み、藤花は紫に匂ふ。祭神は武内宿禰と稱するも、弘仁二年に此地を征せし大伴宿禰なるべし。折爪山は織詰山、折詰山等にも作り、岩手縣有北部摸範林を存す。

天臺寺

福岡より西四里、淨法寺村街道筋御山にあり。一大老桂樹の下、清泉玉を吹いて湧出す。故にこゝを桂清水とも稱す。登れば、古木、天を閉ざして、露時雨、仁王門の朽ちたる軒にふりかゝる。廣き境内には本堂、鐘樓、御供所、其他の小堂三十有餘宇散在し、往時の如何に莊嚴隆盛を極めしかを忍ばしむ。聖武天皇の勅願に依り、僧行基の開基せしもの。行基、勅を奉じて神龜五年陸奥に下り、こゝに寺堂を營み、觀世音像一体を彫刻して安置し去る。大同二年田村麿堂宇を再建し、元中



天臺寺觀音堂

九年南部守行、更に修築せり。寺内には正平十八年、大旦那源信行の銘ある罫口、元中八年五月の鐘等最も古く、今尙存す。元中九年は南北朝合一の年なれば、此時に於て猶南朝の年號を奉ぜる南部氏の、終始南朝の忠臣たりしは疑ふべからず。近世、明曆三年に至り、南部重直此寺を修造し、萬治元年閏十二月工成る。當時の建築記録猶存し、木材二十五萬本と云ふ。もと此寺には俗別當兵衛佐といへる者あり。世襲して以て今日に及べり。中世、法名覺祐住持の時、一代毎に杉苗二百本つゝ植うべき規定を設け、世々之れを遵守して、今寺域の鬱蒼たるもの即ち是が故と云ふ。明治三年十二月、青森縣官出張し、觀世音堂一字の外、此間に燦爛として並列せる藥師堂以下四十餘の堂宇を悉く毀壞し、安置せる神体

佛像を焼却し、其大門運慶の作と稱せられし仁王の巨像を破毀せらる。其の無智暴狀驚くべし。尋いで地租令公布せられ、寺領所屬の山林、徴證不十分の故を以て官沒せられ、却て小作人の私有として地券を下附せられ、凡そ四十石餘の寺領の内、僅かに十石を餘せるのみ。爾來爲に荒廢し、北奥第一の靈場も、あはれ見る蔭もなきに至りぬ。尙現存せる寺寶には行基、慈覺大師、運慶等の彫刻せる佛像七体、舞樂面十枚、聖武帝眞染の勅額、外毘沙門百八体等あり。祭禮は七月十一日より十六日まで行はる。

淨法寺

福岡より五里、鹿角街道の間道にして幽寂なる山間の宿邑なり。源頼朝、奥州平定せし後、畠山庄司次郎の二男を下し、二戸郡を賜ふ。淨法寺松岡修理の祖本田次郎近經の二男、供奉して淨法寺の内を領有す、依りて本田村あり。而して松岡氏の二男僧となり、鎌倉淨法寺に住持たりしが、松岡氏の長男、急病を以て死したるため、還俗して其後を繼ぎ、依つて此地を淨法寺と稱するに至れり。此村及び隣村荒澤地方は古來より優良なる漆を産し、随つて漆器の製作も發達し、近年詩繪傳習

所を置き、これが獎勵改善に努めつゝあり。

南部椀 は赤漆のもの多し、其古作は往々六七百年前の器物尙存す。或は曰ふ、藤原秀衡、工人に命じて創製せしむる所なり。故に後世此器を稱して秀衡椀と云ふと。此椀内は赤色にして外は黒色なり。又黒漆の上に朱漆(青漆、黄漆)を以て花卉、鳥獸を畫き、處々に小截したる金箔を附着し、最も雅致あり。染戸其花草を模倣して布帛を塗れば、乃之を稱して南部模様と云ふ。以て世の愛翫せしを知るべし。其古製のものを稱して正法寺椀と云ふ、江刺郡正法寺にて製せしものなり。後世、二戸郡淨法寺にて漆器を製せしものなり。又南部椀と云ふ。(貿易備考)

荒屋

淨法寺驛の西南四里、二戸郡荒澤村に屬す。岩手郡より秋田縣鹿角を経て津輕地方に至る捷路は之に由る。即ち盛岡へ十五里、花輪へ六里也。荒屋の南には七時雨山、櫻松山、安比嶽等東西に亘り、實に淨法寺川の水源をなす。櫻松山には數十丈の巉岩突兀として聳え、岩窟に不動明王を祀る社殿あり。傍に不動の瀧あり。瀧の流れ七八丈、絶景賞すべし。

淨法寺川 馬淵川の二源にして、荒澤村の安比嶽を發し、南下して荒屋に至り、東北に折れ淨法寺を過ぎ、似

銘 白 白
酒 椿 鹿 鶴
正 宗 約 特

盛岡市川原町

① 近三酒造店

電話番號 二一三番
電信略號 三

新設主幹
盛岡市川原町
盛岡市川原町
盛岡市川原町



盛岡縣酒造會

盛岡縣酒造會

岩手縣物産共進會 壹等賞
群馬縣主催壹府十四縣聯合共進會 貳等賞

(M) 盛岡織物株式會社

鐵製力織機四十五臺 年產額五萬反

電話二百九番

盛岡市中之橋通

甲 龜嶋吳服店

電話五十五番
振替口座東京壹貳七九六

優等清酒

一何々開釀造元 三村井源三本店

盛岡市鉈屋町

燒酎、白酒、味淋
樽詰 瓶詰 卸小賣 勉強仕候

電話五十一
振替口座一九二七九

攝州銘酒

同市肴町

一八自雪發賣元 三村井源三支店

電話三六

特約
銘酒

花王はつ祝樽詰
櫻正宗名勝正宗瓶詰
其他和洋酒類

卸小賣 大勉強仕候

角材
板類
小割
枕木

三外川商店

盛岡市川原町

外川又藏

電話二二三番乙

各酒類發賣元

盛岡市葺手町
木村酒店
電話一三五番

盛一正宗
御代正宗 釀造元

盛岡市仙北組町
木村第一酒造場
電話一三四番

萩正宗釀造元

岩代若松
木村第二酒造場

我友
常盤正宗 釀造元

陸中一關町
木村第三酒造場

元祖南部鐵瓶

盛岡市紺屋町
有木合名店
電話三十九番

豐島式輕便唧筒
東北販賣代理店

盛岡市紺屋町
木村硝子部
電話三九番 振替一五七三

| | | |
|-------|-------|-------|
| 和洋食料品 | 洋食器具 | 諸洋乾洋菓 |
| 洋食器具 | 洋食器具 | 諸洋乾洋菓 |
| 諸洋乾洋菓 | 諸洋乾洋菓 | 諸洋乾洋菓 |
| 諸洋乾洋菓 | 諸洋乾洋菓 | 諸洋乾洋菓 |
| 諸洋乾洋菓 | 諸洋乾洋菓 | 諸洋乾洋菓 |
| 諸洋乾洋菓 | 諸洋乾洋菓 | 諸洋乾洋菓 |

金鷄印ミクル特約店

全一十屋商店

盛岡市六日町
電話 百一十番
振替東京四三〇七番

藥種賣藥
繪具染料
洋酒各種

熊谷本店

盛岡市穀町
振替二〇二八九
電話百〇八番

化學用藥品
化學用器械
賣藥化粧品類

熊谷支店

盛岡市仁王小路角
盛岡停車場前
電話四百廿六番

賣藥化粧品
學校用品
小間物雜貨
板硝子各種

熊谷支店

電話二百五十番

消毒むねはら一切丸
製劑本舖
げにきくと人も岩手山よりも
世に評判の高き靈藥

下風呂湯花縣下
一手販賣
萬小間物紺屋用
學校用品
教育玩具
卸小賣
染糠各種

川中儀商店

盛岡市川原町
電話六四七番甲
振替口座一八四九五

岩手ムスク石鹼
馬印洗濯石鹼
特約

速達至便安全確實を旨とし御取扱



陸中國岩手郡厨川村(盛岡驛前)

内國通運株式會社盛岡取引店

加藤次吉郎

電話百〇九番(電器〇ツ)
振替口座東京貳〇五七番

可申候間陸續御出荷之程奉願上候

奥羽酒醬油樽丸木取製造販賣元



醬油元
釀造



川越千次郎

岩手縣盛岡市志家

電話二二三一番

岩手縣盛岡市肴町

鈴江善四郎

電話二六八番乙

印刷彫刻
ゴム印製造
印肉各種

和洋小間物
化粧品一式

盛岡市中の橋通り

下田中徳藏商店

電話 一六三番
振替東京 壹六參參〇

盛岡市肴町壹丁目

金物商



津木屋

木福商店

電器(キフク)
電話(貳貳七番)
振替東京貳貳五六〇

◎營業品目◎

南部 鐵瓶
燗火鉢。花生類
アルミニウム製品
セト引食料具
杜丹バケツ類
改良竈及風呂釜
銅真中器各種
針金製品各種

床置物各種
神佛具類
セト引洗面器
杜丹引洗面器
鑄物鍋。釜
ストーブ各種
鐵器鑄物各種

資本金拾萬圓

盛岡市鉦屋町九拾五番戶



盛岡製綿株式會社

振替口座東京六二八二番

鉦屋町工場

電話二一八番

餌差小路工場

電話四六二番

本町工場

電話二四番

營業品目

和洋小麥粉 菓子種 折箱袋ペーパ
 和洋菓子 乾物類 金鷄ミルク水飴
 食料品 進物用包物 鹿印平紐竹皮
 諸罐詰素麩 和洋酒

日清製粉株式會社 特約店
 株式會社 森永商店

盛岡市穀町角

十 內村松兵衛商店

電話三五三番 電略(ウ)
 振替口座 一九三七八番

▲三鱗合資會社取引店
 ◎明治運送株式會社取引店

陸中盛岡停車場前

分 成 瀨 運 送 店

電信略號 ナ
 電話 一六一六
 振替口座 九九三五

內外米穀商
精米麥挽割麥製造
陸軍諸官衙御用達

盛岡市馬町

吉田茂吉商店

電話一五二

大澤河原小路

精米場

電話六一四

加賀野小路

精麥場

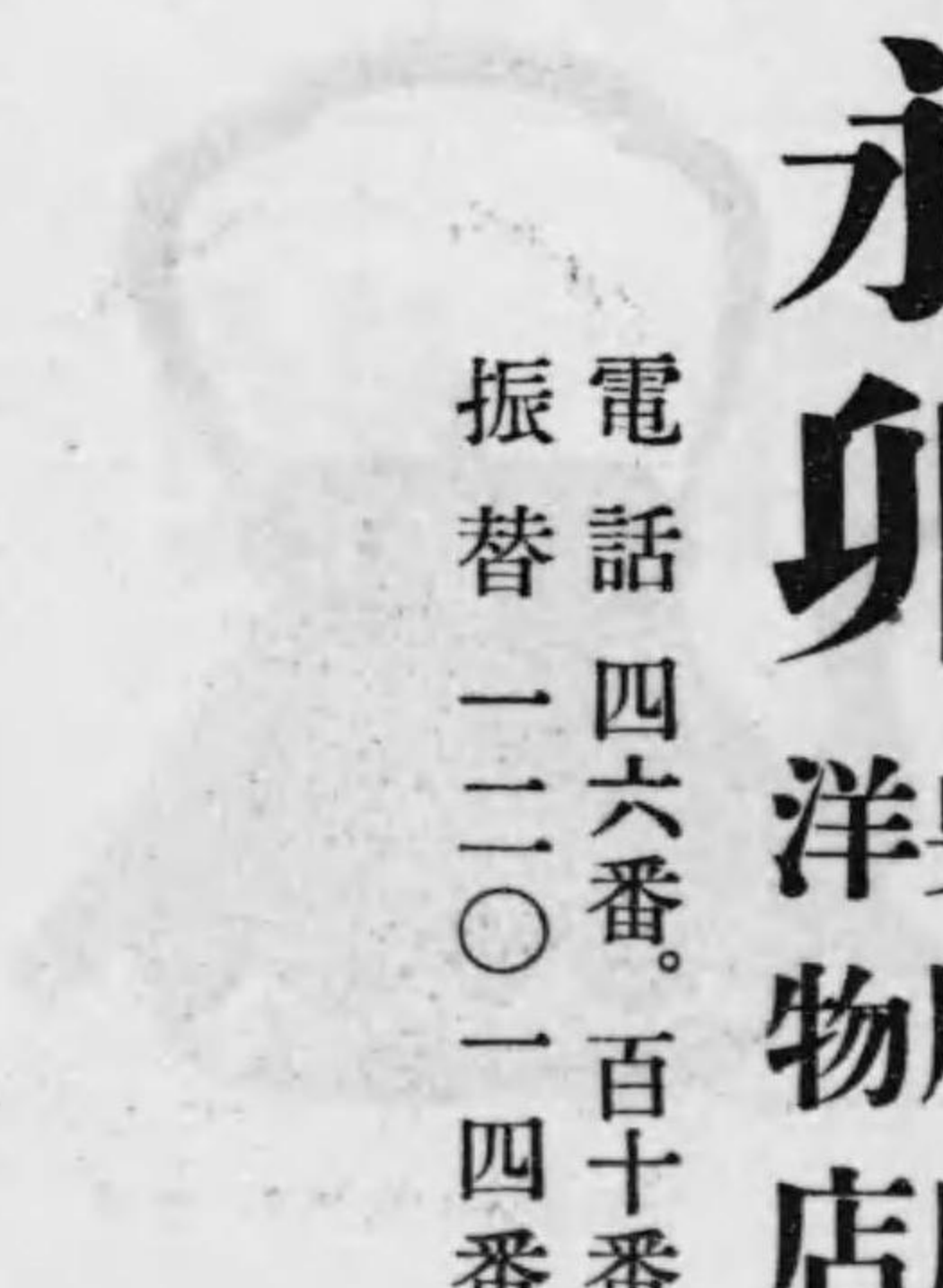
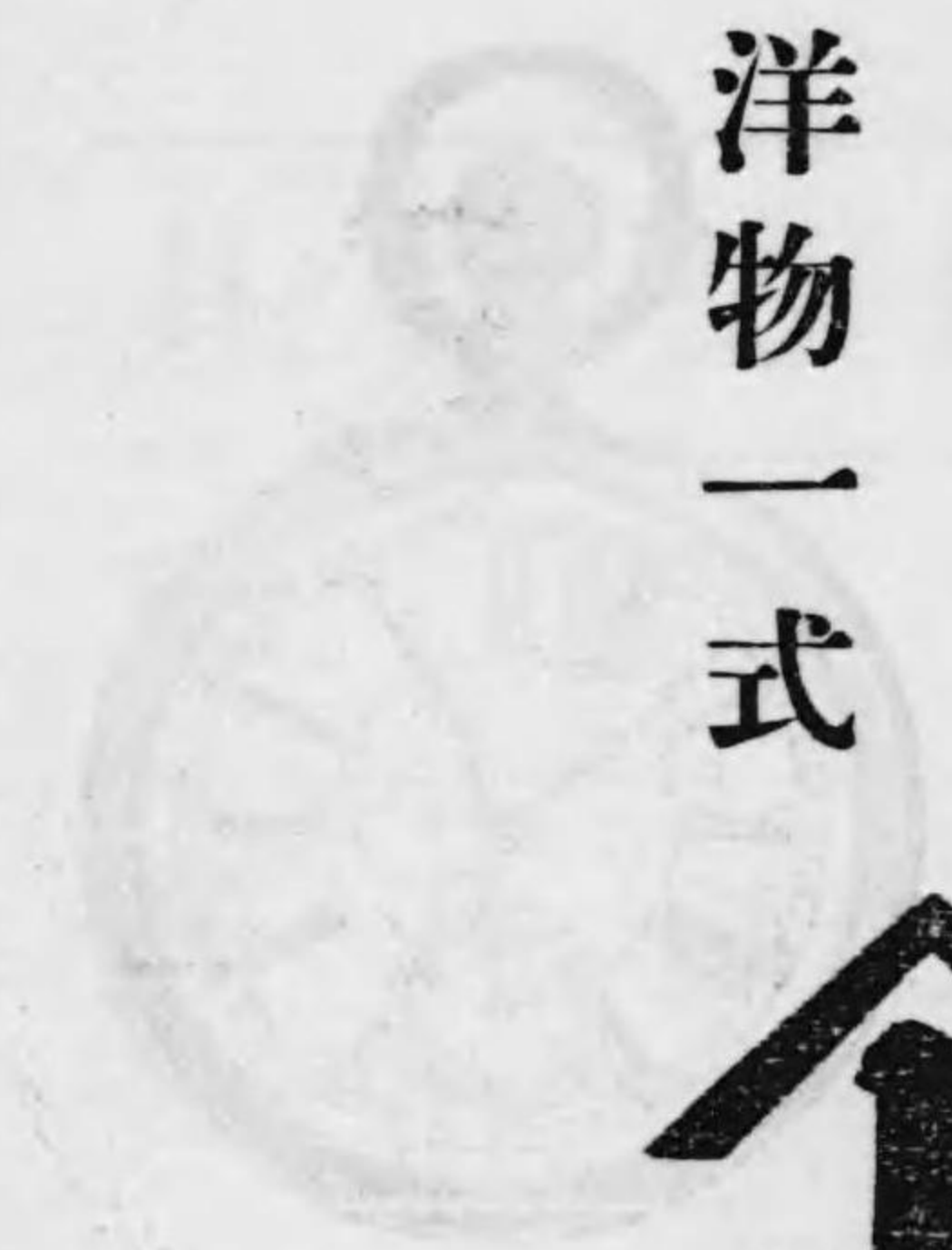
吳服太物
洋物一式

全

永卯洋物店

盛岡市肴町

電話四六番。百十番
振替一二〇一四番



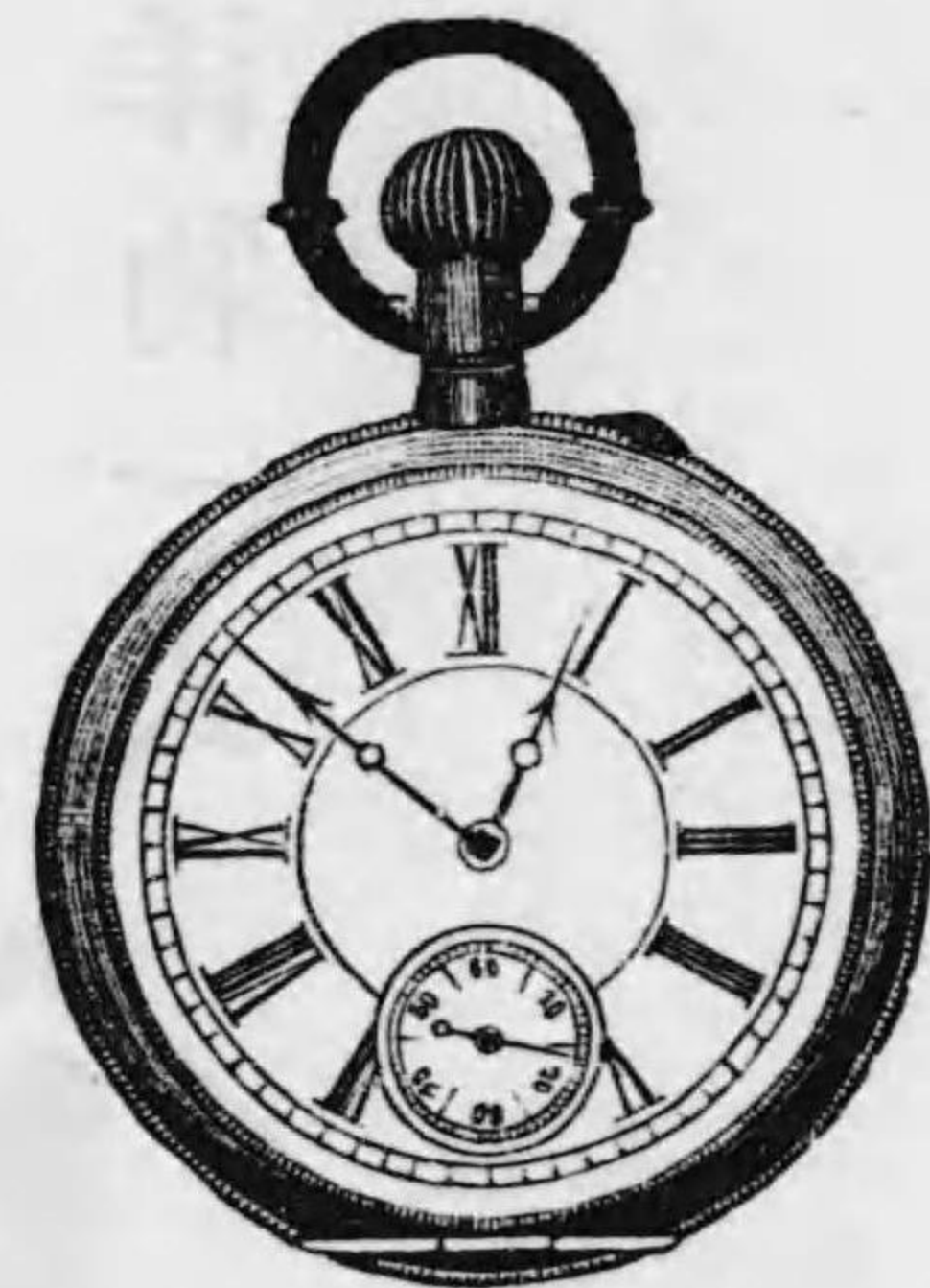
和洋紙文房具
 諸式帳簿
 內外運動具類

盛岡市吳服町

赤澤號

電話六八
 振替七七四四

時計、貴金屬品
 名産南部鐵瓶
 金銀盃、眼鏡類
 金庫、手提金庫



盛岡市中の橋通り

萩野謙三

電話振替口座
 (百九十九番)
 (東京九貳壹五番)





金銀時計類
金銀指輪類
金銀眼鏡類
金銀美術品類
銅鐵洋白綠眼鏡類
雙眼鏡之類
掛置時計類
各種時計附屬品類
其他貴金屬品類

盛岡市肴町

玉置時計店

電話百拾八番

歐米各國流行新式に倣ひ裁縫に精々注意を加へ迅速に調進
可仕候間倍舊の御用命仰付られ度此段伏して奉願上候

洋服裁縫

流行之魁

盛岡市
中之橋通

遲澤洋服店

電話三六一番
振替一八六七

盛岡市
仁王小路

遲澤支店

電話三六三番

騎兵第三旅團
盛岡高等農林學校
諸官衙各學校
御用達

盛岡名産菓子

各府縣博覽會共進會に於て各本舗の受領したる金銀銅賞牌三十餘個

松ノ實糖 豆銀糖 葡萄鉛 林檎羹 片栗雁 黃精飴 翁飴

製 造 本 舗

盛岡市鍛冶町

長澤屋本店

電話三二六番

全市吳服町

長澤屋第一分店

電話三二五番

全市肴町

小西屋菓子店

電話六〇九番乙

其他名物珍菓和洋菓子類卸小賣

鐵鋼材建築金物
諸機械附屬品



木津屋銅鐵店

盛岡市肴町

電話三十四番
振替口座(三二四八)

吳服太物
古着類

盛岡市十三日町

龜屋

三龜半商店

電話百〇四番
振替東京壹八九九參番

- 騎兵第三旅團御用達
- 新形流行靴
- 諸官衙御用
- 學生實用靴

盛岡市 吳服町

對馬製靴店

歐米各國流行新形に倣ひ精々注意を加へ迅速御調進可仕候間倍舊の御用命仰付られ度奉願上候

弊館は市の中央に位し諸會社銀行大商店に御用達最も御便利にして新岩手公園と相對し常に貴顯大臣紳商の御宿泊を致しつゝ有之候

盛岡市 高與旅館 主 中村 助
電話 二六六番

殊に仙臺弘前兩師團の御定宿之指令を賜はり候

明治貳拾壹年參月創業
 資本金 壹百萬圓
 積立金 壹千貳百四拾參萬五千八百廿四圓
 保險契約高 八千四百七拾八萬四千百圓
 被保險人 拾四萬五千四百九拾六人

(明治四十五年七月末日調)

帝國生命保險株式會社

盛岡代理店 佐藤庄助

電話二一五番

岩手縣監督社員 西山理藏

●宅診 午前中及夜間

▲內科

▲小兒科

盛岡市葺手町

工藤醫院

電話一三三番

●往診午後一時ヨリ入院需ニ應ズ

於各府縣博覽會評會特賞受領

木の實餅

名物菓子他各種

和洋御菓菓子調進所

結城屋

盛岡市六丁目・電話三八六番

◎國定教科書取次販賣所

◎度量衡器販賣所

◎和洋雜貨

岩手縣稗貫郡花卷川口町

三津屋

三田新八

振替口座東京壹參〇參六

はかりのいとなほしどころ
桿秤ノ緒紐修覆所

吳服太物類
種々取揃置
申候間多少
に拘らず御
用命仰付ら
れ度願上候

越後屋吳服店

岩手縣盛岡市吳服町

荒川常吉

電話一四五番

登 録 商 標



最上醤油

釀造元 盛岡市 井彌醤油店

本品ハ縣下到ル處ニ販賣店有之候

活版印刷

業 石版印刷

種 洋式帳簿

目 和洋製本

合名 九阜堂 會社

盛岡市内九三十一番戸
電話番號三百二十一番
振替口座東京二一八四八番

内外圖書雜誌
 博物標本
 理化機械類

陸中一ノ關町

文港堂書店

電話百拾番
 振替壹壹九九三番

澤久商店は流行品の供給者なり
 澤久商店は薄利多賣主義の實行者なり
 澤久商店は破格の大勉強者なり

岩手縣黒澤尻町

久澤田久兵衛

小間物 洋物
 化粧品 圖書
 文房具 雜誌

國定教科書取次販賣所
 和賀郡勝景繪葉書發行所
 樂器標本理化學器械取次販賣

●盛岡を距る七里道路平坦車馬通ず春五月十日夕十一月中旬迄開場す●

●盛岡を距る七里道路平坦車馬通ず春五月十日夕十一月中旬迄開場す●



網張温泉

靈泉靈絶妙す百病必す全瘳
薬餌如無驗速ニ來テ浴スル一周ニ

岩手郡西山村

温泉主 澤村龜之助

馬車荷附馬御入用之節ハ盛岡
市外下厨川吉田孝之助方ニ仰
付被下度願上候

●岩手山下にあり、風景絶佳、眺望廣濶、空氣清爽、飲料水又佳也

●神如驗効病諸壯強体身●

純良醬油



酒類醬油味噌造元

盛岡市新穀町

平野八兵衛

電話三五三番



目錄の贈呈
近世獸醫畜産界の名著二百
有餘種を網羅せる目錄を
御申越次第無代にて贈呈す

東京京橋南傳馬町

明治七年 二月創業
有隣堂書店

振替東京六九六番

發送の迅速
弊店が地方の顧客諸君より
毎々多大の御褒辭を蒙るは
發送最も迅速なる一事なり

南部鐵瓶

登錄商標
仁左衛門

盛岡鐵瓶業組合員

御釜屋 小泉仁左衛門

岩手縣盛岡市肴町七拾貳番戶
振替口座 東京 壹貳六壹七番
電話 三五五五番

◎鐵瓶雛形見本帖御入用ノ方ハ郵券拾錢御送附アレ

◎博覽會共進會等ニ於テ數度宮内省御買上ノ榮ヲ賜フ
◎内外國博覽會共進會等ニ於テ最高等ノ賞牌ヲ受領セリ

宮内省御用達

日英大博覽會
名譽大賞
受領

最善是廉

山葉ピアノ

金貳百五十圓以上
金壹千參百圓迄

山葉オルガン

金拾八圓以上
金參百五十圓迄

鈴木ヴァイオリン

金貳圓至錢以上
金壹百貳拾圓迄

●西洋樂器目錄、音樂書目錄御報次第贈呈ス

本樂器は本邦樂界に於て最も信用厚きものにして如何なる酷評家も其優秀なるを否認し能わさるところなり

責任ある最善の樂器を要求せらるゝ諸彦は必ず本樂器を採用せらるそは本樂器を措きて他に求むる能わされば也

日本樂器製造株式會社東京支店

東京 銀座通川町
共益商社
電話新橋三〇七〇
振替東京二一〇七〇

編修總裁大隈伯爵閣下

日本百科大辭典

▲正價 金八拾五圓
全部九卷(索引共)
每卷拾圓・索引五圓

▲送金方法
郵便爲替又は振替貯金
口座東京第一五九七番
御拂込被下度候

日本百科大辭典第六卷發行
斬新の學說と特種の研究の事項とを網羅し精確完全一點の缺漏なからんことを期したる日本百科大辭典第六卷は愈八月廿四日を以て發刊し三萬部限り特賣法を以て發售し來坊間には本書の販賣方法と異なり一巻刊行はれ最廉なる特賣法を以て既成品を供給する確實にして至便なる方法也本書の内容外観共に至美なるに超えはる各卷發售の際に豫定部數に超越せる事實に徴して明かなり
本書は官公衙學校會社圖書館・社寺集會所等に於ける必備品たり政治家教育家學藝家實業家宗教家等の大智囊たるは勿論有らゆる家庭如何なる人士にも不可缺の寶典たる眞價を有するとは噴々の世評と購買者の多方面なることによりて證明し得べし

三省堂書店

岩手縣大賣捌所

盛岡市 文明堂書店

盛岡市 佐藤庄兵衛

陸中國 文港堂

● 農學博士法學博士 增訂 農業本論 定價金二圓五十錢 送料金十六錢

● 澤村農學博士序 最新農教授資料 上卷下卷定價 各金一圓八十錢 送料各金十六錢

● 本多農學博士 畜牛新論 定價金二圓 送料金十六錢

● 横井農學博士 農業新教科書 上下定價各金廿錢 新令に準據 文部省檢定済

● 澤藤久吉氏 算術教科書 定價金二十錢 岩手縣用

東京鐵砲町三日橋區 會社 六盟館 振替口座東京一五二〇番

四二

町村と憂ふる人は必ず書の切望

東京農科大學教授 農學博士 横井時敬先生著 ● 價五拾五錢 送料六錢 ●

小説 摸範町村

既に著者が著者であるから本書の内容の如何に興味あるかは云ふにや及ばん須べからく町村の健全なる發達を計らんとする人士は勿論一般町村事業關係者には必讀の良書なるは世既に定評あり。

岩手縣技師兼農學士 櫻田丑雄先生著 ● 價五拾錢 送料六錢 ●

農村問題と青年

著者は常に農村の青年に就いて憂慮せる士であるは世の等しく認むるところなれば本書の記事は一言一句青年の味ふべき快文字なり農業は國家の柱石にして青年は農村の生命なり敢て發奮を望む所以なり。

發行所 東京市日本橋通三丁目 成美堂書店 振替口座東京一七一九番

四三

◎ 著名大ニの評好 ◎

文部省視學官兼 文學博士幣原坦著
東京帝國大學教授

世界小觀

●本書は、著者が曩に殆ど全世界を巡遊觀察せられたる結果、其の眼に映じたる歴史、地理、政治、文學、教育は勿論、人情風俗等、有らゆる方面の事項を詳叙せられたるものにして、人をして身其の境に在り、眼直に其物を觀るの感あらしむ。挿畫貳百有餘、裝釘頗る美なり。請ふ一讀あれ。

伯爵大隈重信著

國民讀本

●本書は大隈伯爵が畢生の事業として著作せられたるものにして、新時代の新思潮を紹介せられたる好讀本なり。明治天皇及び皇太后陛下の御製、御歌を引用し奉りて事理を闡明せり。好評噴々既に貳百五拾版、眞に得易からざる良著なり。請ふ一本を備へよ。

上製全壹冊
定價金貳圓
送料金拾貳錢

和裝全一冊
定價金四拾五錢
送料金八錢

發兌元 東大市 京阪市 日本橋區 石町後 寶文館

良品に境界無し、丸善インキが山も海も打越へて遠き外國へ盛んに流出するは、この格言を事實に於て説明するもの也。

丸善インキ

願はくは色澤鮮美、保存耐久なる此良品の價値を大に認められんことを、今や丸善インキは確實に世界の保證を得たり。



東京市日本橋區通三丁目

丸善株式會社

2/3425

盛岡市紺屋町

齋藤旅館

電話百六十番

(市ノ中央) 諸官衙公園ニ接近ス

15.3.2
盛岡中学校在徒見之

終